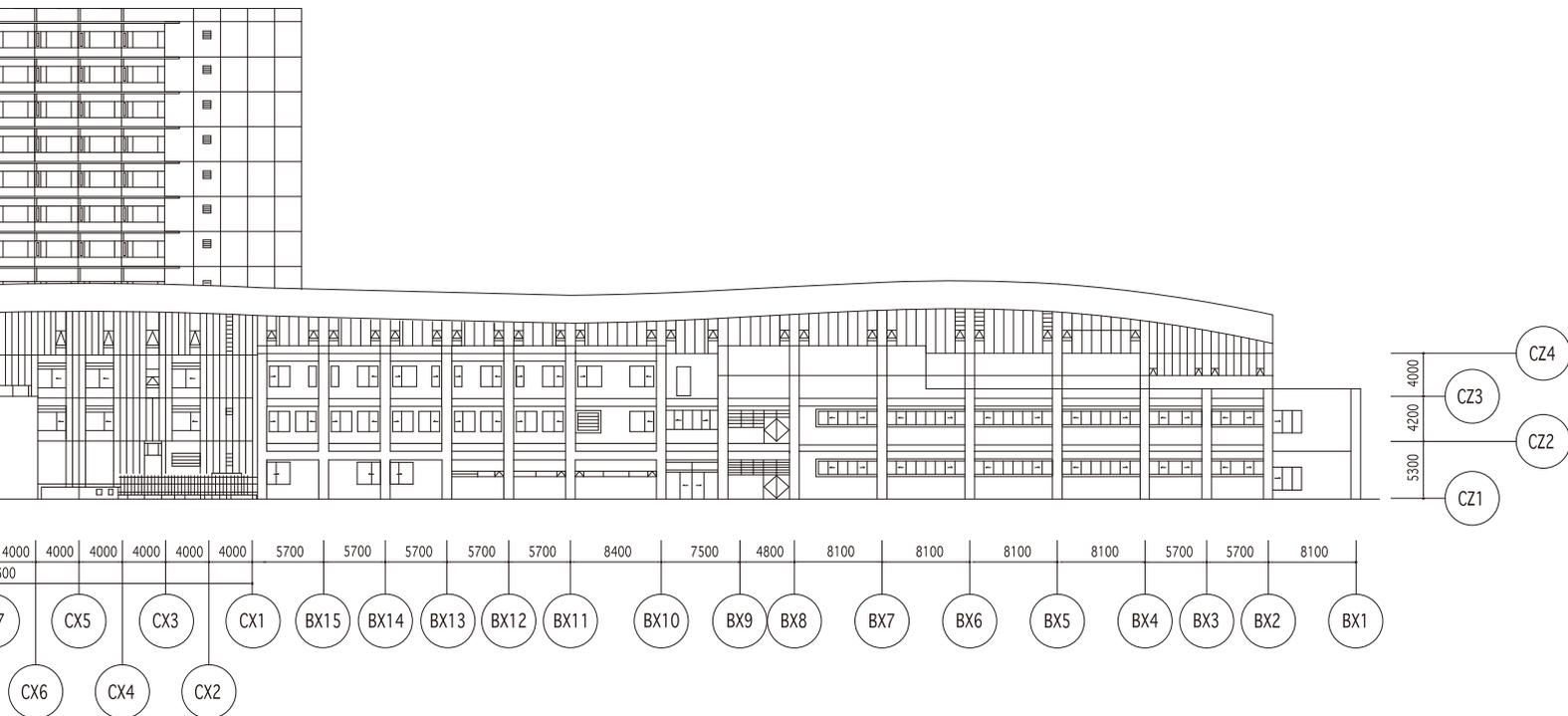


研究者総覧

静岡文化芸術大学2021

Shizuoka University of Art and Culture

'21



'21

静岡文化芸術大学研究者総覧

Shizuoka University of Art and Culture

掲載対象：2021年6月1日現在で本学に在籍する専任教員（教授、准教授、講師）

掲載事項：掲載事項については、スペースの関係で一部の掲載に留めました。詳細は、本学Webサイト教員紹介をご覧ください。（<https://www.suac.ac.jp/education/teacher/>）

目次

- 01 発刊のことば
- 07 学長
- 11 副学長
- 15 文化政策学部／大学院・文化政策研究科
- 19 国際文化学科
- 43 文化政策学科
- 55 芸術文化学科
- 69 デザイン学部／大学院・デザイン研究科
- 73 デザイン学科
- 103 文化・芸術研究センター
- 107 産学官連携のご案内
- 111 索引

発刊のことば

静岡文化芸術大学は、平成12年に文化政策学部とデザイン学部の2学部からなる大学として開学し、平成22年には静岡県が設立する公立大学へ移行しました。この間、2学部の力を合わせ、豊かな人間性との確な時代認識や社会認識をもつ実務型の人材養成とともに、多文化共生を含む文化政策、アートマネジメント、ユニバーサルデザインの三領域からなる研究を推進してまいりました。

そして開学20周年となる令和2年には、「持続する社会のためのグローバルデザイン」という研究推進ビジョンを掲げました。地域と世界をつなぐ学術的、実践的な結び目としての役割を強化しつつ、教育・研究のさらなる充実に努めています。

今後とも、地域文化と産業の振興の一役を担う「拠点施設」として、市民向けのセミナーや公開講座、公開工房などを開催するほか、企業や自治体との共同研究・受託研究などの産学官連携をさらに積極的に進めてまいります。

本学の教員の活動を広く紹介した本書が、企業や自治体を始め地域の皆様の活動のお役に立てば幸いです。

静岡文化芸術大学

学部、学科別 教員一覧

氏名	職位	研究分野	掲載頁
[学長]			
横山 俊夫		文明学、日本文化史、日欧文化交渉史	09
[副学長]			
寒竹 伸一	特任教授	建築設計、都市デザイン、ランドスケープデザイン	12
森 俊太	教授	社会変動論、比較社会論、社会問題論、社会的包摂	13
[文化政策学部／大学院・文化政策研究科]			
学部長			
梅田 英春	教授	民族音楽学、音楽人類学、政策人類学	16
大学院・文化政策研究科長			
加藤 裕治	教授	文化社会学、メディア論	17
《国際文化学科》			
下澤 嶽	教授・学科長	国際協力、NGO	20
池上 重弘	教授	文化人類学、多文化共生論	21
林 在圭	教授	韓国文化、日韓村落社会、日韓比較文化	22
Edward SARICH	教授	言語評価、語彙学習、内容重視授業	23
岡田 建志	教授	東南アジア史	24
佐野 由紀子	教授	日本語学、日本語教育	25
Jack RYAN	教授	第二言語取得 英語教育法、英語コンテンツ授業法	26
鈴木 元子	教授	英米文学、アメリカ文化史	27
瀬戸 知也	教授	教育社会学、特別活動論	28
高木 邦子	教授	教育心理学、パーソナリティ心理学	29
武田 好	教授	イタリア語、イタリア文化	30
永井 敦子	教授	フランス近世都市史	31
西田 かほる	教授	日本近世史	32
二本松 康宏	教授	伝承文学、日本文学（中世）	33
水谷 悟	教授	日本近現代史	34
美濃部 京子	教授	英国口承文芸、伝承文化、現代の伝承	35
俞 嶸	教授	中国経済、開発経済学	36
横田 秀樹	教授	第二言語習得、外国語教育、心理言語学	37
崔 学松	准教授	中国社会、アジア国際関係史、言語社会学	38
武田 淳	准教授	開発人類学、環境と開発	39
徳増 克己	准教授	アゼルバイジャン近現代史	40
西脇 靖洋	准教授	国際関係論	41
中田 健太郎	講師	フランス文学、視覚文化論	42

氏名	職位	研究分野	掲載頁
《文化政策学科》			
森山 一郎	教授・学科長	マーケティング論、流通論	44
小杉 大輔	教授	社会心理学、臨床発達心理学、産業・組織心理学	45
鈴木 浩孝	教授	応用ミクロ経済学、産業組織論	46
田中 啓	教授	行政管理論、行財政改革、評価研究	47
野村 卓志	教授	情報学、情報アーキテクチャ	48
林 左和子	教授	公共図書館児童サービス、ハンガリーの図書館史	49
藤井 康幸	教授	都市・地域計画、まちづくり、創造都市	50
船戸 修一	教授	地域社会学、農村社会学、環境社会学	51
四方田 雅史	教授	経済史、産業史、経営史	52
小林 淑恵	准教授	人口学(仕事・家族・消費)、労働経済、ライフコース研究、教育、および科学技術人材政策	53
曾根 秀一	准教授	経営学、経営戦略論、経営組織論、企業史	54
《芸術文化学科》			
奥中 康人	教授・学科長	音楽学	56
梅若 猶彦	教授	古典芸能、身体哲学、ドラマツルギー	57
片桐 弥生	教授	日本美術史	58
片山 泰輔	教授	芸術支援の社会システム、財政・公共経済	59
立入 正之	教授	比較美術史、芸術産業、文化成立	60
谷川 真美	教授	現代美術、芸術論	61
永井 聡子	教授	演劇史、劇場史、演劇論、劇場及び舞台プロデュース	62
松本 茂章	教授	政策科学、自治体文化政策、まちづくり政策、文化施設研究	63
井上 由里子	准教授	演劇学、西洋演劇史	64
上山 典子	准教授	西洋音楽史	65
高島 知佐子	准教授	アートマネジメント	66
田中 裕二	准教授	博物館学、日本近代史	67
中村 美帆	准教授	文化政策と法・制度	68
[デザイン学部／大学院・デザイン研究科]			
学部長			
宮田 圭介	教授	ヒューマンインタフェース	70
大学院・デザイン研究科長			
的場 ひろし	教授	インタラクシオンデザイン、メディアアート	71

氏名	職位	研究分野	掲載頁
《デザイン学科》			
和田 和美	教授・学科長	インタラクティブ・メディア・アート、Webデザイン	74
伊豆 裕一	教授	デザイン科学	75
磯村 克郎	教授	パブリックデザイン、インダストリアルデザイン	76
岩崎 敏之	教授	建築構造学（主として木質構造）	77
植田 道則	教授	日本固有の美意識を育ててきた建築技術の未来への継承	78
小浜 朋子	教授	高齢者、視覚情報処理、色彩、住宅、公共空間、環境心理	79
亀井 暁子	教授	建築設計、教育空間、学びと空間、地域・都市デザイン、サステナブルデザイン	80
かわ こうせい	教授	絵本イラストレーション	81
黒田 宏治	教授	社会・地域デザイン、地域政策、地域産業論、現代デザイン史	82
佐井 国夫	教授	ビジュアルデザイン諸領域	83
迫 秀樹	教授	人間工学、生理人類学	84
佐藤 聖徳	教授	プロダクトデザイン、道具のデザイン、生活と芸術	85
Jérôme BOULBÈS	教授	映像表現、メディアアート	86
高山 靖子	教授	デザインマネジメント、プロダクトデザイン領域	87
長嶋 洋一	教授	メディア・アート、音楽情報科学	88
永山 広樹	教授	プロダクトデザイン、クラフトデザイン、地域デザイン	89
羽田 隆志	教授	新しい乗りものの研究開発、魅力工学	90
服部 守悦	教授	トランスポーターションデザイン	91
花澤 信太郎	教授	都市の空間構成、空間デザイン	92
日比谷 憲彦	教授	グラフィックデザイン、ブランディングデザイン、サインデザイン	93
藤井 尚子	教授	テキスタイルデザイン領域、日常の中の染織文化、アノニマスデザイン	94
山本 一樹	教授	金属造形、鍛金	95
天内 大樹	准教授	美学芸術学、建築思想史	96
荒川 朋子	准教授	繊維造形、テキスタイルデザイン、テキスタイルアート、世界の染織文化	97
中野 民雄	准教授	建築環境・設備、スマートデザイン、省エネルギー・省資源、BCP・LCP	98
新妻 淳子	准教授	日本伝統建築	99
丹羽 哲矢	准教授	建築設計、空間デザイン、地域・都市・ランドスケープ計画	100
松田 達	准教授	建築設計、都市建築理論、都市計画史	101
池田 泰教	講師	映像表現	102
小田 伊織	講師	木工、漆	103
[文化・芸術研究センター]			
青木 健	教授	イラン学（ゾロアスター教研究、マニ教研究、イスラーム研究）	106

学長



YOKOYAMA Toshio

横山 俊夫

学長

キーワード 文明 節用集 日用百科書 18世紀日本社会 文化交渉史 表現力
科学術語

学歴

京都大学法学部卒業（1970）
京都大学大学院法学研究科政治学専攻 修士課程修了（1972）
オックスフォード大学大学院近代史専攻 博士課程修了（1983）

学位

哲学博士／D.Phil.（オックスフォード大学、1983）

経歴

京都大学人文科学研究所助手（1972～1981）
同 助教授（1981～1998）、同 教授（1998～2012）
京都大学大学院地球環境学学教授・三才学林長（2002～2011）
京都大学副学長（2005～2008）
京都大学名誉教授（2012～）
滋賀大学理事・副学長、附属図書館長（2012～2016）
静岡文化芸術大学学長（2016～）

研究分野

文明学、日本文化史、日欧文化交渉史

研究テーマ

18、19世紀の日本の町村で使われた部厚い「節用集」（和漢字引、礼儀作法指南、教養入門、古い手引などを合わせた日用百科書）を調べて20年あまりになります。全国に残る実物の「手擦れのあと」を見ますと、雅びをめざした人、物見遊山に熱心だった人、神仏の罰におののいて暮らした人など、さまざまな風貌が、地域や職業の違いを越えて浮かんできます。その知見は、文明学の立場から、どのように解釈できるか — これがただ今の関心事です。

研究業績

- ・『*Japan in the Victorian Mind*』（London：Macmillan Press, 1987）
- ・『視覚の一九世紀 — 人間・技術・文明』（編著、思文閣出版、1992）
- ・『貝原益軒 — 天地和楽の文明学』（編著、平凡社、1995）
- ・『ことばの力 — あらたな文明を求めて』（編著、京都大学学術出版会、2012）
- ・『達老時代へ — 老いの達人、へのいざない』（編著、ウェッジ、2013） など

メッセージ

日本文化への私の関心は、1970年にインドネシアの東ジャワの山村に滞在中にのりました。親しくなった村人たちからの質問が増えるうちに、自分が自国のことをよく知らないことに気づいたのです。帰国して、浜松育ちの賀茂真淵が18世紀後半にあらわした『国意考』の太平持続策に出会ったのが研究生生活の始まりです。

東アジアで古くから言われる「文明」とは、「文（あや、うつくしい織物の様）をなして明るく輝く世」を意味しました。地球規模で緊密にかかわりあう現代社会は、あたらしい技術につき動かされ、利便だけでなく闇をも増殖させております。「文明」と呼ぶにはほど遠いまです。他方、江戸中期の日本社会はある程度まで明るく安定していました。小規模な文明化の体験があったと言えます。その事跡には、これからの人類社会を明るくするヒントがありそうです。

近年、科学や技術の用語が専門外の人にはますます通じにくくなっています。このままでは、分野を越えて対話を深め、互いに「文」をなすことは困難です。かたや、芸術家や工芸家の表現力は時に多くの人の心をつなぎます。双方の世界が近づき、大切な感性と知識を深め、世に広める工夫はないものか、共に考えてゆきたいものです。

副学長



KANTAKE Shin-ichi

寒竹 伸一

特任教授、副学長

所属 大学院 デザイン研究科

E-mail kantake@suac.ac.jp

キーワード 建築計画 建築設計 都市計画 ランドスケープ計画
景観・まちづくり計画

学歴

東京大学工学部建築学科卒業（1978）
東京大学工学系研究科建築専門課程修士修了（1980）

学位

修士（建築学）（東京大学、1980）

経歴

丹下健三都市建築設計研究所（1980～1989）
国土庁大都市圏整備局計画課（1985～1987）
丹下健三都市建築設計研究所取締役（1987～1989）
（株）ブラハマアソシエイツ都市建築研究所設立 代表取締役社長（1989～）
静岡文化芸術大学助教授（2002）、教授（2004）、特任教授（2020～）

研究分野

建築設計、都市デザイン、ランドスケープデザイン

研究テーマ

建築と庭園、都市とランドスケープ

研究業績

- ・『建築家のメモ』（共著、丸善（株）、2004）
- ・日本理化学薬品本社（東京、1997）
- ・小林古径美術館（新潟、2001）
- ・福岡銀行西陣・天神・小倉支店（福岡、2002、2003、2004）
- ・佐渡空港基本計画・周辺地区計画（新潟、1994）
- ・豊洲データセンター（東京、2012） など

メッセージ

丹下健三都市建築設計研究所在籍時代には主に海外の仕事も多く担当しました。ナイジェリアでの新都市計画、中近東での王族施設、シンガポールの銀行本店高層ビルなど、約20のプロジェクトに関わり、パリのイタリー広場複合施設、シドニーのワールドスクエア複合施設では、主任建築家として担当しました。

国土庁（現国土交通省）在籍時には、第四次全国総合開発、首都圏基本計画、首都圏整備計画という10年、5年に一度の3大計画を大都市圏整備局計画課首都圏班の一員として担当しました。

1989年に、（株）ブラハマアソシエイツ都市建築研究所を設立し、建築設計・監理から都市計画・地域計画・ランドスケープまで広範囲のデザイン活動を展開して、80を超えるプロジェクトを完成させています。



パリ イタリー広場複合施設



高田駅前広場



シグマハウス



下田城カントリー倶楽部



駒場 K邸



つくし工房



MORI Shunta

森 俊太

教授、副学長

所属 文化政策学部 文化政策学科
大学院 文化政策研究科

E-mail f8#7mori@suac.ac.jp

キーワード 社会包摂 社会変動 社会理論 教育社会学 生きがい

学歴	カリフォルニア大学サンタクルズ校大学院社会学研究科博士課程修了
学位	Ph.D. (社会学) (カリフォルニア大学、1994)
経歴	カリフォルニア大学サンタクルズ校助手、助教、講師 (1986~1988) インパクト・ジャパン株式会社 人材開発コンサルタント (1989~1990) 静岡理科大学 国際文化センター研究員・企画室長補佐 (1991~1996) いわき明星大学人文学部社会学科助教授 (1996~2000) コロラド・カレッジ社会学科/アジア研究学科客員教授 (2001~2012、2018~2019) 静岡文化芸術大学助教授 (2000)、教授 (2004~)
研究分野	社会変動論、比較社会論、社会問題論、社会的包摂
研究テーマ	多様化と格差化について
研究業績	著書 ・『男女共生の社会学』(共著、学文社、1999) ・『生きがいの社会学』(共著、弘文堂、2001) ・ <i>Japan's Changing Generations: Are Young People Creating a New Society?</i> (共著、Routledge Cruzon, 2003) ・『若者と現代社会』(共著、学文社、2005) 他 論文 ・「学期制度と教育効果：日米大学の比較」(『静岡文化芸術大学研究紀要』第3巻、2003) ・「勤労者アンケート調査から見た、静岡県における雇用・労働研究・人材育成を取り巻く諸問題の現状と政策課題」(公益財団法人静岡県労働者福祉基金協会 静岡ワークライフ研究所、2014) ・「教育費の実態と課題：家計の負担と国や自治体、学校の対応に関する調査研究報告書」(公益財団法人静岡県労働者福祉基金協会 静岡ワークライフ研究所、2017) 他
メッセージ	主に日本社会の変化について、社会的包摂、格差化、生きがいなどの視点から研究しています。最近では教育・雇用制度、障害、性的自認・指向について、社会的排除と包摂の視点から調査しています。また、県内の勤労者や企業を対象にした調査研究を行う研究所の客員研究員として、様々なプロジェクトに参加しています。 研修会社で講師をしていた際には、国内外の企業や団体の海外派遣要員や多国籍・多文化の社員を対象に、チームワークやリーダーシップ、問題解決能力育成の研修を担当しました。さらに、学業や研究、ボランティア活動などで海外に長期滞在しており、比較社会・比較文化の視点を養う機会を多く持ちました。このような経験を振りかえりつつ、教育や研究、社会活動に活かすようにしています。

文化政策学部

国 際 文 化 学 科
文 化 政 策 学 科
芸 術 文 化 学 科

大学院

文 化 政 策 研 究 科



UMEDA Hideharu

梅田 英春

教授、文化政策学部長
所属 文化政策学部 芸術文化学科
大学院 文化政策研究科

E-mail h-umed@suac.ac.jp

キーワード インドネシア バリ 音楽 芸能 文化政策

学歴	総合研究大学院大学文化科学研究科単位取得退学（1999）
学位	修士（国際学）（桜美林大学、1996）
経歴	国立音楽大学附属図書館（1990～1999） 沖縄県立芸術大学音楽学部 准教授（1999～2012） 国立民族学博物館共同研究員（2000～2008） 国立民族学博物館連携研究員（2010～2014） 沖縄県立芸術大学附属研究所客員研究員（2012～） 静岡文化芸術大学教授（2012～）
研究分野	民族音楽学、音楽人類学、政策人類学
研究テーマ	インドネシア、バリ島の芸能と文化政策 沖縄・奄美地方の音楽文化政策 日本からインドネシアに伝播した大正琴の変容
研究業績	著書 ・『バリ島ワヤン夢うつつ——影絵人形芝居修業記』（単著、木犀社、2009） ・『バリ島の影絵人形芝居ワヤン』（単著、めこん、2020） 論文 ・“Between Adat and Agama: The Future of the Religious Role of the Balinese Shadow Puppeteer, Dalang.”（単著、 <i>Asian and African Area Studies</i> 5(2), 2006） ・「スカルノ政権下のバリにおける社会主義リアリズム舞踊の再評価」（単著、『沖縄芸術の科学』22号、2011） ・「戦前の日本における大正琴の輸出とそのインドネシアへの伝播」（単著、『静岡文化芸術大学研究紀要』第17号、2017）
メッセージ	以下の4点についてご相談に応じることができます。 1. 地域の特色を生かした音楽・芸能を用いた地域の活性化、街づくり 地域との結びつきの強い音楽や芸能を生かしたまちづくりや、イベントの企画のお手伝いします。 2. 音楽、芸能を生かした観光政策 芸能を観光の「商品」とするためには、伝統的なものをそのまま見せるだけでなく、ホスト側の視点に立ち、新しい芸能の創造も必要になってきます。長年かかわってきたバリ島や沖縄での観光と芸能の事例から、その地域にあった音楽・芸能を生かした観光政策を考えます。 3. 地域のアーツカウンシルの運営 10年以上、アーツカウンシルと関わりをもっています。そうしたノウハウを生かして各市町村のアーツカウンシルの設立、運営についてお手伝いをします。 4. バリ島の伝統影絵人形芝居ワヤンの上演 教員、研究者としてだけでなく、上演者としても一座を運営し、国内、海外を問わず各地でバリ島の伝統影絵芝居ワヤンの上演を行っています。各地のニーズに応じて、レクチャー、ワークショップなどさまざまな形態を含めたさまざまな世代に向けたワヤンの上演が可能です。



KATO Yuji

加藤 裕治

教授、文化政策研究科長

所属 文化政策学部 文化政策学科

E-mail y-kato@suac.ac.jp

キーワード メディアと地域の関係 映像文化 ポピュラー文化 消費文化

学歴	千葉大学社会文化科学研究科博士課程修了（2002）
学位	博士（学術）（千葉大学、2002）
経歴	株式会社文化科学研究所（2004～2012） 早稲田大学総合研究機構プロジェクト研究所文化社会研究所招聘研究員（2008～2012） 静岡文化芸術大学准教授（2012）、教授（2017～）
研究分野	文化社会学、メディア論
研究テーマ	社会におけるメディア文化に関する考察
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・『情報がつなぐ世界史』（共著、ミネルヴァ書房、2018）・『映像文化の社会学』（共著、有斐閣、2016）・『全訂新版 現代文化を学ぶ人のために』（共著、世界思想社、2014）・「『明るい農村（村の記録）』制作過程と「農業・農村」へのまなごしの変容—番組制作者に対する聞き取り調査をもとに」（共著、『マス・コミュニケーション研究』（85）、2014）・『無印都市の社会学—どこにでもある日常空間をフィールドワークする』（共著、法律文化社、2013）・『アンチ・スペクタクル』（共訳、東京大学出版会、2003）
メッセージ	<p>現在、大きく変化するメディア（テクノロジー）に対して、その利便性や活用方法だけに目を向けるのではなく、それが私たちの社会や文化のあり方にどのような影響を引き起こしているのか。その大きなテーマを考察するために、下記の3つの観点から研究を進めています。</p> <p>まず1つめは、映像文化に関する考察です。現代社会のメディア環境は、映像を抜きにしては語れません。従来から存在する映画、テレビに加え、現在ではネットやスマートフォンが中心となり、映像は特別なものではなく、私たちの日常生活に不可欠なものになっています。こうした映像メディアは、私たちの社会に様々なイメージを持ち込み、現実との境界を曖昧にし、その両者を混淆させています。また一般の人々が撮影した映像が、瞬時に不特定多数の人々に共有され、見られるようになるなど、映像に関連した行為そのものが変化しています。こうした映像をめぐる文化の変容から現代社会を理解するために、文化社会学に立脚しながら考察を進めています。</p> <p>2つめは、そうした映像文化の変化を歴史的・具体的に把握するための実証的研究を行っています。最近では他の研究者と共同で、戦後日本のラジオ・テレビ放送、とりわけ地方・地域をテーマにした番組（『明るい農村（村の記録）』NHK、1963-1985）を分析しています。その際、単に番組内容に目を向けるだけでなく、当時の制作者による番組制作プロセスを把握したり、その番組づくりに関わった地域の人々への聞き取り調査を進めています。それにより放送（番組）を単に「情報」として理解するだけでなく、人々に様々な「関係」や「行為」を生み出す能動的な役割を果たすものであったと捉え、その考察を続けています。</p> <p>3つめは、学生とともにメディアに関する実践的活動を行っています。例えば学生が制作するケーブルテレビ番組に対して、様々なテーマ・企画を実行するためのサポートを行っています。また、新聞社と協力して記者の方々や学生が対話する場を開催するなど、地域メディアと学生との橋渡しを行っています。</p>

国際文化学科

異文化を理解し、国際的にコミュニケーション
できる人材を養成。



SHIMOSAWA Takashi

下澤 嶽

教授、国際文化学科長

所属 文化政策学部 国際文化学科
大学院 文化政策研究科

キーワード NGO NPO ボランティア 国際協力 市民社会 フェアトレード

学歴	一橋大学大学院社会学部地球社会専攻博士課程単位取得退学（2010）
学位	修士（社会学）（一橋大学、2005）
経歴	シャプラニール＝市民による海外協力の会事務局長（1988～2002） 国際協力NGOセンター事務局長（2006～2010） 静岡文化芸術大学准教授（2010）、教授（2012～）
研究分野	国際協力、NGO、市民社会、ボランティアリズム、平和構築
研究テーマ	現代社会とボランティアリズム、NGOと国家の関係、日本型市民社会
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・「日本赤十字社、共同募金にみる日本的募金の展開」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第16巻、2015）・『大学における地域貢献活動と活動拠点のあり方の研究』（学長特別研究、2014）・『静岡県遠州地域における企業の社会貢献活動調査報告書』（学部長特別研究、2013）・「地方都市のフェアトレードの現状と展望～静岡のフェアトレード・グループの事例から～」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第13巻、2012）・「バングラデシュ化学肥料と砒素汚染の害」『アジア・太平洋地域のESDの新転換』（明石書店、2012）・『バングラデシュ、チッタゴン丘陵で何が起きているか』（ジュマネット、2012）・「民族対立によるフード・セキュリティの課題とその解決の模索をめぐってーバングラデシュ・チッタゴン丘陵の事例から」（『フード・セキュリティと紛争』大阪大学、2012）・『開発NGOとパートナーシップ 南の自立と北の役割』（単著、コモンズ、2007）
メッセージ	<p>市民がつくる未来社会</p> <p>私は、これまで日本のNGO（Non-Governmental Organization）で20年以上、開発途上国の支援活動の仕事をしてきました。その仕事を通して、市民は国家だけに依存して判断したり、活動をしているのではないことを痛感することが多くありました。また国家以外の空間でつながる市民のネットワークや活動のエネルギーが社会を変えることも、多く目にするようになってきています。NGO、NPO、市民社会、ボランティアが、21世紀の変化を創り出すひとつのキーワードであることは、間違いありません。</p> <p>しかし、こうした市民の変化は一部のヨーロッパや大都市だけなのでしょう。日本には官僚主義が強く、市民の活動は一段低く見られたり、NPOも行政事業の下請け機関として考えられてしまうことがよくあります。また多くの日本人は、民間のボランティア団体やNPOに寄付をすることをあまりすすんでしません。「本当にこの団体は大丈夫かな」といった不安を多くの日本人が持つてしまうのはなぜでしょう。こうした日本社会で、NGOや市民社会的な価値観は本当に広がっていくのでしょうか。さらに日本の地方都市ではどうなのでしょう。</p> <p>「日本型NGO」「日本型市民社会」とは何かを考え、この浜松市で起きていることをとりあげながら、これまでの経験を再考していきたいと思っています。</p>



IKEGAMI Shigehiro

池上 重弘

教授、英語・中国語教育センター長

所属 文化政策学部 国際文化学科
大学院 文化政策研究科

E-mail ikegami@suac.ac.jp

URL <http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/>

キーワード 多文化共生 浜松 外国人 インドネシア バタック 改葬儀礼

- 学歴** 北海道大学大学院文学研究科行動科学専攻課程博士後期課程単位取得満期退学（1991）
- 学位** 修士（行動科学）（北海道大学、1987）
- 経歴** 北海道大学文学部行動科学科助手（1991）
静岡県立大学短期大学部文化教養学科専任講師（1996）
静岡文化芸術大学助教授（2001）、准教授（2007）、教授（2008～）
- 研究分野** 文化人類学、多文化共生論
- 研究テーマ** グローバル化時代における人の移動と多文化社会の形成
日本社会における多文化共生の地域づくり
インドネシア、トバ・バタック社会の文化的動態
- 研究業績**
- ・『ブラジル人と国際化する地域社会—居住・教育・医療—』（編著、明石書店、2001）
 - ・『スマトラの学校時代—あるキリスト教徒の思い出—』（翻訳、現代図書、2002）
 - ・『国際化する日本社会』（共著、東京大学出版会、2002）
 - ・『日本のインドネシア人社会—国際移動と共生の課題—』（共著、明石書店、2009）
 - ・「浜松市と企業・大学・市民による外国人住民受け入れの経緯と課題」（『社会政策』8（1）、2016）
 - ・『移民政策のフロンティア—日本の歩みと課題を問い直す』（共編著、明石書店、2018）
 - ・『文化で地域をデザインする—社会の課題と文化をつなぐ現場から—』（共著、学芸出版社、2020）
 - ・「ブラジル人家族と危機—「1990年体制」から30年の歴史の中で—」（『移民政策研究』13、2021） など
- メッセージ** **生身の社会、人間とかがわる“ライブな学問”としての文化人類学を研究しています**

【社会人の皆さん、企業等の皆さんへのメッセージとして】

インドネシアを中心とした東南アジア島嶼部の社会と文化に関する研究から始まり、「人の移動と文化の動態」という関心を軸足に、地元浜松における多文化社会の形成をめぐる問題に研究上の視野が広がりました。さらに最近では、多文化社会の比較研究という観点から、オーストラリアと日本における外国人（移民）政策とその影響について、インドネシア人コミュニティでのフィールドワークを通じて研究しています。

定住化が進む外国人住民とどのような社会を築きあげてゆくかに強い関心を持っています。講演・ワークショップ等を通じて広く地域の皆さんと接点を持つことを実施しています。

日本における外国人の労働や生活をめぐる課題について、政策面の検討をサポートできます。



LIM Jaegyū

林 在圭

教授、教務部長

所属 文化政策学部 国際文化学科

E-mail imu@suac.ac.jp

キーワード 韓国の生活文化 韓国の食文化 韓国の織物
日韓村落研究 日韓比較文化

学歴	早稲田大学大学院人間科学研究科生命科学専攻博士後期課程修了（1999）
学位	博士（人間科学）（早稲田大学、2001）
経歴	早稲田大学人間科学部助手（1999～2003） 静岡文化芸術大学文化政策学部助教授（2006）、准教授（2007）、教授（2011～）
研究分野	韓国文化、日韓村落社会、日韓比較文化
研究テーマ	韓国農漁村の生活文化、韓国の食文化研究
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・「韓国における「門中」の構造と機能—忠清南道宜寧南氏忠壮公派門中を中心に—」（『日本村落研究』No.9、日本村落研究学会、1998）・「韓国大綱引き祭りの現在—忠清南道機池市綱引きの事例—」（共著、『村落社会のフィールドワーク』、早稲田大学人間科学部村落社会学研究室、2002）・「チブ・家族・家口の様態」（『東アジア村落の基礎構造』、御茶の水書房、2008）・「食べる—食べ物を考える」（『人類学ワークブッカーフィールドワークへの誘い』、新泉社、2010）・「韓国における祖先祭祀の儀礼食と食文化」（『アフラシアの世界』、アフラシア文化社、2012）・「日本における家族の変化と食生活」（『日本の食の近未来』、思文閣出版、2013）・「韓服の特徴と韓国伝統織物の韓山モシの技術伝授伝承」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第14巻、2014）・「韓国における自由貿易協定と6次産業化の現状」（『農の6次産業化と地域振興』、春風社、2015）

メッセージ

専門は韓国文化・韓国語ですが、東アジア特に韓国と日本を主なフィールドとして、村落社会の社会的かつ文化人類学的調査・研究を行っています。私は、異なる文化に生きる人々の生活様式・社会構造・観念体系を照射することによって、特定文化をホリスティックな全体として把握しようと試みています。この目的を達成するために、研究方法としては伝統的な村落社会を対象に、フィールドワークを通じて、その生活様式（文化）の全体像を記述する作業（エスノグラフィの民族誌を書くこと）を続けています。特に最近では、韓国の基層的社会構造と文化的特質を解明するための研究をすすめています。韓国文化は、二重構造（両班の儒教文化の大伝統と民間のシャーマニズムにもとづく民俗文化の小伝統）から構成されているといわれます。そこで長年にわたって、韓国の大伝統としての儒教的な両班文化を解明するために特定地域（忠清南道唐津郡）の伝統的な農民社会の両班マウルと、そして小伝統としての土着的な民俗文化を解明するために伝統的な小規模漁民社会の漁村マウルを対象に、当該村落における生活諸相の究明に取り組んでいます。

一方、韓国文化の理解はあらゆる面で日本との意外な差異や微妙な違いに気づくことが多く、それは日本人にとって自文化理解と自己認識にも多くの手掛かりを与えてくれるはずで、学生諸君には韓国文化の理解を通じて、多角的なもの見方や考え方を養い、地域社会や異文化にも目を向け、相互理解を促進させるという、理解と交流を行う教育をめざして行きたいと思っております。



Edward SARICH

エドワード サリッチ

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

E-mail e-sarich@suac.ac.jp

キーワード Applied linguistics communicative language teaching
language testing and evaluation

学歴	MA (Applied Linguistics) , University of Birmingham (2011)
学位	修士 (応用言語学) (バーミンガム大学、2011)
経歴	静岡大学 (2010~2013) 静岡文化芸術大学 特任講師 (2013)、准教授 (2015)、教授 (2020~)
研究分野	言語評価、語彙取得、内容重視授業
研究テーマ	コミュニカティブ・ランゲージ・ティーチング
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・ “Teacher Perceptions of Standardized Language Testing in Japan.” (単著, British Council New Directions in Language Assessment: JASELE journal special edition, 93-101, 2016.)・ “A guide to planning and executing a TOEIC preparation course.” (単著, The Language Teacher, 38(1), 17-21, 2014.)・ “Obstacles to English Education Reform in Japan.” (単著, 静岡文化芸術大学研究紀要(14), 71-76, 2014.)・ “Accountability and External Testing Agencies.” (単著, Language Testing in Asia, 2/1 26-44, 2012.)・ “Why isn't note taking allowed on TOEIC.” (単著, Shiken: JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter. 15(3), 20-22, 2011.)

メッセージ

私は日本で過ごした25年間のほとんど、中学校、高校、そして現在の大学で英語を教えてきました。教育者として、また日本語学習者としての経験から、言語は効果的な学習と実践的な使用によって最もよく学べるということを知りました。そのため、私は教師としても研究者としても、生徒が効率的な言語学習方略を身につけられるよう支援し、生徒に適切で意味のある言語使用を探求する機会を提供することにキャリアの多くを費やしてきました。そして、それらを研究対象とし、目的主導型の語彙習得、第二言語習得における学習の意味、協調学習の原則に基づいた大学ワークショップの効果的な方法論の開発に関する研究を行い、発表してきました。加えて、アドバイザーとして、複数の大学が集まるワークショップの企画及び実施を支援しています。そこでは、志を同じくする学生が集まり、さまざまなトピックの問題について議論し、その分野の専門家に解決策を提示することで、批判的思考力を高めています。また、現在、日本の英語教育・学習に関する応用言語学の本を共同執筆し、出版予定です。

I have spent most of my 25 years living in Japan as a teacher of English at junior high school, high school and at my current post at university. My experience as an educator and as a student of Japanese has taught me that languages are best learned through effective study and practical use. That is why I have devoted much of my career, both as a teacher and researcher, to helping students develop efficient language learning strategies and providing them with opportunities to explore language use that they find relevant and meaningful. Toward this end, I have presented and conducted research on purpose-driven vocabulary acquisition, on the implications of learning on second-language acquisition, and on developing an effective methodology for English university workshops based on the principles of cooperative learning. I have helped organize and acted as an advisor to several of these workshops, where like-minded students hone their critical thinking skills by discussing issues on a variety of relevant topics and presenting solutions on them to experts in the field. I am also currently co-authoring a book on applied linguistics as it relates to language teaching and learning in Japan.



OKADA Takeshi

岡田 建志

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

キーワード ベトナム近代思想史 ベトナム語 民族運動 文化変容

学歴 東京大学大学院総合文化研究科博士課程地域文化研究専攻単位取得満期退学(1999)

学位 修士(学術)(東京大学、1992)

経歴 大東文化大学国際関係学部非常勤講師(1999)
静岡文化芸術大学講師(2001)、助教授(2005)、准教授(2007)、教授(2014～)

研究分野 東南アジア史

研究テーマ ベトナム近代史

研究業績

- ・「20世紀初頭のベトナムにおける「民族」概念」(『東洋文化』78号、1998)
- ・「『国民読本』における「国」と「国民」—ベトナム近代思想史に関する一考察」(『年報 地域文化研究』2号、1999)
- ・「ルオン・ヴァン・カン一族の家譜」(『ベトナムの社会と文化』1号、1999)
- ・「マイラム義塾—20世紀初頭のベトナムにおける一私塾の実態」(『日本・東アジア文化研究』1号、2002)
- ・「マイラム義塾設立の周辺」(『日本・東アジア文化研究』2号、2003)
- ・「20世紀初頭のベトナム語における外来語使用の実態—ベトナム語による新聞の事例から」(『静岡文化芸術大学研究紀要』第14巻、2013) など

メッセージ

専門は東南アジア史の中でも特にベトナム史です。ベトナムがフランスの植民地であった19世紀後半から20世紀半ばにかけての時代に関心の中心があります。特に思考の大きな転換点の一つである20世紀初頭の時期について研究してきました。当時のベトナムの人々が自らの社会をどのようなものとして認識しどのような将来を構想していたのか、また、それが政治や文化の諸局面にどのように現れたのかといった点に関心を寄せています。

教育の面では、担当科目において、ベトナムを含む東南アジアの社会について歴史的な背景を踏まえた理解を目指しています。



SANO Yukiko

佐野 由紀子

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

E-mail y-sano@suac.ac.jp

キーワード 日本語学 日本語教育

学歴	大阪大学文学研究科博士後期課程単位取得満期退学
学位	修士（文学）（大阪大学、1996）
経歴	龍谷大学 非常勤講師（1997～1999） 同志社女子大学 非常勤講師（1998～1999） 群馬県立女子大学 専任講師（1999）、助教授（2004） 高知大学 助教授（2004～2005）、准教授（2005～2007） 静岡文化芸術大学 教授（2021～）
研究分野	日本語学、日本語教育
研究テーマ	現代日本語の文法
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・「程度副詞と主体変化動詞との共起」（『日本語科学』3 国立国語研究所、1998）・「比較に関わる程度副詞について」（『国語学』第195集 国語学会（現日本語学会）、1998）・「「もっと」の否定的用法について」（『日本語科学』15 国立国語研究所、2004）・「「多い」の使用条件について」（『日本語文法』16巻2号 日本語文法学会、2016）・「外国人介護職員の受入れをめぐる地方の課題について—高知県における日本語学習支援を中心に—」（『現代日本語研究』第12号 大阪大学日本語学研究室、2020）
メッセージ	<p>現代日本語の文法の研究をしています。</p> <p>これまで受けた学校教育の中で、「文法（英文法、国文法）＝暗記＝苦手」と感じてきた人も多いのではないかと思います。しかし言葉の研究は、暗記するものでも、単に理解するだけのものでもありません。普段私たちが何気なく使っている言葉の中に、どのようなルールが潜んでいるかを考えます。</p> <p>例えば、「～は」「～が」——小さな子どもでもうまく使い分けるこれらの助詞について、ではどう違うのか？と日本語母語話者に問うと、うまく答えられる人はほぼいません。母語は無意識に学んだものであり、言葉を「話せる」と「説明できる」ことは異なるためです。</p> <p>以下は、上級レベルの外国人日本語学習者の書いた作文の一部です。</p> <p>私は〇〇大学の〇〇学部に所属しています。</p> <p>現在3年生です。国際金融は私の専門です。</p> <p>これからこの分野についての知識をしっかりと身につけていきたいと思っています。</p> <p>母語話者であれば、下線部分をどのように表現するでしょうか？</p> <p>恐らく「国際金融が私の専門です。」あるいは、「私の専門は国際金融です。」ではないでしょうか。</p> <p>では、どうして不自然に感じられるのか、それを規則としてどのように一般化すればよいのか、また学習者にどのように説明すればよいのか、そんな研究をしています。</p> <p>また、現在は外国人労働者に対する日本語教育にも興味を持っています。特に、地方における介護の分野の技能実習生に対する日本語教育の問題などを調査してきました。今後は、浜松において、様々な方と関わりながら、地域の日本語教育についても考えていければと思っています。</p>



Jack RYAN

ジャック ライアン

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

E-mail j-ryan@suac.ac.jp

キーワード English Medium Instruction, SLA

学歴 MA (Education) , Temple University (1997)

学位 修士 (教育法) (テンプル大学、1997)

経歴 愛知大学豊橋校講師 (2006)
静岡文化芸術大学講師 (2011)、准教授 (2014)、教授 (2019~)

研究分野 第二言語取得、英語教育法、英語コンテンツ授業

研究テーマ 英語教育法、英語コンテンツ授業法

研究業績 著書

- ・『Design English: クリエイターのための闘う英語』 (共著、南雲堂、2016)
- ・『彷徨える魂たちの行方 ソール・ベロー後期作品論集』 共著、彩流社、2017)
- ・『ソール・ベローともう一人の作家』 (共著、彩流社、2019)

論文

- ・ “Expanding Horizons: Scaffolding Techniques for Teaching Global Issues.” (単著、*The 2015 PanSIG Journal Narratives: Raising the Happiness Quotient JALT Pan SIG Proceedings.*, 2015)
- ・ 「Improving Student TOEIC scores via Purpose-Driven Instruction. 目的主導型指導による学生のTOEICスコア向上を目指して」 (共著、『静岡文化芸術大学研究紀要』第16巻、2016)
- ・ 「夏季英語語学研修の効果と効率性: 日記とアンケートによる学生自己評価を通して」 (共著、『静岡文化芸術大学研究紀要』第17巻、2017)
- ・ 「英語と中国の科目選択: ソフトパワーが及ぼす影響」 (共著、『静岡文化芸術大学研究紀要』第18巻、2018)
- ・ 「英語模擬国連の参加準備におけるシミュレーションとロールプレイについて」 (単著、『静岡文化芸術大学研究紀要』第19巻、2019)
- ・ 「eBookを活用した授業の可能性を考える Using eBooks from a College Library in Lecture Courses」 (共著、『静岡文化芸術大学研究紀要』第19巻、2019)

メッセージ

近年、英語コンテンツ授業を研究しています。「英語コンテンツ授業」というのは、以前のように英語を日本語で教えるのではなく、「内容」を中心にして英語を英語で教える授業のことです。つまり、学生は英語を通して時事問題、国際関係、社会問題などを学ぶことができ、一石二鳥です。遠州の多国籍企業の方々のニーズである「即戦力になる人材」を育てるために日々努力しています。



SUZUKI Motoko

鈴木 元子

教授、キャリアセンター長
所属 文化政策学部 国際文化学科

E-mail suzuki@suac.ac.jp

キーワード 英米文学 英語圏文化 ソール・ペロー 翻訳 ユダヤ系文学

学歴 米国ポートランド州立大学 (PSU) (文部省海外派遣留学) (横浜国立大学在学中の1年間)
横浜国立大学大学院教育学研究科修士課程修了
日本大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学

学位 博士 (文学) (大阪大学、2014)

経歴 横浜国立大学、日本大学、専修大学非常勤講師 (1992~1994)
静岡県立大学短期大学部専任講師 (1994)、助教授 (1998~2001)
学外研修制度により大阪大学大学院文学研究科で研修 (2011)
放送大学客員教授 (2012~2017)、日本ソール・ペロー協会代表理事 (2015~)
静岡文化芸術大学助教授 (2001)、教授 (2004~)
日本ソール・ペロー協会会長 (2020~)

研究分野 英米文学、アメリカ文化史

研究テーマ ソール・ペローの文学研究、英語圏文学・文化、翻訳論

研究業績

- ・『ソール・ペローともう一人の作家』 (共著、彩流社、2019)
- ・『アメリカン・スタディーズ入門』 (共著、萌書房、2003)
- ・『アメリカ文学史新考』 (共著、大阪教育図書、2004)
- ・『エチオピアのユダヤ人』 (単訳、明石書店、2005)
- ・『移動する英米文学』 (共著、英宝社、2013)
- ・『ソール・ペローと「階級」：ユダヤ系主人公の階級上昇と意識の揺らぎ』 (単著、彩流社、2014)
- ・『ユダヤ系文学と「結婚」』 (共著、彩流社、2015)
- ・『ラヴェルスタイン』 (ソール・ペロー著、鈴木元子訳、彩流社、2018) 他多数

学術論文

- ・ "Spain in American Literature: An Analysis of the Works of Irving, Hemingway, Bellow, and Brown." (*Language, Individual & Society, Journal of International Scientific Publications*, vol. 14, 2020, pp. 50-60, scientific-publications.net/en/article/1002120/.)
- ・ "The Intercourse Between Japan and Southeast Asia—Centering on Shusaku Endo's *Silence*." (*China-USA Business Review*, vol.18, no.2, Apr.-June, 2019) 他多数

メッセージ

文化的資本 (the Cultural Capital)

アメリカのノーベル文学賞受賞作家ソール・ペローは小説のなかで、若い頃に形成した文化的資本は生涯その人を助け、潤わせると述べている。30年も前の言葉だが、現在の日本人にぴったり当てはまるような気がしてならない。経済的資本も大切だが、それだけでは脆弱であることが、昨今の出来事で明らかになってしまった。

具体的な大学教育の現場に話を転じてみると、グローバル人材の育成が早急に求められている。これまでも英米の協定大学に留学した学生がTOEICのスコアを300点程も伸ばしているのを見てきた。それだけ学生は柔軟な可能性を秘めている。これからの英語は、“English as a Global language”として、受信するだけでなく発信していく能力を身につける必要がある。ゆえに、英語の4技能が測れるIELTSやTOEFLの受験を奨励している。さらに、観光英語検定も。

ゼミではソール・ペローの文学作品を原書で味読しているが、小説内で言及される実在の人物や歴史的事件、ブランド名、店名、都市について調べることで、文学研究から文化研究への展開が可能で、さらに現実世界と虚構世界の往来のみならず、時空を越えた外国の住人にもなり得る。

“That poets—artists—should give new eyes to human beings, inducing them to view the world differently, converting them from fixed modes of experience.”
(Saul Bellow)

学生には、世界を今までとは違ったふうに見ることができるように、刺激を与えていきたいと思う。若いうちに「新しくものを見る眼」を養い、将来、世界を相手に活躍できる人材 (players in the world) に育ってほしいからである。



SETO Tomoya

瀬戸 知也

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

E-mail t-seto@suac.ac.jp

キーワード 教育問題 学校文化 子どもの社会化 キャリア教育
ナラティブ・アプローチ

学歴	筑波大学大学院修士課程教育研究科修了（1982） 筑波大学大学院博士課程教育学研究科中退（1984）
学位	修士（教育学）（筑波大学、1982）
経歴	常葉学園大学教育学部助手・専任講師・助教授（1984～1996） 宮崎大学教育学部助教授・准教授（1996～2010） 静岡文化芸術大学教授（2010～）
研究分野	教育社会学、特別活動論
研究テーマ	教育問題の社会学、学校文化の社会学、特別活動の理論と実践
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・『学校文化の社会学』（共著、福村出版、1993）・『生徒指導・特別活動の理論と実践』（共著、明治図書、1994）・『＜教師＞という仕事＝ワーク』（共著、学文社、2000）・「不登校ナラティブのゆくえ」（『教育社会学研究』68集、2001）・「子どもの社会的自立と学校・家庭の連携」（『教職研修総合特集』No.174、2007） など
メッセージ	<p>本学（静岡文化芸術大学）に着任するまでの職歴としては、最初に常勤で勤めた大学は、静岡県にある私立大学の教育学部でした。そこで12年間「教育原理」や「教育学」「教育社会学」等の教職関連科目の授業を担当し、「教育実習」等の運営実施に継続的にかかわってきました。その間、研究活動としては、社会構築主義的な研究視点からいじめ問題や業者テスト問題など教育問題に関する研究及び学校文化（教室文化）に関する社会学的研究をするとともに、静岡県や静岡市の特に生涯学習関係者の方々と連携し、様々な調査研究の仕事に従事させていただきました。</p> <p>次に、宮崎県にある国立大学（現在は国立大学法人）の教育学部に転任し、14年間勤務しました。ここでは、専門分野である「教育社会学」や「特別活動論」等の教職関連科目の授業を担当するとともに、「教育実習」や様々な体験学習の運営実施にかかわってきました。研究活動としては、社会構築主義的関心を継続するとともに、「ナラティブ・アプローチ」という研究視点への関心を深め、不登校問題や少年犯罪問題等の教育問題に関する研究や学校文化研究の一環として「特別活動」の理論と実践をめぐる諸問題を検討しました。ここ数年は、キャリア教育に関する諸問題への「ナラティブ・アプローチ」の応用の可能性と課題について検討を続けています。また、宮崎県や宮崎市において、学校教育及び生涯学習の各関係者との連携協力による様々な調査研究活動に従事させていただくこともできました。</p> <p>そしてこのたび縁あって再び静岡県にある本学（静岡文化芸術大学）に勤務する機会を与えていただきました。本学では、授業担当としては、「教育学」や「教育課程論」等の教職関連科目を担当するとともに「教育実習」の運営実施を担当します。研究活動としては、これまで積み重ねてきた社会構築主義・「ナラティブ・アプローチ」の立場からの教育問題や学校文化の研究を継続したいと考えています。また、同時に、学校教育や生涯学習等の各関係者の方々との連携協力による様々な調査研究活動にも従事したいと考えています。</p>



TAKAGI Kuniko

高木 邦子

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

キーワード 青年期の対人関係 有能感 キャリア教育

学歴	名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）単位取得後退学（2005）
学位	博士（教育心理学）（名古屋大学、2005）
経歴	聖隷クリストファー大学助教（2007） 聖隷クリストファー大学准教授（2010） 静岡文化芸術大学准教授（2011）、教授（2020～）
研究分野	教育心理学、パーソナリティ心理学
研究テーマ	青年期に特徴的な「仮想的有能感」の機能と形成 否定的対人感情の形成および修正要因 専門職養成課程の職業的社会化
研究業績	論文・解説・著書 ・「文化と心理学」（共著、『国際文化学への第一歩』、すずさわ書店、2013） ・「苦手な人とかわる」（共著、『コンピテンス—個人の発達とよりよい社会形成のために』、ナカニシヤ出版、2012） ・「感情経験」、「他者認知」、「親との関係」（共著、『仮想的有能感の心理学』、北大路書房、2012） ・「現代の学生気質とその対応」（単著、『作業療法ジャーナル』4(4)、2010） ・Effects of age and competence type on the emotions: Focusing on sadness and anger, <i>Japanese Psychological Research</i> , 49(3), 2007.
メッセージ	現在の関心は主に、以下3つです。 ・ 青年期の対人関係における否定的対人感情について 他者に対して感じる苦手意識や嫌悪といったネガティブな感情に焦点をあて、その形成過程や影響要因について研究しています。近年は、大学生が否定的対人感情を形成した他者とどのようにつきあっているのか、その関係性の持ち方に関心があります。 ・ 有能感の様相と形成要因、さまざまな影響について “自分は能力のある人間だという自覚”である有能感は、私達の行動に広く影響することが知られています。有能感の形成には、成功経験や、他者に受容/承認される経験などが影響することが知られています。その一方で、自分の能力に自信がなく周囲の人を見下すことで自分の有能さを意識する「仮想的有能感」と呼ばれる状態があることも指摘されています。こうした有能感のさまざまな様相の形成と働きについて、広く関心を持っています。 ・ 職業的社会化について 重要性が指摘されている「キャリア教育」の目的とは、早期に希望進路を決めることではなく、社会人として生きていくために必要なさまざまな能力（ex.コミュニケーション力、課題発見・解決能力、柔軟性など）を身につけることにあります。職業に就いた人が、これらの能力を発揮して職業に適応していく過程を整理したいと考えています。かつては専門職に注目していましたが、現在は職業を限定せず、また転職などの決断も含めたさまざまなキャリアパスの流れにも関心を持っています。



TAKEDA Yoshimi

武田 好

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科
大学院 文化政策研究科

キーワード イタリア語 ヴェリズモ・オペラ マキアヴェッリ 君主論

学歴 大阪外国語大学大学院外国語学研究科イタリア語学専攻修了（1987）

学位 修士（文学）（大阪外国語大学、1987）

経歴 相愛大学非常勤講師（1986～2006）
神戸新聞文化センター（神戸日伊協会）講師（1988～2000）
桃山学院大学非常勤講師（1993～2003）
NHK神戸文化センター講師（1995～2015）
NHKラジオイタリア語講座講師（1998～2009、2018～2020）
神戸女学院大学非常勤講師（2001～2006）
星美学園短期大学専任講師（2007～2009）
慶應義塾大学非常勤講師（2007～2014）
星美学園短期大学准教授（2010～2013）
NHK教育テレビイタリア語会話講師（2012～2013）
静岡文化芸術大学准教授（2014）、教授（2016～）

研究分野 イタリア語 イタリア文化

研究テーマ マキアヴェッリと『君主論』
19世紀イタリアオペラ、イタリア語教材開発

研究業績

- ・『イタリアオペラを原語で読む カヴァレリア・ルスティカーナ』（単著、小学館、2004）
- ・『100分de名著 君主論 マキャベリ』（単著、NHK出版、2012）
- ・『マキアヴェッリ全集第5巻、第6巻』（共訳、筑摩書房、1999、2000）
- ・『マキアヴェッリの生涯 その微笑の謎』マウリツィオ・ヴィローリ著（単訳、白水社、2007）
- ・『これならわかるイタリア語文法 入門から上級まで』（単著、NHK出版、2016）

メッセージ イタリア語の教材開発と500年前のフィレンツェに生きたマキアヴェッリ、19世紀のイタリア社会とオペラに深く関心を寄せています。『君主論』から見るルネサンス文化を研究するほか、NHKラジオ講座（計16期）、Eテレのイタリア語講座（計4期）ではコミュニケーションのための言葉と生活文化、オペラを扱いました。

さて、国家について語るとき、政局が云々されるとき、しばしば登場するのがマキアヴェッリの名です。『君主論』は数世紀の時を超えて読み継がれる名著です。マキアヴェッリはルネサンス期の栄華を誇るフィレンツェ国の外交官でした。彼の外交文書を翻訳する機会を得たことから、特に当時の外交関係に注目しています。

古代ローマから16世紀中葉までヨーロッパ文化の中心であったイタリアは、世界で最も多くの世界遺産を有する国です（2020年時点で55）。1861年のイタリア統一からおよそ一世紀の間に2600万人の移民を送出しましたが、1970年代半ばから移民受け入れ国に転じました。「移民送出国」と「移民受け入れ国」の経験を持つ先進国であり、世界に広くイタリア系移民のコミュニティが存在しています。イタリア語は、英語、スペイン語、中国語に次いで世界で4番目に多く学ばれている言語です。

イタリア語を学ぶことは文化と芸術にダイレクトに結びついています。学びの切り口は、芸術、デザイン、EU、観光、移民、キリスト教、都市、教育、食文化と多様です。ヨーロッパを基軸とする価値観を知ることが、日本文化を背景に持つ私たちにとって、多極化した世界を考える一助となると考えています。



NAGAI Atsuko

永井 敦子

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

E-mail anagai@suac.ac.jp

キーワード フランス近世史 都市 文化 ポリス（治安行政） ルーアン

学歴	北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学（1996）
学位	修士（文学）（北海道大学、1993）
経歴	日本学術振興会特別研究員（1996） 静岡文化芸術大学講師（2004）、准教授（2007）、教授（2014～）
研究分野	フランス近世都市史
研究テーマ	近世（近代初期）における都市の新たな秩序の形成過程と、その中での祝祭の機能
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・「1540年ルーアンの謝肉祭」（『北大史学』34号、1994）・「16世紀ルーアンにおける総行列」（『西洋史論集』2号、1999）・「16世紀ルーアンにおけるテ・デウム」（『西洋史学』197号、2000）・「16世紀ルーアンの都市行政に関する一考察」（『北大史学』41号、2001）・「16世紀ルーアンの都市防衛体制に見る治安行政と祝祭」（『歴史学研究』813号、2006）・紹介：近代フランス（『史学雑誌 2009年の歴史学界—回顧と展望—』119-5、2010）・『十六世紀ルーアンにおける祝祭と治安行政』（単著、論創社、2011）・『15世紀末から16世紀までのフランスにおける治安行政：policeの用語法から』（『静岡文化芸術大学研究紀要』第17巻、2017）
メッセージ	<p>私の専門領域は、近世フランス史、最も狭くは16世紀にルーアンという都市で挙行されていた祝祭の記録文書を解読することです。カーニヴァルなど愉快的なもの、国王を迎える入市式、宗教的なパレードもあります。そもそも当時、都市の支配層が祝祭の挙行に熱心であった理由は、都市の住民構成を知るためにパレードに並ばせるのが最も有効な方法だったから、というのが私の1つの仮説です。都市民を管理するための住民台帳などがなかった時代のことです。こういった研究から、まず近世フランスの国制、日常生活、世界観へと視野を広げたいと思っています。野心としては、未来につながる柔軟な発想をひきだす手がかりになれば良いと思っています。</p> <p>というのも近世という、市民革命と産業革命以前の時代には、ヨーロッパ人でさえ近代とも現代とも違う考え方をしていました。しかし近代には西洋中心主義的な文明観が影響力をもち、その文明観を日本も明治以降に受けいれましたが、国家も社会も市民も近代西洋のように進歩する、あるいはそれを目標に進まなければならない、という見方をされました。さて20世紀後半に近代文明の限界が明らかになり、我々はそれまでの目標を失いました。しかし失われた目標が、西洋においても近代以降のせいぜい200年しか続かなかったのですから、我々は自由な発想をしましょう。歴史を研究するのはそのためかもしれませんが、あるいは無用の好奇心なのかもしれません。</p>



NISHIDA Kaoru

西田 かほる

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科
大学院 文化政策研究科

キーワード 近世 宗教 神職 神子 芸能者

学歴	学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位修得退学（1994）
学位	博士（史学）（学習院大学、2020）
経歴	学習院大学非常勤講師（1999） 山梨県立女子短期大学非常勤講師（2001） 東京都立大学非常勤講師（2002） 静岡文化芸術大学講師（2004）、助教授（2006）、准教授（2007）、教授（2012～）
研究分野	日本近世史
研究テーマ	宗教者および芸能的宗教者の身分形成について
研究業績	著書 ・「甲斐・信濃の陰陽師」（梅田千尋編『新陰陽道叢書3近世』名著出版、2021） ・『近世甲斐国社家組織の研究』（山川出版社、2019） ・「多様な身分—巫女」（高埜利彦編『近世史講義—女性の力を問い直す』筑摩書房、2019） 論文 ・「近世遠江における親王由緒—木寺宮をめぐる—」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第21巻、2021） ・「近世中期における甲斐国陰陽師の動向」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第16巻、2016）
メッセージ	<p>私はこれまで、江戸時代における宗教者の存在形態について検討してきました。その中でも、甲斐国や信濃国など中部地域の神職や富士山御師・芸能的宗教者を対象としています。芸能的宗教者とは、占考を行う陰陽師や竈祓を行う神事舞太夫、口寄せを行う神子（みこ）、あるいは夷職や笹（ささら）など、各地を廻り祈祷や門付芸能などを行う者です。</p> <p>宗教や信仰は日本の文化や社会を読み解く重要な鍵であり、宗教者の活動は人々の心性や文芸・芸能のみならず、経済・流通あるいは交通や観光といった多様な問題とも深く関わっています。また、前近代は身分制の社会ですが、身分がどのようなものであるのかについて、宗教者を素材に検討してきました。特に神子などの女性宗教者を通して、日本社会における女性のあり方についても考察しています。今後は、三遠南信地域の宗教者についても検討してみたいと考えています。</p> <p>また、学生の時から史料の整理・調査活動に取り組んできました。蔵の中で忘れ去られている古文書などの保存状況を記録し、一点一点封筒に収納し、古文書に書かれた年号や内容をデータ化する作業です。史料は地域の歴史や文化を知る重要な記録ですが、今日、社会状況の変化や自然災害などによって廃棄や滅失の危機にさらされています。東南海地震などに備えるといった観点からも、静岡県内における史料の整理活動に取り組んでいきたいと考えています。</p>



NIHONMATSU Yasuhiro

二本松 康宏

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

E-mail y-niho@suac.ac.jp

キーワード 伝承文学 諏訪信仰 甲賀三郎 昔話 伝説 鷹狩り

学歴	立命館大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期課程 学位取得修了 (1998)
学位	博士 (文学) (立命館大学、1998)
経歴	大阪外国語大学～大阪大学非常勤講師 (1998～2008) 大谷女子大学～大阪大谷大学非常勤講師 (1998～2006) 日本学術振興会特別研究員 (1999～2002) 立命館大学非常勤講師 (2001～2010) 関西外国語大学非常勤講師 (2002～2008) 甲南大学非常勤講師 (2006～2008) 静岡文化芸術大学講師 (2008)、准教授 (2011)、教授 (2016～) 静岡県立大学非常勤講師 (2018～2020)
研究分野	伝承文学、日本文学 (中世)
研究テーマ	中世諏訪信仰の総合的研究、北遠の民話、放鷹文化
研究業績	【軍記文学関連】 ・『曾我物語の基層と風土』 (単著、三弥井書店、2009) ・『中世の軍記物語と歴史叙述』 (共著、佐伯真一編、竹林舎、2011) ・『古典文学の常識を疑うⅡ—縦・横・斜めから書きかえる文学史—』 (共著、松田浩・上原作和・佐谷真紀人・佐伯孝弘編、勉誠出版、2019) 【諏訪信仰関連】 ・『中世の寺社縁起と参詣』 (共著、徳田和夫編、竹林舎、2013) ・『諏訪信仰の中世』 (福田晃・徳田和夫・二本松康宏編、三弥井書店、2015) ・『諏訪信仰の歴史と伝承』 (二本松康宏編、三弥井書店、2019) 【民話関連】 ・『水窪のむかしばなし』 (二本松康宏監修、三弥井書店、2015) ・『みさくぼの民話』 (二本松康宏監修、三弥井書店、2016) ・『みさくぼの伝説と昔話』 (二本松康宏監修、三弥井書店、2017) ・『たつやまの民話』 (二本松康宏監修、三弥井書店、2018) ・『春野のむかしばなし』 (二本松康宏監修、三弥井書店、2019) ・『春野の昔話と伝説』 (二本松康宏監修、三弥井書店、2020) ・『北遠の災害伝承—語り継がれたハザードマップ—』 (二本松康宏監修、三弥井書店、2021)
メッセージ	私の専門は「伝承文学」です。文学の生まれいつる風景、文芸を支える環境、そうした伝承の基層とそこに秘められた”謎”を解き明かします。重視するのはフィールドワークによる実証的検証です。 研究テーマ ◇諏訪縁起の風景 信州・諏訪大社の中世神話「甲賀三郎物語」について、その生成を支えた在地の風景を追っていきます。 ◇春野の民話 浜松市天竜区春野町で昔話の採録をしています。 ◇異形の文学 「水神の片腕」「天井裏の神秘」「戌亥の聖域」「暗闇の朝廷」など、従来の文学のジャンルにとられない研究をしています。



MIZUTANI Satoru

水谷 悟

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

E-mail s-mizu@suac.ac.jp

キーワード 日本近現代史 「大正デモクラシー」 民主主義と大衆社会
近代日本の新聞・雑誌メディア 地方青年の言語空間

学歴 筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科（史学（日本史）専攻）単位取得退学（2003）

学位 博士（文学）（筑波大学、2014）

経歴 東洋英和女学院中学部・高等部 社会科専任教諭（2004～2016）
静岡文化芸術大学准教授（2016）、教授（2021～）

研究分野 日本近現代史

研究テーマ 集団の思想史（政治・思想・文化・生活・メディア・教育・地域社会）

研究業績 著書
・『雑誌『第三帝国』の思想運動—茅原華山と大正地方青年』（単著、ベリかん社、2015）
・『カナダ婦人宣教師物語』（共著、東洋英和女学院、2010）
・中野目徹編『近代日本の思想をさぐる—研究のための15の視角』（共著、吉川弘文館、2018）第1講「結社—益進会と大正地方青年」を執筆
・中野目徹編『官僚制の思想史—近現代日本社会の断面』（共著、吉川弘文館、2020）第三部〈行動と批判〉「デモクラシーからファッショへ—室伏高信の官僚論」を執筆
論文・解説
・「日露戦争期の本郷教会—「会員原簿」と雑誌『新人』の分析から」（単著、『近代史料研究』17号、日本近代史研究会、2017）
・「地方の青年雑誌資料—「足で書く」メディア史をめざして」（単著、『メディア史研究』45号、メディア史研究会、2019）

メッセージ これまで私は、近代日本における思想集団の結成と雑誌メディアによる思想運動の展開、それを支持した読者の実態を、政治・思想・文化・メディア・地域等の観点から解明してきた。主な例を挙げると、海老名弾正【牧師】率いる本郷教会に通う帝大生を中心とした新人会と雑誌『新人』（1900年創刊）、日露戦後に村井弦斎【作家】を編集顧問に迎えた婦人世界社と雑誌『婦人世界』（1906年創刊）、地方青年を結集し普選運動を展開した茅原華山【ジャーナリスト】ら益進会と雑誌『第三帝国』（1913年創刊）、第一次大戦後に反戦・平和を謳った小牧近江【思想家】ら種蒔き社と雑誌『種蒔く人』（1921年創刊）などである。

思想・言論の内容を重層的かつ多角的に捉えることは、日本の文化・社会の本質をつかむ上で重要であり、それらを発信している牧師・作家・ジャーナリスト・思想家らの存在は当時の政治・法律・経済・教育・生活・メディア・地域社会などの動向とも深く関わっている。今後も、「思想集団」「雑誌メディア」「読者」という三者の関係に注目しながら、個人と社会、中央と地方、日本と世界などをつなぐ思想的連関を一つ一つ解き明かし、「集団の思想史」研究を築いていきたいと考えている。

加えて、思想史研究で疎かにされがちである基礎的な史料調査を実施している。現在、静岡県下（浜松・掛川・藤枝・川根本町など）においてフィールドワークに取り組み、地域史料論ならびに地方ジャーナリズム論の分析を進めている。

また、教育の面では、担当授業により歴史学・日本史学の面白さを伝えるとともに、特にゼミでは「研究発表」「史料調査」「卒業論文」への指導を通してゼミ生たちが自らの意見を表現し議論することの大切さを知り、物事を歴史的に捉え、建設的な批判と創造的な提案ができる人物に成長していくためのサポートを心がけている。共に頑張りましょう！



MINOBE Kyoko

美濃部 京子

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

E-mail minobe@suac.ac.jp

キーワード イギリス 口承文芸 昔話 バラッド マザーグース

学歴 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程 比較文化学専攻 単位取得満期退学 (1990)

学位 修士 (国際学) (広島大学、1987)

経歴 大谷大学特別研修員 (1990)
静岡県立大学短期大学部 講師 (1991)
静岡県立大学短期大学部 助教授 (1999)
静岡文化芸術大学助教授 (2001)、准教授 (2007)、教授 (2010～)

研究分野 英国口承文芸、伝承文化、現代の伝承

研究テーマ 英国の昔話とバラッド
アメリカに渡ったイギリスの伝承
イギリスと日本の子どもの伝承
世界の口承文芸の比較

研究業績

- ・『昔話で親しむ環境倫理 エコロジーの心を育む読み聞かせ』(共著、くろしお出版、2009)
- ・『「大きなかぶ」はなぜ抜けた? 謎とき世界の民話』(共著、講談社、2006)
- ・「アメリカに渡ったジャック話」(『説話・伝承学』第17号、2009)
- ・「マザーグースと昔話」(『マザーグース研究』第4号、2000)
- ・「学生に聞いた伝承 俗信・都市伝説・わらべうた」(『静岡県民俗学会誌』第19号、1998) など

メッセージ

私の研究について

「イギリスの昔話を勉強したい」というところから始まった私の研究ですが、それがいつの間にかマザーグースやバラッド、スコットランドのトラベラーの伝承、アメリカのイギリス系住民の伝承、日本のわらべうた、都市伝説へとだんだん広がってきました。イギリスの中でもイングランド地方は本格的な魔法昔話の伝承が乏しいとよく言われます。周辺のスコットランドやアイルランドなどではケルト系の人たちの伝承を中心に豊かな伝承が見られるのに、イングランドでは笑話や伝説はそこそこあっても、昔話については周辺の国と比べて見劣りがします。けれども、バラッドの形で伝承されている面白い話があったり、そうしたバラッドが昔話や伝承童謡であるマザーグースと関連が見られることがわかってきました。またスコットランドでもゲール語圏ではなく英語圏にトラベラーと呼ばれる今でも生きた昔話の伝承を守っている人たちがいたり、アメリカに渡ったイギリス系住民の中では「ジャック話」と呼ばれる豊かな伝承があったことも知りました。それは、イングランドにおいて記録には残っていないけれど、かつてイングランドにも昔話の豊かな伝承があったことを証明するものではないでしょうか。

日本ではバラッド研究者はバラッドだけ、マザーグースはマザーグースだけ、昔話は昔話だけというように、それぞれの専門で分かれてしまって、それらが関連付けられて扱われることが少ないように思います。実際の伝承の中では昔話の語り手がバラッドも歌うことがありますし、そのほかのフォークソングや子どもの歌も同じように伝承しています。そうしたジャンルの壁を取り払わないと本当の伝承の姿は見えてこないのではないのでしょうか。私はそのような立場からジャンルにこだわらずに広い意味での口承文芸を探っていきたいと考えています。

また日本においては伝承の昔話の語り手はどんどん少なくなっていますが、学生の話や話を聞いていると、噂や都市伝説と呼ばれる話や、わらべうた、迷信などはまだまだ生きた伝承として残っていることが実感できます。伝承の形態は変わっても、言葉による伝承自体がなくなることはないということから、現代における伝承の実態にも目を向けていくつもりです。



YU Rong

俞 嶸

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

キーワード 経済成長 格差問題 中国の財政構造 中国の政府間財政関係
中国の地域振興

学歴	名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程修了（2006）
学位	博士（学術）（名古屋大学、2006）
経歴	愛知大学国際中国学研究センターCOE研究員（2006～2007） 静岡産業大学講師（2007～2010） 愛知大学国際問題研究所客員研究員（2007～2014） 静岡文化芸術大学講師（2010）、准教授（2013）、教授（2021～）
研究分野	中国経済、開発経済学
研究テーマ	中国の格差問題、財政構造
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・『中国経済ハンドブック2004』（共著、全日出版、2003）・『変わる中国、変わらない中国』（共著、全日出版、2003）・「中国における少数民族地域の財政力格差」（単著、愛知大学国際問題研究所紀要第140号、2012）・「都市農村一体化」政策の一考察—浙江省における都市・農村間所得格差の変遷を通して—」（単著、『静岡文化芸術大学研究紀要』第14巻、2014）・「初期分税制期間における中国の公共投資の地域間配分 —1994～2000『基本建設投資』を通しての考察—」（単著、『静岡文化芸術大学研究紀要』第15巻、2015）・「中国における省級以下の財政移転支払の一考察 —浙江省と陝西省の県級財政の比較を通して—」（単著、『静岡文化芸術大学研究紀要』第18巻、2018）
メッセージ	<p>私の専門は開発経済学です。経済発展を図る開発途上国で起きているさまざまな経済問題を分析し、発展への道筋を模索する、経済学の一分野です。具体的には、中国経済、特に中国の格差問題、財政問題を中心に研究しています。これまで中国の財政構造の転換、中央・地方間の政府間財政関係の変遷に着目して、拡大する中国の所得格差の背後に潜む構造的要因を分析してきました。</p> <p>中国での調査も重ねてきました。格差を是正する難しさを痛感するとともに、その中でも柔軟な発想で地域の振興や格差と貧困の解消に努める現場の方々の姿勢に深く感銘を受けており、研究のヒントを得ることも多くあります。</p> <p>研究者として、格差は経済成長とどのように関わっているのか、格差を生み出すメカニズムはどのように変化しているのかは私の関心の所在です。学問は人のためであり、人はみんな平等である。このことを常に念頭に置きながら、研究の道を歩んでいきたいです。</p>



横田 秀樹

教授

所属 文化政策学部 国際文化学科
大学院 文化政策研究科

E-mail h-yoko@suac.ac.jp

キーワード 言語習得 言語学 生成文法 英語教育 文法習得

学歴	University of Essex, Ph.D. in Language & Linguistics
学位	博士（言語学）（University of Essex、2011）
経歴	三重県公立高等学校 教諭（1988～2006） 岐阜医療科学大学 専任講師（2006～2009） 金沢学院大学 准教授（2009～2013） 静岡文化芸術大学教授（2013～）
研究分野	第二言語習得、外国語教育、心理言語学
研究テーマ	言語学（主として生成文法の枠組み）に基づき、第二言語がどのように習得されるのか、そのメカニズムを調べています。同時に、第二言語はどのように学習すると効率がいいのか、そしてどのように教えると効果的なのかも研究しています。
研究業績	著書 ・『第二言語習得研究の波及効果: コアグラマーから発話まで (第二言語習得研究モノグラフシリーズ 4)』 (共著、くろしお出版、2020) ・『言語習得研究の応用可能性 ―理論から指導・脳科学へ (第二言語習得研究モノグラフシリーズ3)』 (共著、くろしお出版、2019) ・『英語教育の素朴な疑問-教えるときの「思い込み」から考える』 (共著、くろしお出版、2014) 論文 ・“The investigation of the feature inheritance hypothesis in second language acquisition” Chapter Four. (<i>Language Acquisition and Development – Proceedings of GALA 2017</i> , Cambridge Scholars Publishing、共著、pp.65-81、2018 (査読有)) ・“Acquisition of Goals for Wh-Movement by Japanese L2 Learners of English.” (共著, <i>Second Language</i> , Vol.11, pp.59-94, 2012 (査読有))
メッセージ	私の研究の関心の一つは、ヒトの「こころ・脳」の仕組みの中の言語に関わる側面を解明することです。そのため、この分野は心理言語学と呼ばれています。もう一つは、それをもとに、どうすれば外国語を効率よく習得できるのかを研究する外国語教育にも関心があります。 第一言語（母語）は、一般的には誰でも習得が可能（北川・上山 2004）ですが、第二言語（外国語）習得の場合は、成功の保証はなく困難をとまいません（Bley-Vroman 1989）。よく12歳ころまでに外国語学習を始めるといいということが聞かれますが、大人になってから始めてもほぼ完全に習得できているケースもありますし、外国語初級学習者であっても最初から比較的簡単に習得できる文法項目や、逆に上級学習者になっても習得が難しい文法項目があることなどが先行研究から分かっています。しかしながら、このような第一言語と第二言語の習得の根本的な違いはどこから来るのか、最も肝心なところがまだよく分かっていません。私の研究はそのメカニズムの解明を中心としていますが、同時に、応用として新しい外国語の学習・教授方法を考え出すことも重要な研究だと考えています。



CUI Xuesong

崔 学松

准教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

E-mail g-sai@suac.ac.jp

キーワード 東アジアの社会と文化 多文化共生のプロセス
異文化コミュニケーション

学歴	一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程修了 (2011)
学位	博士 (言語社会学) (一橋大学、2011)
経歴	一橋大学特別研究員 (2011～2014) 東京大学非常勤講師 (2012～2014) 香港大学・シンガポール南洋理工大学・マラヤ大学客員研究員 (2012～) 台湾大学・The University of British Columbia客員研究員 (2014～) 静岡文化芸術大学講師 (2014)、准教授 (2017～)
研究分野	中国社会学、アジア国際関係史、言語社会学
研究テーマ	アジアの国際連帯活動、多民族多文化社会の共生
研究業績	<ul style="list-style-type: none">『中国における国民統合と外来言語文化』 (単著、創土社、2013)『Asian Community and Coexistence in Multi-Ethnic and Multi-Cultural Contexts』 (共著、Kelaniya University, Press、2013)『変容する華南と華人ネットワークの現在』 (共著、風響社、2014)『アジアの相互理解のために』 (共著、創土社、2014)『歴史・文化からみる東アジア共同体』 (共著、創土社、2015)『「アジア共同体」—その創成プロセス』 (共著、日本僑報社、2015)『アヘンと近現代アジア』 (共著、創土社、2018)
メッセージ	<p>近年、アジアにおいて経済分野の相互依存は急速に進んでいますが、このことが相互の信頼醸成には結び付いていないという課題が浮き彫りになりました。私がこれまで研究対象としてきたマイノリティ社会は、グローバル化した社会に生きる私たちに、国家ありきを越えるような新しい視点、柔軟な発想をいかに持つべきかのヒントを与えてくれました。自分の根っこは守りつつも、他者を柔軟に受け入れ共生の道を探る生き方があります。</p> <p>今や国籍や民族など国家ありきの視点よりも、大切なのはむしろ、個々の問題にどのような立場から、どのように対応するかということであり、そうした立場の違いを自分で考え選びとっていくことのできる賢知が求められています。そして、そうした視点をもつことでこそ、多くの国際問題をよりウィンウィンに近づけ、平和的に解決に導く対話と判断ができるようになるのではないのでしょうか。日本も中国も、「はざま」や「周辺」におかれているマイノリティ社会から学ぶべき点があるように思います。</p> <p>私が世界に関心を持ち始めた中学時代、欧米の若者が日本アニメに熱中し、日本の若者がK-POPを楽しみ、中国の若者がユニクロの服を着る時代が来るなど誰が予想できなかったでしょう。東アジア国際関係が円滑でない今日こそ、中国や韓国など周辺地域と積極的にかかわりながらグローバル化の時代にたくましく生きる知恵が求められているのではないかと思います。今後とも、多民族・多文化共生をキーワードに国と企業と心の壁を越える活動を通じて、皆さんと一緒に考えていきたいです。</p>



TAKEDA Jun

武田 淳

准教授

所属 文化政策学部 国際文化学科
大学院 文化政策研究科

キーワード 国際協力 環境問題 貧困 フェアトレード エコツーリズム

学歴 横浜国立大学大学院 環境情報学府 博士後期課程修了 (2016)

学位 博士 (学術) (横浜国立大学、2016)

研究分野 開発人類学、環境と開発

研究テーマ 環境保全をめぐる国際協力、貧困削減とフェアトレード

研究業績 著書

- ・「消費を通じたSDGsへの貢献—『環境化するフェアトレード』を事例に」(日本環境学会『人間と環境』46(3)、2020)
- ・「withコロナ時代の環境研究の意義」(日本環境学会『人間と環境』46(3)、2020)
- ・「『平和でない観光は成り立たない』という言説は正しいか?—治安と観光の関係性をめぐる試論」(日本国際観光学会『日本国際観光学会自由論集』4、2020)
- ・「Clean energy policy in Costa Rica」(NHK高校生講座編『コミュニケーション英語Ⅲ 学習メモ』、2020)
- ・「コスタリカのウミガメ観光における地域ガバナンス—積極的平和構築のツールとしての観光研究へ向けて」(『日本国際観光学会論文集』25、2018)

メッセージ

私は、開発途上国の環境問題と貧困問題を研究してきました。研究地域はコスタリカ(中米)とパプアニューギニア(オセアニア)、専門は文化人類学です。これまで合計4年間ほど現地に住み込みで調査をしながら、現地の人々にとって国際協力とはどうあるべきかを考えてきました。

現場の視点から社会を眺めると、私たちの「当たり前」が揺さぶられることが多々あります。例えば、自然環境を守ることは「いいこと」かもしれませんが、現場では自然を守るために自然保護区を作ったところ、住民が強制退去に合い、貧困に陥るなどの問題が生じています。

決して、自然を守ることや、貧困対策を否定しているわけではありません。重要なのは「どのように」支援をするべきなのか、それを問い続けるべきだ、ということです。国際協力は、対象となる地域の人々のために行われるものだからです。

そこで、大きく2つのテーマに注目しています。一つはビジネスを通じた国際協力です。フェアトレードやエコツーリズムなど、市場メカニズムを活用した問題解決の可能性を探っています。最近では、学生と共同で新たなフェアトレード商品の開発をしたり、地元企業と協働でエシカル消費に関する教材を作成するなど、実践活動も行ってきました。

もう一つのテーマは、文化に関することです。私がフィールドワーク中に実感するのは、文化の中に、相互扶助のシステムや自然を守るための知恵が内包されていることが多いということです。ですから、文化を守ることも持続可能な社会の実現に資するかもしれません。社会の「発展」の仕方は多様であっていいはず。『持続可能な社会』のヒントを一緒に考えましょう。



TOKUMASU Katsumi

徳増 克己

准教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

学歴	東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1999）
学位	修士（学術）（東京大学、1991）
経歴	静岡文化芸術大学専任講師（2000） 静岡文化芸術大学助教授（2005）、准教授（2007～）
研究分野	アゼルバイジャン近現代史
研究テーマ	20世紀前半のアゼルバイジャン政治史
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・「イランとソ連の狭間で—アゼルバイジャン国民政府の一年」（『解放の光と影 1930年代～40年代』岩波講座世界歴史第24巻、岩波書店、1998）・翻訳:マスード・カールシェナース「革命以降のイランにおける石油と経済発展」（原隆一・岩崎葉子編、『イラン国民経済のダイナミズム』、日本貿易振興会アジア経済研究所、2000）・「アゼルバイジャン語」（小杉泰・林佳世子・東長靖編、『イスラーム世界研究マニュアル』、名古屋大学出版会、2008）・「「中東」地域—その認識と理解のために」（静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科編『国際文化学への第一歩』、すずさわ書店、2013） など
メッセージ	<p>自己紹介にかえて</p> <p>中学時代に報道されたイランでの革命をきっかけに中東地域とイスラームに関心を持つようになりました。学部学生時代に中東地域の研究を志すようになりましたが、上記の経緯もあり当初はイラン史研究を目指していました。</p> <p>大学院進学後、イラン国内に占めるアゼルバイジャン人口の多さとその歴史的役割の重要性に気づき、折からのソ連解体過程におけるコーカサス地域での民族紛争の激発とも相俟って、現行の国境線にとらわれることなくアゼルバイジャン語の話者が暮らす地域の歴史について研究をすることで民族／国民などに関わる問題全般を考える際のヒントが得られるのではないかと思います。その際に目をつけた人物がロシア革命直後のアゼルバイジャンの国家元首でイラン・トルコ両国でも活躍したラスールザーデであり、この人物の足跡をたどることで1世紀近く前のこの地域の民族形成・国民国家形成などの問題について研究していこうと決意しました。その後、トルコ共和国への留学経験により、現行の国境を越えた人的なネットワークの分析の重要性を再認識することとなりました。</p> <p>本学では、イスラームに関する講義やアラブ地域やバルカン半島に関する授業をも担当することとなったため、以前より一段と広い視野からものを見ることができるようになりました。本学で日々感ずることは、中東やイスラームについて日本人はあまりにも知らなさすぎるということです。古代文明以来、常に多言語・多宗教の複雑な社会を形成してきた中東地域ですが、未だ中東はアラブ人のイスラーム教徒一色の世界という平板なイメージを持っている人が多いのは残念です。他方、民族や既存の国家を確固たるものと考えがちな日本人の思考法ではこの地域のことは理解できません。授業には以上のことに留意して臨んでいますが、学外の方でこの地域をどう捉えたらよいのかわからないという方はお気軽にお問い合わせください。</p>



NISHIWAKI Yasuhiro

西脇 靖洋

准教授

所属 文化政策学部 国際文化学科

キーワード 南欧諸国 ポルトガル語圏諸国 地域統合

学歴	上智大学外国語学部ポルトガル語学科卒業（2001） （ポルトガル国立）労働経営大学（ISCTE）大学院国際関係史学専攻修士課程修了（2005） 東京外国語大学大学院地域文化研究科ヨーロッパ第二専攻博士前期課程修了（2006） 上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻博士後期課程満期退学（2009）
学位	博士（国際関係論）（上智大学、2010）
経歴	在ポルトガル日本国大使館専門調査員（2002～2004） 日本学術振興会特別研究員（2008～2010） 上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科特別研究員（2010～2013） 上智大学グローバル教育センター特別研究員（2013～2015） 山口県立大学国際文化学部国際文化学科准教授（2015～2020） 静岡文化芸術大学准教授（2020～）
研究分野	国際関係論
研究テーマ	南欧諸国の政治と外交、ポルトガル語圏諸国の国際関係
研究業績	・『引揚・追放・残留—戦後国際民族移動の比較研究』（共著、名古屋大学出版会、2019） ・『新・世界の社会福祉4—南欧』（共著、旬報社、2019） ・『帝国の遺産と現代国際関係』（共著、勁草書房、2017） ・「Spanish and Portuguese Citizens' Attitude towards European Integration: The Role of "History" on the Perception Formation」（『日本EU学会年報』第34号、2014） ・「ポルトガルのEEC加盟申請—民主化、脱植民地化プロセスとの交錯」（『国際政治』第168号、2012）
メッセージ	私は政治学および国際関係論を専攻し、ポルトガルを中心としたポルトガル語圏諸国の対外関係について中心的に研究を行ってきました。熱海市とポルトガルのカスカイス市は、現在、姉妹都市の関係にあります。また、静岡県や浜松市はブラジル移民との共生を一つの課題として掲げています。私は、以上のようにポルトガル語圏諸国と密接な関連性を有するこの静岡県や浜松市において、自らの研究をさらに発展させていきたいと考えています。



NAKATA Kentaro

中田 健太郎

講師

所属 文化政策学部 国際文化学科

キーワード フランス文学 シュルレアリスム 視覚文化論 マンガ

学歴	東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程修了
学位	博士(学術) (東京大学、2015)
経歴	日本大学経済学部非常勤講師 (2013~2019) 國學院大學文学部兼任講師 (2015~2019) 高千穂大学兼任講師 (2016) 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻フランス小地域研究室教務補佐員 (2017~2018) 東京大学教養学部非常勤講師 (2017~2019) 早稲田大学社会科学総合学術院非常勤講師 (2017~2019) 立教大学文学部兼任講師 (2019) 静岡文化芸術大学講師 (2020~)
研究分野	フランス文学、視覚文化論
研究テーマ	アンドレ・ブルトンにおけるオートマティスムの概念、シュルレアリスム以降の現代詩・現代美術
研究業績	<ul style="list-style-type: none">『マンガ視覚文化論 見る、聞く、語る』(共編、水声社、2017)『マンガを「見る」という体験 フレーム、キャラクター、モダン・アート』(共著、水声社、2014)『ジョルジュ・エナン 追放者の取り分』(単著、水声社、2013)「オートマティスムの声は誰のもの? ブルトン、幽霊、初音ミク」(『声と文学 拡張する身体の誘惑』、平凡社、2017)「理論の見る夢 オートマティスムの歴史」(『思想』、2012年第10号)
メッセージ	<p>私は、フランスではじまった文学・芸術運動である、シュルレアリスムについて研究をしています。とくに調査対象としているのは、シュルレアリスムの根本概念とされる、オートマティスム(自動現象)です。シュルレアリスムの詩人・芸術家たちは、このオートマティスムの概念にもとづき、意識をはなれて自動的に生まれてくる詩や美術を探究していました。</p> <p>「自動的に生まれてくる詩や美術」などというと、まったく浮世ばなれをした話に思われるかもしれませんが、社会のさまざまな面が機械化し、自動化するなかで生きている現代人にとって、オートマティスムはなじみ深いものでもあります。たとえば、ぼんやりとスマホの画面をいじりながら、思わぬようなことを書いてしまった、といった話はよく聞かれます。インターネットに接続された家電によって、思わぬうちに電気がつき気温が調節され、生活自体がいくらか自動的になったと感じている方もおられるでしょう。情報技術によって、オートマティックな言葉や行動の領域は、日に日に拡大しているとも言えます。</p> <p>私の研究はこのオートマティスムを出発点としながら、シュルレアリスム以降の現代文学や現代文化へと広がってきました。たとえば、エジプトの現代詩人について研究をしてきましたし、いまは、ハイチ出身の現代画家について調査をしています。また、シュルレアリスムがさまざまな視覚文化と関係をもってきたことを念頭におきながら、マンガやアニメーションについても批評文を書いています。シュルレアリスム以降の現代文学・文化にたいするこうした研究が、オートマティスムの概念を現代の人間性にかかわる問題として引きうけるものになればと願っています。</p>

文化政策学科

政策・経営・情報から新たな人間と社会のあり方を探求できる人材を養成。



MORIYAMA Ichiro

森山 一郎

文化政策学科長、教授

所属 文化政策学部 文化政策学科
大学院 文化政策研究科

E-mail i-mori@suac.ac.jp

キーワード マーケティング戦略 小売流通 地域産業 地域ブランド

学歴	慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程修了（1992） 千葉商科大学大学院政策研究科博士課程単位取得満期退学（2005）
学位	修士（経営学）（慶應義塾大学、1992）、博士（政策研究）（千葉商科大学、2008）
経歴	株式会社ダイエー（1983～1995） ディズニーストア・ジャパン株式会社（1995～1997） 日本コカ・コーラ株式会社（1997～2008） 浜松大学ビジネスデザイン学部（2008～2013） 静岡文化芸術大学准教授（2014）、教授（2016～）
研究分野	マーケティング論、流通論
研究テーマ	マーケティング戦略、流通システム、地域ブランディング
研究業績	<ul style="list-style-type: none">『やさしく学べる経営学 [第2版]』（共著、創成社、2021）『ダイエーの経営再建プロセス』（共著、中央経済社、2020）『1からの流通システム』（共著、中央経済社、2018）『消費変質—エディタiership時代の到来』（共著、同文館出版、2015）『やさしく学ぶ経営学』（共著、創成社、2015）「インターナル・マーケティングによる需要創造—長坂養蜂場の事例から—」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第18巻、2018）
メッセージ	<p>地域企業の市場創造に向けて</p> <p>研究テーマはおもに2つです。まず、われわれの生活と密接な関係を持っている「小売流通」の研究。小売業を起点とした市場創造のあり方について検討しています。そして、地域企業の研究。マーケティングや地域ブランディングの観点から、各地域における先進的・試行的な取り組みについて調査・分析しています。</p> <p>このような研究テーマは、これまでの実務経験から生まれてきたものです。教員になる前は、小売企業やメーカーで経営企画・販売企画などの仕事に携わってきました。これらを通じて、企業が生き残るためには、市場（顧客）と真摯に向き合い、その不満やニーズを探り、それを自社の製品・サービス・売場に反映させる取り組みを繰り返していく必要性を強く認識したことが、マーケティングを中心とした経営問題に関心を持つきっかけになりました。</p> <p>教育面では、基本的なセオリーの習得に力を入れて取り組みます。基本的なセオリーが頭に入っていてこそ、世の中の事象についてさまざまな観点から分析・検討することができます。セオリーを手がかりに、社会の動きをみつめ、そこに新たなニーズの種を見出していく・・・そのような人材を育てたいと考えています。</p> <p>学生や地域企業・自治体の皆さんと、有効な市場創造・市場適応のあり方を考え、それを実践していくことが目標です。</p>



KOSUGI Daisuke

小杉 大輔

教授

所属 文化政策学部 文化政策学科

キーワード 社会的認知 学生支援 教育工学 因果的認識

学歴	京都大学文学部卒業（1997） 京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（2002）
学位	博士（文学）（京都大学、2002）
経歴	日本学術振興会特別研究員（PD）（2002～2004） 静岡理工科大学理工学部助手（2004～2008） 静岡理工科大学総合情報学部講師（2008～2010） 静岡文化芸術大学講師（2010）、准教授（2013）、教授（2020～）
研究分野	社会心理学、臨床発達心理学、産業・組織心理学
研究テーマ	社会的認知とその発達、学生支援、ワークモチベーション
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・『他者とかかわる心の発達心理学』（共著、金子書房、2012）・「大学生におけるインターネット上の自己のパーソナリティ特性の認識：現実の自己および理想の自己との比較」（単著、『日本教育工学会論文誌』、Vol.41（Suppl.）、2017）・「ARを用いた児童用地図学習教材の開発と評価」（共著、『日本教育工学会論文誌』、Vol.36（Suppl.）、2012）・“Nine- to 11-month-old infants’ reasoning about causality in anomalous human movements”（共著、Japanese Psychological Research、Vol. 51、2009）・“Ten-month-old infants’ inference of invisible agent: distinction between causality in object motion and human action”（共著、Japanese Psychological Research、Vol. 45、2003）
メッセージ	<p>心理学は、「心のはたらきに関する科学」であり、認知、言語、対人関係、社会的行動、教育・発達、感情、性格、心理臨床など、多様な研究領域があります。また、それぞれの領域の中で、たくさんの魅力的な研究テーマがあります。</p> <p>その中で、私は、人間が社会の中で、どのように感じ、考え、行動し、発達するののかについて研究してきました。たとえば、私はこれまで、とくに因果的認識（ものごとの原因と結果に関する認識）や社会性の発達（他者理解や対人関係のスキルの発達）に注目し、乳幼児から大人まで、さまざまな年齢の人々を対象にした研究を行ってきました。心理学の研究では一般に、実験や質問紙調査などによってデータを集め、それをコンピュータの力も借りながら統計的に分析する、という方法によって、心のはたらきに関する事実を明らかにすることを目指します。私にとって人の心はわからないことだらけであり、細かい実験や調査をひとつずつ重ねていくこと（そして、場合によってはさらにわからなくなる）は面白く、やりがいを感じます。</p> <p>また、私は、教育ボランティア事業に携わるようになって以来、地域の子育て・教育・学生支援に関連した研究にも取り組んできました。たとえば、児童用地図学習教材の開発をしたり、地域における子育て支援の現状と課題について現場での調査をおこなったりしています。そして、このような調査を通じ、たとえば、子育て支援や少子化への対策には、働き方の見直しなど、企業・組織におけるワーク・ライフ・バランス施策の推進が必要であることをより強く実感しました。文化政策学科における学びのエッセンス（政策・経営）は、このような取り組みの中にも見つけることができるのです。</p> <p>これからも私は、学生のみなさんとともに、地域社会のさまざまな事象を心理学的に研究し、その取り組みを通じて地域貢献をしていきたいと思っています。</p>



SUZUKI Hiroataka

鈴木 浩孝

教授

所属 文化政策学部 文化政策学科
大学院 文化政策研究科

E-mail h-suzu@suac.ac.jp

キーワード 相互依存関係 垂直的分離 垂直的統合 二部料金制

学歴	京都大学農学部卒業（1992） 京都大学大学院経済学研究科博士課程修了（2011）
学位	博士（経済学）（京都大学、2011）
経歴	スズキ株式会社（1992） 静岡文化芸術大学講師（2009）、准教授（2013）、教授（2020～）
研究分野	応用ミクロ経済学、産業組織論
研究テーマ	寡占市場での戦略的相互依存関係、垂直的取引制限
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・「建値制と経済厚生」（共著、『国民経済雑誌』第188巻第1号、2003）・「チャンネル間における価格—数量競争」（共著、『経済研究』第57巻第3号、2006）・「チャンネル間競争と市場の競争性」（共著、『流通研究』第10巻第1号、2007）・『農の6次産業化と地域振興』（共著、春風社、2015）・『トピックス応用経済学Ⅰ』（共著、応用経済学シリーズ第2巻、勁草書房、2015） など
メッセージ	<p>地元企業での社会人経験の後、経済学の世界に入りました。現実の産業で見られるさまざまな現象に対して、ミクロ経済学的手法を用いた分析を行っています。</p> <p>研究テーマは、寡占市場における企業間の戦略的相互依存関係です。水平的な競争関係の中で、企業間の短期の戦略は互いに代替的であるのか、あるいは補完的であるのか。また長期の戦略は短期の競争環境をどのように変化させるのか。さらに、垂直的な取引関係の中で行われる各種の取引制限は、水平的な競争にどのような形で影響を及ぼすのか。これらを規定する要因を分析しつつ、企業間の競争や取引制限の意義について、社会的厚生観点からも考察を行っています。</p> <p>授業では、客観的・論理的に結論を導くことの楽しさを伝えられるよう努めています。</p>



TANAKA Hiraki

田中 啓

教授

所属 文化政策学部 文化政策学科
大学院 文化政策研究科

E-mail hiraki@suac.ac.jp

キーワード 政策評価 行政評価 行財政改革 自治体財政

学歴	東京大学大学院経済学研究科修士課程（1995） Fels Center of Government, University of Pennsylvania（2001） 政策研究大学院大学博士課程単位取得退学（2006）
学位	修士（経済学）（東京大学、1995） MGA（Master of Government Administration）（University of Pennsylvania、2001）
経歴	三菱総合研究所（1986） ペンシルバニア大学客員研究員（2001） 富士通総研（2003） 静岡文化芸術大学助教授（2004）、准教授（2007）、教授（2011～）
研究分野	行政管理論、行財政改革、評価研究（プログラム評価、政策評価、行政評価）
研究テーマ	行政評価の効果検証、地域における評価の活用、人口減少時代における行政のあり方
研究業績	・『自治体評価の戦略－有効に機能させるための16の原則』（単著、東洋経済新報社、2014） ・『公務改革の突破口』（共著、東洋経済新報社、2008） ・『行政評価』（共著、東洋経済新報社、1999） ・『アメリカのGPRA—10年の評価と日本への含意—』（『Research Paper：Public Series』No.1、富士通総研、2004） ・「都市自治体の評価：本格普及から10年後の実態」（『日本評価研究』第8巻第1号、2008） ・地方自治体における行政評価制度構築の支援 など
メッセージ	理論と実践の融合 私の専門領域をひとことで表現すれば「行政機関のための経営学」です。民間企業にとって経営学が存在するように、行政機関にとっても、その組織や業務をより良く運営するための理論や手法が不可欠です。「行政機関」と書きましたが、公営企業、公共施設、公益法人、NPO、NGOなど、社会的な目的のために活動している機関は、全て私の研究対象です。 中でも特に力を入れて研究しているのが「公共部門における評価」です。政策評価や行政評価とも呼ばれ、近年、国や地方自治体が熱心に取り組んでいます。行政機関が実施した施策がその目的を達成したかどうかは、特別な努力を払わなければ正確に把握することができません。そのための活動が評価なのです。 評価の先進国であるアメリカでは、この分野では少なくとも50年以上の研究と実践の歴史があります。一方、日本の公共部門が評価の実践を本格的に開始したのは21世紀になってからに過ぎず、評価に対する研究はさらに遅れを取っています。日本の評価はまだヨチヨチ歩きなのです。 こうした中で、行政の現場では、理論を無視ないしは誤解して評価を実施する例が目立ちます。どんなに頑張ってもこのような評価を実施しても、有意義な結果はほとんど得られません。一方、研究者も評価の実践状況を批評するばかりで、現場に有用な研究成果を示すことができていません。 私は大学卒業後に民間シンクタンクの研究員としてキャリアをスタートさせましたが、その後、国内外の3つの大学院で学ぶ機会を経て、本学に赴任しました。これらの経験から痛感しているのは、「理論なき実践の危うさ」と「実践を無視した理論の虚しさ」です。私が身を置くような実証的な学問領域においては、理論と実践のバランスの取れた融合が必要であり、私はずっとこのことに取り組んできました。 本学で学ぶ（あるいは、学ぶことを希望する）皆さんは、具体的な事例だけでなく、物事を抽象的、普遍的に記述した理論にも是非関心を持って下さい。理論には、社会のためになるものや、面白いものもあることにきっと気が付くと思います。一方、自治体やその他の公共的な機関で活躍されている方で、評価について悩みを抱えている方は、是非ご相談下さい。これまでの研究成果を踏まえて、できる限り具体的なアドバイスを差し上げたいと思います。また共同研究等のご提案も歓迎いたします。



NOMURA Takashi

野村 卓志

教授

所属 文化政策学部 文化政策学科

E-mail nomura@suac.ac.jp

キーワード 情報リテラシー教育 インターネット クラウドコンピューティング
メディアリテラシー

学歴	静岡大学大学院工学研究科電子工学専攻（1984）
学位	工学博士（静岡大学、1990）
経歴	静岡大学電子工学研究所文部教官助手（1984～2000） 英国ロンドン大学インペリアル・カレッジ客員研究員（1994） 静岡文化芸術大学助教授（2000）、教授（2004～）
研究分野	情報学、情報アーキテクチャ
研究テーマ	Web・インターネットを用いた知識の共有 ネットワークコミュニティの形成
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・「Webページ上で動作するタッチタイピング練習プログラム」（大学ICT推進協議会 2019年度年次大会論文集、2019）・「eBookを活用した授業の可能性を考える」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第19巻、2018）・「大学生に対する情報リテラシー教育」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第13巻、2012）・「大学入学生に対する情報リテラシーのアンケート調査」（大学ICT推進協議会2011年度年次大会論文集、2011）・「高校情報教育に関するアンケート調査」（平成22年度情報教育研究集会論文講演集、2010）
メッセージ	<p>情報技術を社会へ受け入れる</p> <p>文化政策は、心の豊かなより良い生活を実現する社会を考える学問ですが、情報技術についてはどのように考えればよいのでしょうか。これまでの歴史を振り返ってみると、新しい技術や機器が社会へもたらされた時には、初めはのうちはそれまでの生活習慣や社会的慣習を変えないまま、「速度」や「量」を増やす効率向上という形で影響を与えます。そして、技術の普及が進みある段階を超えると、その新しい技術によって社会や生活のあり方そのものが大きく変えられてゆくことになります。この変化を経て、初めて真の意味で新技術や機器が社会に受け入れられたことになります。この変化の過程において、しばしば大きな社会的変化が起こり、社会を構成する階層や人々の変化、さらに社会的混乱などが生じる可能性があります。</p> <p>文化政策のひとつの役割は、生活（＝文化）を向上させるためにもっとも適した社会システムの構築（＝政策）を追求するものです。この視点から考えると、新技術・機器を社会へ受け入れるときの文化政策の役割は、これまでの社会や生活の特徴や性質を生かしつつ、新しい技術をもっとも活用することができるのはどのような社会かを考え、さらに新しい社会に変わってゆくときの混乱が最も少なくなるような道筋を見いだすことであると考えています。現在進みつつある高度情報化社会への移行は、まさに情報技術によって社会や生活のあり方そのものが変化しつつある段階を迎えてきており、これから文化政策が果たす役割は非常に重要なものとなると考えています。</p>



HAYASHI Sawako

林 左和子

教授、入学試験・高校大学連携センター長
所属 文化政策学部 文化政策学科

E-mail hayashi@suac.ac.jp

キーワード 図書館 児童サービス ユニバーサルデザイン絵本 図書館史
電子書籍

学歴	図書館情報大学大学院図書館情報学研究科修士課程修了（1988）
学位	修士（学術）（図書館情報大学、1988）
経歴	東京家政学院大学附属図書館（1992） 横浜国立大学国際開発研究科（資料室担当）（1995） 大谷女子大学文学部（1997） 静岡文化芸術大学助教授（2004）、准教授（2007）、教授（2011～）
研究分野	公共図書館児童サービス、ハンガリーの図書館史
研究テーマ	ハンガリー国立セーチュエニ図書館の歴史 イギリスにおけるブックスタートサービスの背景と評価 大学図書館を活用させる授業の仕組み
研究業績	・『児童サービス論』（単著、勉誠出版、2002） ・『図書館人物伝』（共著、日外アソシエーツ、2007） など
メッセージ	<p>現在図書館を取り巻く状況が厳しさをます中で、図書館は社会に対してどのようなプラスの効果を提供することができるのだろうかを考えていきたいと思っています。</p> <p>一つの方法として、過去の特定の図書館とその図書館を作り上げた人々の活動をたどることで、人々が図書館に何を期待していたかを明らかにしたいと、19世紀に設立されたハンガリー国立図書館の歴史を研究テーマとしています。また、10年ほど前に英国で始まったブックスタート運動の成果が報告されています。その成果を分析することで、子どもの成長と読書そして図書館の関わりを考えることができるのではないかと考えています。</p> <p>さらに教員という立場から、大学生の図書館活用能力を高め、学生時代だけでなく社会に出てからも、図書館を活用して自ら学んでいくことのできる方法を身につけてもらいたいと願っています。そのために学生に大学図書館の機能をフルに活用してもらえる、授業の仕組みについても取り組んでいきたいと思っています。</p>



FUJII Yasuyuki

藤井 康幸

教授

所属 文化政策学部 文化政策学科
大学院 文化政策研究科

E-mail yfj@suac.ac.jp

キーワード 地域活性化 地域の個性 人口減少社会 持続可能都市 セクター協働

学歴	東京大学工学部都市工学科卒業（1986） University of California, Los Angeles (UCLA), MA (Urban Planning)（1991） 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程単位取得満期退学（2015）
学位	博士（工学）（東京大学、2017）
経歴	清水建設株式会社 地域開発部、神戸支店、ほか（1986～2001） 株式会社富士総合研究所／みずほ情報総研株式会社 都市・地域研究室、社会政策コンサルティング部、ほか（2001～2018） 静岡文化芸術大学文化政策学部教授（2018～）
研究分野	都市・地域計画、まちづくり、創造都市
研究テーマ	個性的で魅力ある都市、持続可能な都市、都市・地域にかかる計画と政策の領域
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・ “Tax deed sales and land banking to reuse vacant and abandoned properties.” （単著, <i>International Journal of Housing Markets and Analysis</i>, published online 2020）・ 「米国における空き家・空き地問題への対処 — 市場メカニズム活用とランドバンク」 （共著、日本建築学会編『都市縮小時代の土地利用計画』、学芸出版社、2017）・ “Putting the pieces together: How collaboration between land banks and community land trusts can promote affordable housing in distressed neighborhoods,” （単著, <i>Cities</i> , published online 2016）・ “Spotlight on the main actors: How land banks and CDCs stabilize and revitalize Cleveland neighborhoods in the aftermath of the foreclosure crisis,” （単著, <i>Housing Policy Debate</i> , published online 2015）・ 「米国デトロイト市におけるランドバンクによる地区を選別した空き家・空き地問題への対処」 （単著、『日本都市計画学会都市計画論文集』 Vol. 50 No. 3、2015）・ 『シンガポールの都市国家形成の評価』 （単著、財団法人計量計画研究所IBSフェローシップ研究、2007）
メッセージ	<p>都市・地域計画、まちづくりは間口が広く、かつ、対象や重点分野は時代の要請に応じて変化することが特徴的です。例えば、現在では、地球環境は都市・地域計画、まちづくりにおいて避けて通ることのできない議題となり、社会的包摂は、計画と実施において考慮すべき重要な事項といえます。同時に、都市・地域計画、まちづくりにおいては、関連する異なるセクターの協働が肝要となります。ここでいうセクターとは、行政、市民・住民、企業等です。大学や学校も加えてもいいと思います。どのセクターが発案、主導しようが、他の様々なセクターとのやりとりは必然となります。</p> <p>未来の社会はますます複雑となることでしょう。そこでは、グローバルなものと考え方、対話、提案、他者理解といったスキルが重要となります。都市・地域、まちづくり分野の学習や経験は、こうした考え方やスキルを養うに適したものに思います。湧き出る好奇心と豊かな発想をもって、授業や演習に参加していただくことを期待します。</p>



FUNATO Shuichi

船戸 修一

教授

所属 文化政策学部 文化政策学科

E-mail s-funa@suac.ac.jp

キーワード 農村社会学 環境社会学 中山間地域 人口減少 過疎 限界集落

学歴 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程単位取得退学（2000）

学位 修士（学術）（東京大学、1997）

経歴 日本学術振興会 特別研究員（2000～2004）
東京大学科学技術インタープリター養成プログラム 研究員（2006～2009）
法政大学サステナビリティ研究教育機構 研究員（2009～2011）
静岡文化芸術大学講師（2011）、准教授（2015）、教授（2020～）、

研究分野 地域社会学、農村社会学、環境社会学

研究テーマ 中山間地域（農山村）社会の現状と課題についての社会学的な分析

研究業績

著書

- ・『変容する都市のゆくえ：複眼の都市論』（共著、文遊社、2020）
- ・『食の6次産業化と地域振興』（共著、春風社、2015）
- ・『食と農のコミュニティ論：地域活性化の戦略』（共著、創元社、2013）
- ・『環境と社会』（編著、人文書院、2012）

論文

- ・「実家や集落との関わりに対する『他出子』本人の意識：浜松市天竜区佐久間町の調査から」（単著、『社会と調査』第26号、一般社団法人社会調査協会、2021）
- ・「『関係人口論』の地域社会学的考察：浜松市天竜区佐久間町の集落調査を踏まえて」（単著、『地域社会学学会会報』Vol.219、2020）
- ・「『他出子』の帰郷をめぐる親世代の意識の交錯：浜松市天竜区佐久間町を事例として」（単著、『東海社会学学会年報』Vol.11、2019）
- ・「NHK『明るい農村（村の記録）』制作過程と『農業・農村』へのまなざしの変容：番組制作者に対する聞き取り調査をもとに」（共著、『マス・コミュニケーション研究』Vol.85、日本マス・コミュニケーション学会、2014）
- ・「戦後ラジオ・テレビ放送における『農村』表象の構築プロセス：媒介者としてのNHK農林水産通信員に注目して」（共著、『年報社会学論集』Vol.27、関東社会学会、2014）
- ・「『食と農』の環境社会学」（単著、『環境社会学研究』Vol.18、環境社会学会、2012）

その他の活動

地域社会学会 編集委員会副委員長、日本村落研究学会 年報村落社会研究編集委員（2017～）、静岡県中山間地域等直接支払制度評価委員会委員（2017～）

メッセージ

現在、中山間地域（過疎農山村）は、一次産業（農林業）従事者の後継者不足、農産物価格の低迷、耕作放棄地の増加、野生動物による被害、過疎や限界集落による集落機能の低下など様々な問題を直面しています。そのうえ市町村合併や地方財政の悪化に伴い、小中学校や病院の統廃合、公共交通の廃止など行政サービス削減によって住民同士の共同生活や相互扶助のうえに成り立ってきた農山村の暮らしが揺らいでいます。

浜松市も、このような問題と無縁ではありません。現在の浜松市は、2005年7月に12市町村が合併して新しく誕生した市です。この合併した地域には、以前から過疎問題を抱えていた農山村も含まれています。そのため浜松市は「政令指定都市」になりましたが、農山村の維持は喫緊の課題です。

昨今、農山村では65歳以上が地域住民の半分以上を占める集落を「限界集落」と呼び、その消滅可能性を煽る論調が見られます。そのため「人口減少 ⇒ 集落消滅」という社会解体図式が当然視されています。

しかし、そのような集落には、「他出子」——そこから転出した子どもたち——が実家に通い、親の生活支援をしている現実が見うけられます。このように集落を超えた「家族関係」が維持されていると、人口減少や高齢化が進んでも、そう簡単に集落は消滅しないと思われれます。

私は「社会学」を専門にしています。社会学は「人と人とのつながり」や「人間と人間の関係」から社会を考えていきます。人間は関係で生きています。地域の将来を人口や高齢化率で判断するのではなく、集落を超えて維持されている「家族関係」から考えることが大切です。



YOMODA Masafumi

四方田 雅史

教授

所属 文化政策学部 文化政策学科
大学院 文化政策研究科

E-mail m-yomo@suac.ac.jp

キーワード 産業史 比較経済史 アジア 産業集積 制度 グローバル・ヒストリー

- 学歴** 早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了（1997）
早稲田大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学（2003）
- 学位** 博士（経済学）（早稲田大学、2006）
- 経歴** 日本学術振興会特別研究員（2003～2006）
武蔵野大学非常勤講師（2003～2010）
東海大学海洋学部非常勤講師（2004～2008）
山梨学院大学商学部・現代ビジネス学部非常勤講師（2006～2010）
早稲田大学政治経済学術院助教（2007～2009）
静岡文化芸術大学講師（2010）、准教授（2013）、教授（2018～）
- 研究分野** 経済史、産業史、経営史
- 研究テーマ** 戦前日本とアジア（特に中国）における産地・産業の制度・慣行の比較、農産物貿易をめぐるグローバル・ヒストリー
- 研究業績**
- ・『戦間期日本の社会集団とネットワーク デモクラシーと中間団体』（共著、猪木武徳編、NTT出版、2008）
 - ・『地域と越境—「共生」の社会経済史』（共著、内田日出海ほか編、春風社、2014）
 - ・『日中比較経済史 取引慣行と制度に見る戦前期日中経済の特質』（単著、春風社、2016）
 - ・『静岡県史 別編4 人口史』（共著、静岡県編、2021）
 - ・「模造パナマ帽をめぐる産地間競争—戦前期沖縄・台湾の産地形態の比較を通じて」（『社会経済史学』第69巻第2号、社会経済史学会、2003）
 - ・「柏祐賢の比較経済秩序論における中国経済・「東亜」観」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第18巻、2018）
- メッセージ**
- 私は経済史、すなわち経済の歴史を中心にこれまで研究してきました。現代の経済現象に関わる学問は経済政策、産業組織論、経済地理学、財政学など数多くの分野に分岐しますが、歴史となると経済史一本になるのは興味深いことです。逆に言えば経済の歴史を明らかにし位置づけるためには、さまざまな視点が必要です。それは、一般に経済学と思われる分野を超え、歴史学はもちろん、社会学や政治学、人類学や考古学などの知見を借りることもしばしばです。
- 経済史はそのような面白さがありますが、大学院の頃から取り組んできたテーマは産業集積の背後にある制度・慣行を日本と中国・台湾で比較することでした。企業活動や産業活動は市場経済の中で行われますが、その背後に参加者が自明と思っている慣習・慣行や制度（経済学では後者のほうが一般的です）の違いがあるものです。日本企業が中国に進出すると終身雇用などの常識が成り立たない中国人にとまどう人も多いと聴きます。日本人と中国人が歴史的に培ってきた慣習や制度が異なっているためです。現代の違いの淵源を戦前の経済・産業から示し位置づけられないかという仮説を持って研究してきました。
- 最近では、柑橘や牛肉などの農産物や紙などの工業品、いわば「モノ」に着目しグローバル・ヒストリーを描きたいと思っています。これまでグローバル・ヒストリーはとりわけインド洋、大西洋、ユーラシア大陸を重視してきましたが、環太平洋圏についての研究にはまだ空白域が多いのが現状です。しかしこの地域が今や世界経済の中心となり、そのダイナミズムを、歴史を遡って解明する必要性を感じています。そこには当然ながらアジアと両アメリカ大陸の関係や比較も含まれることでしょう。このようなグローバルな視点からその一端を明らかにできればと考えています。
- ほかにも人口史や地域史、産業遺産などに私の関心が広がってきました。『静岡県史』現代編の編纂にも一部関わっております。歴史とは私たちが生きていない過去の人々を扱う学問ですが、私たちが生きてきた（生きている）現代史を描くのは他の時代にはない難しさがあることも実感します。いずれにせよ、私の関心の範囲を広げたいと思っています。



KOBAYASHI Yoshie

小林 淑恵

准教授

所属 文化政策学部 文化政策学科

キーワード 家族形成 就業キャリア 高度人材 地域福祉

学歴	慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程 (2001) 慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学 (2004)
学位	修士 (経済学) (慶應義塾大学、2001)
経歴	慶應義塾大学パネルデータ設計・解析センター 研究員 (2009~2010) 東洋英和女学院大学国際社会学部 嘱託専任講師 (2011) 独立行政法人国立高等専門学校機構 特命准教授 (2012) 文部科学省科学技術・学術政策研究所 上席研究官 (2013~2017) 文部科学省総合教育政策局調査企画課 学力調査分析専門職 (2018~2020) 静岡文化芸術大学文化政策学部 准教授 (2021~)
研究分野	人口問題研究 (仕事・家族・消費)、労働経済学、ライフコース研究、教育および科学技術人材政策
研究テーマ	女性の就業と家族形成、博士人材のキャリアと研究状況に関する追跡調査、地域福祉と家族のライフコース
研究業績	著書 ・『日本のお金持ち妻研究』(共著、東洋経済新報社、2008) ・『人口変動と家族の実証分析』(共著、慶應大学出版会、2020) 論文・解説 ・「スーパーサイエンスハイスクール事業の俯瞰と効果の検証」(NISTEP DP-No.117、2015年) ・「『博士人材追跡調査』第2次報告書」(NISTEP REPORT No.174、2018) ・「女性博士のキャリア構築と家族形成」(『研究 技術 計画』Vol.33、No.2、2018)
メッセージ	ライフコース研究の視点 人口学研究 (Population studies) や労働経済学では、近年、ライフコース研究の視点を取り入れた形で発展しています。多様でダイナミックな人生を「コホート (同一出生集団)」という概念で連続的に捉えることがその特徴です。 コホートの継続的な変化や社会変動を捉える研究には、長期的に個人などの調査対象を追跡したパネルデータが必要ですが、私が研究をスタートした頃に日本でもようやく世帯を対象にした「家計パネル」が始まりましたので、このデータを用いて女性の就業と家族形成 (結婚、出産等) の関係について分析を行ってきました。 ライフコースという視点や分析技法は、その後も私の研究の根幹となっています。省庁の研究機関においては、現在の日本で研究力が低迷する要因の一つが、若手研究人材のキャリアパスの不透明さにあるとされ、国の基本計画の策定や補助事業の実施に必要なエビデンスが求められていました。そこで『博士人材追跡調査』を開始し、博士の就業や研究状況を継続的に捉えることを試み、研究分野ごとの違いや、女性博士の状況などについても明らかにしています。 またスーパーサイエンスハイスクールという理科教育の重点支援を目的にした文部科学省の補助事業の効果検証では「学校パネル」を構築し、指定校となっている期間を連続的につなげたデータによって、理系進学率を指標とした効果分析を行っています。 現在、私が最も関心を持っているのは、家族のライフコースという視点で、地域福祉を捉えることです。福祉制度による公的支援、営利目的の福祉ビジネス、プライベートな芸術・スポーツ活動までを地域福祉の範囲とし、これらの地域資源の有無やアクセスの容易さが、支援対象者を持つ家族のライフコースに影響を及ぼすことをデータから明らかにし、地域福祉の充実につなげて行きたいと考えています。



SONE Hidekazu

曾根 秀一

准教授

所属 文化政策学部 文化政策学科
大学院 文化政策研究科

E-mail h-sone@suac.ac.jp

キーワード 企業の衰退と発展 老舗 ファミリービジネス 地場産業
企業家活動

学歴 滋賀大学大学院経済学研究科博士後期課程修了(2010)

学位 博士(経営学)(滋賀大学、2010)

経歴 日本学術振興会特別研究員(2009~2012)
大阪経済大学経営学部 講師(2012~2014)
メモリアル大学(カナダ) 客員研究員(2012~2014)
滋賀大学リスク研究センター 客員研究員(2014~2015)
帝塚山大学経営学部 講師(2014~2015)
和歌山大学経済学部 非常勤講師(2014~)
静岡文化芸術大学講師(2015)、准教授(2017~)

研究分野 経営学、経営戦略論、経営組織論、企業史

研究テーマ 中小企業、老舗企業、地場産地の存続と衰退(戦略・組織の理論的・実証的研究)

研究業績 著書
・『ドイツ企業の統治と経営』(共著、中央経済社、2021)
・『1からの経営学(第3版)』(共著、碩学舎、2021)
・『老舗企業の存続メカニズム』(単著、中央経済社、2019)
・『日本のビジネスシステム—その原理と革新—』(共著、有斐閣、2016)
・『地域創生イノベーション—企業家精神で地域の活性化に挑む—』(共著、中央経済社、2016)
・『日本のファミリービジネス』(共著、中央経済社、2016)
論文・解説
・『世界最古の企業 金剛組の叡智に学ぶ—伝統産業ビジネスシステムから見た長期存続の条件—』(単著、『一橋大学ビジネスレビュー』63巻2号、2015)
・“Cultural Approach to Understanding the Long-Term Survival of Firms : Japanese Shinise Firms in the Sake Brewing Industry” (共著、Business History, Vol.57, 2015)
・「老舗企業の継承に伴う企業家精神の発露—宮大工企業による事業展開の比較分析—」(単著、『日本ベンチャー学会誌』No.22、2013)
・「経営戦略型リスクマネジメントを通じた組織の存続」(共著、『ビジネス&アカウンティングレビュー』第12号、2013)
・「老舗企業と地元企業との相互依存関係について」(単著、『地域学研究』第40巻第3号、2010) など

メッセージ 経営学は、「企業」や「会社」といわれる組織体のマネジメント(経営)を対象とする学問です。ここで言うマネジメントとは、「人々を通じて、仕事をうまく成し遂げる」ことです。その中でも私は、とくに経営戦略、組織、史的な観点から現代社会において重要な位置を占める大小様々な「企業(会社)」について、フィールドワーク、理論や方法論を通じて研究を進めています。とりわけ「企業の存続と衰退のメカニズム」というキーワードのもと、いわゆる「老舗企業」、「長寿企業」などと呼ばれる企業活動に注目し、研究を行ってきました。幾度もの危機を乗り越えてきた長寿企業の存続要因を探ることは、そこから現代の企業経営に活かす「知恵」を抽出し、現代企業においても大いに参考になる点があります。これらの企業をつぶさに観察すると、存続に価値を置く価値観、そして、地域に根差し社会に組み込まれながら存続していくという特徴があります。だからこそ本学で研究を行い、少しでも還元させていただくことは私にとって非常に重要なことであると考えています。近年は、海外研究者とも連携しながら、国際比較研究を行い、その成果を国内外の学会等で発表、論文公刊しています。授業やゼミなどを通じて経営学の魅力や基礎原理などをお伝えしていきます。そして、皆さんの身の回りにある企業を身近に感じ、関心のあるテーマを追究していただけたらと思います。大学で、多くの人と出会い、学び、人生の土台を築いて下さい。ともに学べることを楽しみにしています。

芸術文化学科

芸術と社会との出会いを可能にし感動を
形にしていくクリエイティブな人材を養成。



OKUNAKA Yasuto

奥中 康人

教授、芸術文化学科長

所属 文化政策学部 芸術文化学科
大学院 文化政策研究科

E-mail y-oku@suac.ac.jp

キーワード 近現代の日本音楽史 鼓笛隊とラップ 和洋折衷音楽 ムード歌謡
浜松ご当地ソング

学歴 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学

学位 博士（文学）（大阪大学、2002）

経歴 日本学術振興会特別研究員（東京大学大学院人文社会系研究科）（2000～2002）
関西大学非常勤講師（2002）
名古屋芸術大学非常勤講師（2003～2010）
大阪芸術大学非常勤講師（2005～2010）
京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター特別研究員（2006～2008）
大阪大学非常勤講師（2007、2010）
愛知県立芸術大学非常勤講師（2009）
宮城学院女子大学非常勤講師（2014）
静岡文化芸術大学准教授（2011）、教授（2016～）

研究分野 音楽学

研究テーマ 日本における西洋音楽の文化変容についての歴史研究

研究業績 著書
・『国家と音楽 伊澤修二がめざした日本近代』（単著、春秋社、2008）
・『幕末鼓笛隊—土着化する西洋音楽』（単著、大阪大学出版会、2012）
・『和洋折衷音楽史』（単著、春秋社、2014）

メッセージ 音楽を研究している者にとって、浜松は特別な街です。なぜなら、世界的に有名な楽器メーカーや、世界的なレベルのコレクションを誇る楽器博物館が存在するからです。しかし、わたしにとっては、大学院時代のゼミの小旅行で——それは私の最初の浜松訪問だったのですが——、鍵盤ハーモニカを作る小さな工場（まさに町工場）の見学をしたことが強く印象に残っています。よく考えてみると、どんな大手の楽器メーカーにも下請け工場というものがあるわけで、そこでは少人数で小さな部品が製作され、そうした数多くの小さな部品を組み合わせることによってはじめて楽器は完成するという、ごく当たり前のことに気づかされました。

その頃、幕末から明治時代にかけての西洋音楽の流入に関心があったので、研究テーマとして、かつて存在したものの、現在ではほとんど消滅してしまった鼓笛隊やラップについて調べようとしていたところ、同じ大学院に所属していた浜松出身の後輩から「浜松では今でもラップを使ってますよ」と聞いて仰天しました。さっそく導かれるまま浜松を再訪したのは2003年のゴールデンウィークだったと記憶しています。

「西洋楽器というものはベートーヴェンやモーツァルトを演奏するための道具である」という私の固定観念を軽々と壊してくれたのは、中田島の凧揚げ会場や駅前的大通りで繰り広げられるパフォーマンスで、これまで音楽研究者が「西洋音楽の受容」として注目してきた日本におけるベートーヴェンやモーツァルトの享受やオーケストラやオペラの活動とは別の、いわば西洋楽器の土着化現象とでもいうべき実態に興味をもつようになったことは、私の研究にとって大きな転機でした。それ以来、毎年GWになると浜松に調査にやってきて、ビデオカメラを片手にラップの音を追いかけながら調査をしてきたのですが、そうした足元にあるような身近な音楽文化——あまりにも卑近すぎて「文化」とは思えない人もいるかもしれませんが——に対する再考、再評価が、実は地域社会の芸術文化を考えるうえでとても大切なことではないだろうかと思ったりしています。



UMEWAKA Naohiko

梅若 猶彦

教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科

学歴	ロンドン大学ローヤルホロウェイ校 修士課程を経て博士課程修了（1995）
学位	Ph.D（演劇・メディアアート）（ロンドン大学、1995）
経歴	ロンドン大学ローヤルホロウェイ客員教授（2002～2008） 国際日本文化研究センター共同研究委員（1995～1997） フィリピン大学ディリマン客員教授（2008～） 2008年度文化交流使（文化庁） 慶應義塾大学国際センター非常勤講師（現在） 静岡文化芸術大学助教授（2000）、准教授（2007）、教授（2008～）
研究分野	古典芸能（能）、身体哲学、ドラマツルギー
研究業績	著書 ・Quaderni Speciali Rivista Italiana Di Geopolitica, Mistero Giappone ‘Il Sistema Iemoto’（共著, Rivista Italiana Di Geopolitica, Rome 2007） ・『能狂言が見たくなる講座十撰』（共著 柳沢新治構成監修 豊田能楽堂企画、檜書店、2008） ・「世阿弥の秘伝書の極意をめぐって」（共著、『脳科学と芸術』、工作舎、2008） ・川村記念美術館創業100周年記念刊行「仮想超現実の世界」（共著、DIC株式会社、2008） 2017年度公演実績 ・ジョージタウン国際芸術祭招待公演（マレーシア ペナン島） 現代劇「イタリアンレストラン」 作／演出：梅若猶彦 主催：ジョージタウン芸術祭 配役：Aida Redza, Chee Sek Thim, Mislana Mustaffa, A.S. Hardy Shafii, Marina Tan, Sharifah Aryana, Siew Yong Koay, セットデザイナー：Alvin Neoh Chai Liang 衣装：Khing Chuah 照明：Kash Koe Man Yun 公演場所：Ombak-Ombak ARTStudio 公演日：8月26/27日 ・クアラルンプール国際芸術祭招待公演（マレーシア） 新作舞踊劇「エントランスト」Entranced 作／演出：Aida Redza 演出：梅若猶彦 主催：クアラルンプール芸術祭 配役：Aida Redza, 梅若猶彦、Rathimalar Gouindarajoo, Kaede Takaya, Tadashi Yonago(演奏) 映像：Ammah Khalifia, Toh kim Khiang 詩朗読：A. Samad Said セットデザイン：Alvin neoh Liang 照明：Joie Koo 公演日：9月2/3日 公演場所：Theatre KuAsh@
メッセージ	芸術方面の仕事に就いた時、そこで要求されるものは、日々、目まぐるしく変化する情報に対応する事と、芸術の普遍的基礎である、敢えて言えば意図的に変化させない「同じ事の繰り返し」とを同時に処理する事かもしれません。



KATAGIRI Yayoi

片桐 弥生

教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科

キーワード 源氏絵 扇絵 やまと絵 土佐派 文学享受

学歴	大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中途退学（1988）
学位	修士（文学）（大阪大学、1987）
経歴	大阪大学文学部助手（1988） 静岡県立大学短期大学部講師（1992） 静岡県立大学短期大学部助教授（1999） 静岡文化芸術大学助教授（2001）、准教授（2007）、教授（2010～）
研究分野	日本美術史
研究テーマ	源氏物語の絵画化など文学と絵画の関係について 土佐派を中心とした中世やまと絵について
研究業績	<ul style="list-style-type: none">『石山寺の美—観音・紫式部・源氏物語—』（共編著、大本山石山寺・株式会社アートワン、2008）「美術史における源氏物語—源氏絵の場面選択と図様の問題を中心に—」（『源氏物語研究集成』第14巻、風間書房、2000）「歌仙絵の世界—業兼本図様の成立と展開を中心に—」（『和歌をひらく』第3巻、岩波書店、2006）「松岡映丘筆「宇治の宮の姫君たち」をめぐって」（『源氏物語をいま読み解く』1、翰林書房、2006）「『紫式部石山詣図』（宮内庁書陵部蔵）と『源氏物語竟宴記』」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第14巻、2013年度） など
メッセージ	<p>日本美術について学ぶとは</p> <p>日本の美術というとな何を思い浮かべますか？浮世絵、水墨画、仏像、襖絵、絵巻などなど。これらは、今は日本史の教科書の片隅の図版や、美術館や博物館の展示ケースの中でしか見られないかもしれませんが、かつてはそれを作った人（絵師や仏師）、作らせた人（注文主）がいて、見た人（鑑賞者）がいました。これら美術作品と今呼ばれているものが当時どのような意味をもっていたのか、社会においてどのように機能していたのか、そういったことを明らかにしていきたいと思っています。もちろんその前提として、作品そのものをじっくり見て、その内容や表現を検討し位置づけていくことが大切なのは言うまでもありません。授業でも画像を多く用いたり、実際に展覧会等にいき作品を見る機会をつくったりして、作品そのものときちんと向き合うようにしたいと思っています。</p> <p>私自身は文学と絵画の関係について、特に『源氏物語』がいかに絵画化されてきたかに興味を持ち、研究を続けてきました。『源氏物語』はおおよそ千年前に執筆された直後から、絵巻や屏風などに描かれ続けてきました。長大な物語のどの場面が好まれ描かれたのか、物語の内容をどのように絵画化しているのか、時代によってそれらはどのように変化したのか。時代時代の『源氏物語』そのものの読まれ方や、人々が『源氏物語』に求めていたものについても考えを及ぼしつつ、明らかにしていきたいと思っています。</p>



KATAYAMA Taisuke

片山 泰輔

教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科
大学院 文化政策研究科

E-mail t-kata@suac.ac.jp

URL <http://wwwt.suac.ac.jp/~katayama/>

キーワード 芸術支援の補助金制度 文化政策の計画と評価 公立文化施設 アメリカの芸術文化政策

- 学歴** 慶應義塾大学経済学部卒業
東京大学大学院経済学研究科修士課程修了
東京大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得
- 学位** 修士（経済学）（東京大学、1995）
- 経歴** 三井情報開発株式会社総合研究所（1988～1991）
三和総合研究所（1991～2002）
関西学院大学大学院総合政策研究科客員准教授（1999～2011）
跡見学園女子大学マネジメント学部助教授（2002～2005）
静岡文化芸術大学助教授（2006）、准教授（2007）、教授（2011～）
- 研究分野** 芸術支援の社会システム、財政・公共経済
- 研究テーマ** 補助金、公立文化施設、文化政策の評価
- 研究業績**
- ・「文化の財政」（文化経済学会＜日本＞編『文化経済学－奇跡と展開』、ミネルヴァ書房、2016）
 - ・「『劇場法』制定と『公共財』としての公立文化施設のあり方」（長峯純一編『公共インフラと地域振興』中央経済社、2015）
 - ・『アメリカの芸術文化政策と公共性～民間主導と分権システム』（共編著、昭和堂、2011）
 - ・『アーツ・マネジメント概論 三訂版』（監修・編著、水曜社、2009）
 - ・『アメリカの芸術文化政策』（日本経済評論社、2006）
 - ・『図解・国家予算のしくみ』（編著、東洋経済新報社、1999） など

メッセージ 片山泰輔研究室では、現代社会が芸術を支える社会システム（仕組）について研究しています。このことは単に芸術を保護しようということではなく、芸術の社会的意義や有用性を分析することから、それらが社会の発展のために生かされるための仕組を構想し、そのための制度設計や費用負担の問題等を検討することを意味します。

私の学問的な専門は財政・公共経済で、主として準公共財（quasi public goods）の供給問題の研究を行ってきています。世の中には、防衛サービスのように、市場で供給することが極めて困難な純粋な公共財（public goods）でもなく、かといって市場メカニズムだけで最適に供給され得る私的財（private goods）でもなく、両者の中間的な存在の準公共財と呼ばれるものがあります。経済学の教科書では、「教育」等がその典型例としてあげられていますが、芸術にもそのような側面がみられます。

国や自治体の文化政策に関わることも多く、補助金制度の改革や、都市の持続的な発展に必要な文化的ストックとそれらに対する投資のあり方等についても研究・実践を行っています。



TACHIIRI Masayuki

立入 正之

教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科

E-mail m-tachi@suac.ac.jp

キーワード 西洋美術史 比較美術史 芸術政策・産業
文化財科学 博物館学

学歴	慶應義塾大学文学部卒業（1991） 慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了（1995）
学位	修士（哲学）（慶應義塾大学、1995）
経歴	山梨県立美術館学芸員（1994） 東京純心女子大学講師（2003） 静岡文化芸術大学講師（2007）、准教授（2010）、教授（2017～）
研究分野	比較美術史、芸術産業、文化成立
研究テーマ	社会と美術、美術産業・経済、博物館運営、ジャポニスムとバルビゾン派、ジャン＝フランソワ・ミレー
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・『ミレーと出会う』（単著、クレオ、1996）・『A.サンスィエ「ミレーの生涯」』（共訳、講談社、1998）・『アメリカ文化入門』『イギリス文化入門』（共著、三修社、2010）・『美術史への旅 文化と芸術の再考』（単著、インターパブリカ、2016）・「考察 浮世絵とクールベ」（『日本美術の空間と形式』、二玄舎、2003）・「自然に帰れーミレーと農民画の伝統」展（山梨県立美術館、1998）・「近代フランス絵画ー花と緑の物語」展（東京都現代美術館、2004）・「浜松の機械染色型紙」展（浜松市博物館、静岡文化芸術大学、2018）
メッセージ	<p>これまでの実務経験と研究活動に基づき、プランニングにとどまることなく、リアライズを追求、実践しております。</p> <ol style="list-style-type: none">①阪神淡路大震災、東日本大震災後の文化財保護・博物館復旧活動に実地参画している経験から、博物館の危機管理対策・対応の問題に対しての、具体的提示や効果的な対策の調査や助言・提案。②美術コレクションの保存、災害対策、保険評価額算定における助言・提案。③大学と博物館の連携、大学におけるシンポジウムの開催、コレクションや作品展示（方法、広報）への助言・協同。④産業遺産コレクション（自動車、機械、食品等）の保存、展示の問題に対しての、方策の具体的提示や効果的な運用方法の調査・提言。⑤伝統産業・工芸をもとにした先端技術の発信への助言・提案。⑥所有文化資源の、国内外にむけての文化発信の方法、プレゼンテーションの方法、についての助言・提案。 <p>芸術に関われる、特に芸術イベントをマネジメントする職業に就きたいという気概のある人材を、文化的芸術的感性を持った実務家として社会に送り出すことがひとつの使命だと考えます。もちろん芸術業界のみならず、企業社会や教育界でも学んだことを生かして、文化と芸術をとらして社会貢献のできる人材となってほしいと思います。</p>



TANIGAWA Mami

谷川 真美

教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科
大学院 文化政策研究科

キーワード 芸術論 現代美術 モダニズム 美学

- 学歴** 大阪大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得
- 学位** 修士（文学）（大阪大学、1993）
- 経歴** 美術評論家
京都服飾文化研究財団学芸員（1995）
神戸山手女子短期大学、大阪工業大学非常勤講師（1997）
静岡文化芸術大学講師（2000）、助教授（2004）、准教授（2007）、教授（2009～）
- 研究分野** 現代美術、芸術論
- 研究テーマ** 現代美術論、モダニズム、アートと公共性
- 研究業績**
- ・『文化政策を学ぶ人のために』（共著、世界思想社、2002）
 - ・Public + Art : Practice（上海科技出版、2003）
 - ・『シェルター&サヴァイバル／ファンタスティックに生きるためのもうひとつの家』（共著、広島市現代美術館、2008）
 - ・Flatness Folded（MCCM Publishing, 2009）
 - ・「匿名性の芸術作品—パブリックアートと都市：フランスの事例を中心として」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第2巻、2001）
 - ・「移行するモニュメンタリティー」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第3巻、2002）
 - ・現地映画会1 in アサヒ・アート・フェスティバル 2008 など

メッセージ

現代をアートから考える

芸術（アート）は、その時代を端的に表現し、また、その先にやってくる時代をいち早く示しているといわれます。それは現代においても変わりません。不安定で混沌の時代といわれる現代を、つぎの時代へと導く可能性とは何なのか、信じるものがなくなったといわれる私たち現代人を「生かす」ことができるのは、いったいどのようなことなのか。このような時代だからこそ、一見、時代の混沌を示しているにしかすぎないように思える芸術（アート）の領域を深く探ることによって、その手がかりを見つけ出すことができるのではないかと考えます。

現在、芸術（アート）と呼ばれるものとそうでないものの境界は限りなくあいまいになっています。あらゆるものを簡単に「アート」と呼んでしまうのではなく、そのような冠を取り去った「そのもの」として考えること、「アート」とは人にとって何なのかという本質的な問いについて、一見するとアートとは遠いように思われる経済や政治といった事象との関わりにおいて考えること、つねに作品をリアルな視点からとらえることを心がけています。

芸術（アート）を深く知ることは、単に「すぐれたビジネスパーソンに必要なアート思考のもとになる」からではなく、もっと根本にある人間のありかたや世界の姿を知るための手がかりを得ることにつながります。それらは、人間が表現する具体的な事物をていねいに検証することからしか得られません。



NAGAI Satoko

永井 聡子

教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科
大学院 文化政策研究科

E-mail s-nagai@suac.ac.jp

キーワード 舞台芸術論 劇場 演劇 ミュージカル ダンス 演出 観客
劇場計画 運営

学歴 名古屋大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程修了（2001）

学位 博士（工学）（名古屋大学、2001）

経歴 知立市市民ホール建設室（1999）
ちりゅう芸術創造協会チーフプロデューサー（1999～2008）
静岡文化芸術大学非常勤講師（2005～2007）
大阪大学大学院文学研究科非常勤講師（2013）
静岡文化芸術大学講師（2008）、准教授（2012）、教授（2019～）

研究分野 演劇史、劇場史、演劇論、劇場及び舞台プロデュース

研究テーマ 劇場における舞台作品と空間との関係性について

研究業績

- ・『A History of Japanese Theatre』（Cambridge University Press、2016）
- ・『劇場の近代化』（単著、思文閣出版、2014）
- ・『文化庁委託事業 平成25年度劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト』（共著、全国公立文化施設協会編集WG、2014）
- ・「劇場モデルに関する考察—帝国劇場の「前舞台領域」消滅から捉えた「多目的劇場」誕生の経緯について—」（『静岡文化芸術大学紀要』、第13巻、2013）
- ・「日本の劇場空間の近代化に関する研究」（博士論文、2001）
- ・「地域の劇場文化を日本の顔に」（『芸術批評誌【リア】—特集 劇場はだれのもの？』、リア制作室、pp.62～65、2012.10）
- ・静岡文化芸術大学創立10周年記念公演 ミュージカル・ドラマ「いとしのクレメンタイン」（2010.12）企画・プロデュース
- ・静岡市清水文化会館マリナート開館記念事業 DANCE & ACT「Juliet～シェイクスピアの秘めたる恋」企画プロデューサー・出演 別所哲也・平山素子ほか（2013.3）
- ・三島由紀夫原作『豊饒の海』第四巻「天人五衰」企画・プロデューサー（語り 白石加代子、振付・ダンス 大前光市、二十五絃箏 中井智弥、演出 木村繁、作曲 佐藤容子、2017.2）

メッセージ 劇場研究とプロデュース

劇場に関わる「人」「作品」「空間」「観客」について、総合的に研究し劇場の持つメカニズムを探究し続けたいと思っています。

大学院博士課程での研究後、劇場プロデューサーとして10年勤務し、「地域の劇場」はどうあるべきかを考えながら、演劇やダンスなどの舞台作品の製作を行い、教員である現在でも続けています。

劇場における専門家の立場にしながら市民との協働事業も進めてきました。市民の方々とともに、地域の「文化」を「財産」とするために、一丸となって事業に取り組んできました。劇場は「生きもの」です。劇場という「空間」を拠点にして、舞台の専門の領域で働く人々と地域の市民とのエネルギーがぶつかりあってまた新しい「地域の力」が生まれるということを実感してきました。

大学では、学生に劇場の歴史や理論とともに、現場の持つ力を感じることや「現場力」を自らつけることができるよう、「企画を実践する」という舞台製作の現場を体験する授業、そして演出家、舞台美術家など舞台芸術の専門家の存在を知る機会を設定して教育に努めています。

舞台作品の製作や研究、教育を通して、地域の文化が「創造」され「発信」されていく環境を創っていきたいと思います。





MATSUMOTO Shigeaki

松本 茂章

教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科
大学院 文化政策研究科

E-mail s-matsu@suac.ac.jp

キーワード 自治体文化政策 文化とまちづくり 官民協働政策 文化施設研究
日仏文化交流

学歴	早稲田大学教育学部地理歴史専修卒業 同志社大学大学院総合政策科学研究科博士課程（後期課程）修了
学位	博士（政策科学）（同志社大学、2009）
経歴	読売新聞社会部記者、デスク、支局長を経て 県立高知女子大学文化学部教授（2006～2011）（現在、高知県立大学） 関西経済連合会・大阪シアターパークワーキングチームリーダー（2006～2007） 高知県立文化施設事業評価委員会委員（2008～2010） 高知市総合計画審議会委員（2010） 宝塚市文化振興に関する条例検討委員会委員長（2012～2013） 文化庁文化芸術の海外発信形成事業協力者会議委員（2013～2014） 文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）選考委員（2014～） 三島市文化振興審議会会長（2014～2015） 島田市文化市民協働推進委員会委員長（2014～） 浜松市市民協働推進委員会委員長（2014～） 日本文化政策学会理事（2007～） 日本アートマネジメント学会関西支部会長（2006～2015） 日本アートマネジメント学会会長（2015～） 静岡文化芸術大学教授（2011～）
研究分野	政策科学、自治体文化政策、まちづくり政策、文化施設研究
研究テーマ	官民協働の文化政策、地域ガバナンス（共治）とまちづくり、文化施設の設立経緯と運営
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・『芸術創造拠点と自治体文化政策 京都芸術センターの試み』（単著、水曜社、2006）・『官民協働の文化政策 人材・資金・場』（単著、水曜社、2011）・『日本の文化施設を歩く 官民協働のまちづくり』（単著、水曜社、2015）・『指定管理者は今どうなっているのか』（共編著、水曜社、2007）・『SPACの15年』（共編著、静岡文化芸術大学、2013）・『入門 文化政策 地域の文化を創るということ』（共著、ミネルヴァ書房、2008）・『地域の自律的蘇生と文化政策の役割』（共著、学文社、2011）
メッセージ	専門としているのは自治体文化施設研究です。なかでも文化施設をめぐる官民協働や地域ガバナンス（共治）のありように関心を持っています。地域の文化政策がどのような形成過程を経たのか？行政と民間にはどのような接点があるのか？全国各地の文化施設を訪ね歩きながら、いつも考えています。2011年に刊行した単著『官民協働の文化政策 人材・資金・場』（水曜社）では、文化施設が機能するためには、文化政策やアートマネジメント人材の必要性、官民を問わない幅広い資金調達、場の自主的な管理、という3つの条件が大切であることを明らかにしました。そして文化施設をつくる試みが、まちづくりと大いに関連することに気づきました。文化施設がどのように地域と連携し、人々を結びつける「紐帯」となっていくのか、に注目しています。 大学院文化政策研究科では、主指導を務めた修了生たちが力作の修士論文を書き終えました。題目は「地域文化施設における連携と協働の可能性—神戸市立灘区民ホールを事例として—」、「構造転換期の公立博物館に求められる『第三の人材』」などです。若い学生たちとの論議から、はっと気づかされるところがたくさんあります。＜半学半教＞の精神で、日々の教育や研究に励みたいと決意しています。



INOUE Yuriko

井上 由里子

准教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科
大学院 文化政策研究科

キーワード 舞台芸術論 芸術思想史 フランス文学 ノヴァリナ
アール・ブリュット

学歴 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了（2014）

学位 博士（文学）（大阪大学、2014）

経歴 パリ第7大学東アジア言語文化学部日本語学科助手（2008～2009）
エス・モード大阪校非常勤講師（2010～2012）
京都精華大学非常勤講師（2010～2016）
大阪大学大学院文学研究科美学研究室助教代理（2011）
立命館大学非常勤講師（2011～2016）
静岡文化芸術大学講師（2017）、准教授（2020～）

研究分野 演劇学、西洋演劇史

研究テーマ 近現代演劇のドラマツルギー、演劇美学、日仏文化交流

研究業績

著書

- ・« Traduire les mots polysémiques et le pronom je dans le théâtre de Valère Novarina : autour de deux aspects spécifiques au japonais » (*Valère Novarina. Les tourbillons de l'écriture*, M. CHÉNETIER-ALEV, S. LE PORS, F. THUMEREL (dir.), Colloque de Cerisy, Hermann, 2010)
- ・『シャルロット・ペリアンと日本』（共訳、「シャルロット・ペリアンと日本」研究会、鹿島出版会、2011）

論文

- ・「演劇とアール・ブリュット——ヴァレール・ノヴァリナの俳優論を中心に」（『a+a 美学研究』第12号、2018）
- ・「ヴァレール・ノヴァリナの転換期における演出家クロード・ビュシュヴァルトの役割——『時に住むあなた』、『食事』、『架空のオペレッタ』演出をめぐる」（『演劇学論集』第61号、2016）
- ・「ヴァレール・ノヴァリナ『セヌヌ』における供儀と祝祭」（『美学』第237号、2010）

メッセージ

演劇は、日本では義務教育に採用されていないこともあり、あまり馴染みのない芸術かもしれません。けれども、演劇的ふるまひは私たちの身近で目にすることができます。たとえば、みなさんは大学では学生、アルバイト先では店員、サークルでは先輩・後輩という風に、普段いろいろな役を演じていませんか。シェイクスピアの言葉を借りれば、「この世は舞台」と言えるでしょう。

西洋演劇は、古代ギリシアの時代に始まる約2500年の歴史をもち、今日にいたるまで多種多様な表現を生み出してきました。なかには、21世紀の日本に生きる私たちにも自然に共感できる作品もあれば、演劇学（演劇の歴史や理論、上演分析の方法等）を勉強してようやく理解できる作品もあるでしょう。そうかと思えば、劇場で生の舞台を肌で感じると、内容はよく分からないのになぜか心動かされた、という出来事が起こったりします。

私が研究の中心に据えてきた現代フランスの演劇人、ヴァレール・ノヴァリナの芝居との出会いも、えも言われぬ経験でした。既成の言語を破壊する前衛演劇なので、こちらの物の見方がひっくり返されるのです。好き嫌いが分かれるタイプの芝居でしょう。実際、言葉を捏ねくりまわすなんて「インテリの知的遊戯に過ぎない」と批判されることもあります。でも、それは誤解です。彼はただ言語を革新するだけではなく、近代化とグローバル化の過程でなおざりにされた声（古語、方言、中世の神秘思想等）を拾い集め、今に蘇らせているからです。その試みは、便利さや儲けを優先しがちな世の流れに抵抗することに他なりません。

ノヴァリナに限らず、一見ただの遊びのようで、実は重要な問いを投げかけている演劇は珍しくないものです。たかが遊び、されど遊び、それが演劇です。遊びを楽しみながらも、さまざまな角度から作品を吟味する姿勢は、将来みなさんが芸術を支えるときに大きな力になるのではないのでしょうか。ともあれ、観劇は一期一会、ぜひ劇場に足を運び、まずは未知の世界との出会いを堪能してみましょ。



KAMIYAMA Noriko

上山 典子

准教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科
大学院 文化政策研究科

E-mail n-kami@suac.ac.jp

キーワード 19世紀 西洋音楽 リスト ピアノ編曲

学歴	東京藝術大学音楽研究科音楽学専攻 博士課程修了
学位	博士（音楽学）（東京藝術大学、2009）
経歴	日本学術振興会 特別研究員DC1（2007～2009） 東京藝術大学音楽学部楽理科 教育研究助手（2010） 沖縄県立芸術大学音楽学部音楽学専攻 助教（2011～2013） 東邦音楽大学大学院 非常勤講師（2014～） 静岡文化芸術大学講師（2014）、准教授（2017～）
研究分野	西洋音楽史
研究テーマ	フランツ・リスト ヨーロッパにおける編曲の文化史
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・『「新ドイツ派」概念の成立——リストのヴァイマル時代（1848-1861）と「未来音楽」をめぐる論争——』（コンテンツワークス（Book Park 博士論文ライブラリー）、2011）・『音楽表現学のフィールド2』第3章「音楽文化史におけるリストのオペラ編曲」206-221頁（共著、日本音楽表現学会編、東京堂出版、2016）・『ワーグナーシュンボシオン』「ワーグナー＝リストのオペラ編曲」、16-32頁（共著、日本ワーグナー協会編、アルテスパブリッシング、2018）・『《悪魔のロベール》とパリ・オペラ座』「グラント・オペラとピアノ編曲——19世紀市民社会におけるオペラの流通」118-140頁（共著、澤田肇ほか編、上智大学出版、2019）・『音楽を通して世界を考える』第6章「リストのピアノ・ツィクルスにおける3度調配列」446-462頁（共著、土田英三郎ゼミ有志論集編集委員会編、東京藝術大学出版会、2020）
メッセージ	これまでわたしは19世紀を中心とする西洋音楽史や音楽思想を学び、研究してきました。博士論文では1859年に音楽史家で批評家のフランツ・ブレンデルによって提唱された「新ドイツ派」を取り上げました。その用語はリストやヴァーグナー、ベルリオーズという当時の前衛作曲家集団を代表者に据える呼び名というだけでなく、1871年のドイツ帝国誕生へと向かうナショナリズムとの関連においても考察されるべき社会的、政治史的、文化史的概念です。今後も音楽を歴史的に振り返ることで当時の音楽社会に対する理解を深め、そして今日の音楽文化を見つめ直すことにつながる研究を展開していきたいと思っております。



TAKASHIMA Chisako

高島 知佐子

准教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科
大学院 文化政策研究科

学歴	大阪市立大学大学院経営学研究科後期博士課程修了
学位	博士（商学）（大阪市立大学、2010）
経歴	大阪市立大学都市研究プラザ研究員（2010～2011） 京都外国語大学講師（2011～2014） 静岡文化芸術大学講師（2014）、准教授（2015～）
研究分野	アートマネジメント
研究テーマ	芸術文化を担う組織や関連支援産業の研究など
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・「Managing of Traditional Performing Arts Organization」 (The 9th International Conference on Arts and Cultural Management, Presented Full Paper, 2007)・「伝統芸能組織のマネジメント研究への活動理論アプローチ 一人形浄瑠璃における後継者育成と鑑賞者開発の事例から」 (共著、『経営研究』大阪市立大学経営学会、第58巻・第2号、2007)・「Work and Organization of Cultural Profession and Cultural Change: An Activity Theoretical Analysis of Japanese Professional Culinary Work and Organizations in the 1960s and 1970s」 (The 10th International Conference on Arts and Cultural Management, Presented Full Paper (共著)、2009)・「伝統芸能上演組織のマネジメント」 (大阪市立大学・博士論文、2010)・「伝統芸能における実演家組織の収益システム」 (共著、『文化経済学』文化経済学会<日本>、第9巻1号、2012)・「伝統工芸」「伝統芸能」 (共著、『文化経済学 軌跡と展望』ミネルヴァ書房、2016)・「文化・芸術活動のフィランソロピー活動がもたらす社会経済的価値」 (八巻恵子編『企業経営のエスノグラフィ』東方出版、2019)・「地域の歴史と食文化を通じた国際交流」 (松本茂章編『文化で地域をデザインする』学芸出版社、2020)
メッセージ	<p>見る人（鑑賞者）・作る人（アーティスト）という垣根を越えて、人々が芸術・文化に接する場をつくる芸術文化団体（arts organization）が多様な活動にチャレンジし、発展していくために必要なマネジメントのあり方について研究しています。</p> <p>たとえば、長きにわたって続いてきた伝統芸能は変化しないものと思われがちですが、その継承を担う組織は時代に合わせて変化し今日に至っています。こういった変化を追いかけ、不安定になりがちな芸術文化団体の長期的かつ発展的なマネジメントのあり方を考えています。</p> <p>また、伝統芸能に限らず、多くの芸術・文化では衣裳や楽器、画材などの道具は民間企業が供給しており、こういった関連支援産業なくして芸術文化団体の活動は成り立ちません。浜松には、芸術・文化を支える関連支援産業が多く存在します。</p> <p>現場を支える人々・組織・産業、さらに地域や社会といった広い視点からアーティストや鑑賞者、芸術文化団体の活動を考えるには、大学の外に出て、まちを歩き、現場の人々の想いに触れる必要があります。浜松という地を生かして、積極的に調査に出かけ、皆で学びあうことができる環境を作っていきたいと思っています。</p>



TANAKA Yuji

田中 裕二

准教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科

E-mail y-tanaka@suac.ac.jp

キーワード 企業と文化 芸術支援 博物館運営・経営 博物館学

- 学歴** 慶應義塾大学大学院文学研究科美学美術史学専攻アート・マネジメント分野修了
- 学位** 修士（美学）（慶應義塾大学、2010）
- 経歴** 東京都江戸東京博物館専門調査員（1999～2004）
東京都生活文化局文化振興部行政研修（2013～2014）
江戸東京たてもの園学芸員（2014～2015）
東京都江戸東京博物館学芸員（2004～2020）
学習院女子大学非常勤講師（2014～2019）
神奈川大学非常勤講師（2014～2019）
昭和女子大学非常勤講師（2014～2020）
法政大学兼任講師（2019～）
静岡文化芸術大学准教授（2020～）
- 研究分野** 博物館学、日本近代史
- 研究テーマ** 近代日本の企業家及び企業による芸術支援、博物館運営
- 研究業績**
- ・『東京流行生活』（共著、河出書房新社、2003）
 - ・『明治、このフシギな時代』（共著、新典社、2016）
 - ・『企業と美術 近代日本の美術振興と芸術支援』（単著、法政大学出版局、2021）
 - ・「公立博物館の外部資金導入 その経緯・事例・課題」（『博物館研究』Vol.52 No.12、2017）
 - ・「見世物の規制と制度化をめぐる近代盛り場の変遷 —公園・博覧会・勤工場—」（東京都江戸東京博物館紀要第10号、2020）

メッセージ 大学院では日本近代史とアート・マネジメントを専攻し、いまは明治以降近代日本の企業経営と芸術支援について研究を進めています。博物館学の分野では、指定管理者制度における博物館の持続的発展のために必要な経営や運営に関心を持ち、研究に取り組んでいます。

博物館は設立目的や使命に基づいた資料（作品）が集積しています。いままで行方不明だったもの、残っていることが奇跡的なもの、そして新たに発見されたもの。博物館にはそのような「もの」が集まってきます。学芸員は膨大な歴史資料や美術作品と対面し、最前線でその「もの」に直接触れることができます。そして、博物館に集まったコレクションの中から、出品するものを選択し、展示のストーリーを構成する企画力も問われます。また、新たにわかったことや、そのものがもつ意味を、わかりやすく解説しなければなりません。しかし、言うは易く行うは難し。一朝一夕にはできません。私もそれが実践できたのかについては常に自問自答しています。

一方、博物館に学芸員は必要ですが、学芸員だけでは成り立ちません。例えば、公立館ですと行政の仕組みや公益法人会計の知識、ミュージアムショップやレストランの管理運営、建物の修繕や維持管理、地域を巻き込んだ事業の企画運営、館と来館者をつなぐ教育普及、戦略的な広報計画の策定など、博物館では多彩な顔触れのプロフェッショナル人材が必要とされています。

私は博物館の学芸部門と管理部門の双方を経験し、行政機関でも文化施設の管理運営の実務を担ってきました。現場で培ってきた学芸部門と管理部門の知見は全て伝えるつもりです。博物館学芸員として必要な技能だけではなく、今日の博物館において必要な機能や役割を学び、実践的な知識を身につけ、博物館学芸員に留まらず、みなさんには行政機関や文化施設、または文化芸術に関連した企業で活躍する人になってほしいと願っています。



NAKAMURA Miho

中村 美帆

准教授

所属 文化政策学部 芸術文化学科

E-mail m-naka@suac.ac.jp

キーワード 文化政策学 文化資源学 文化政策と法・制度 文化権 (文化的権利)

学歴 東京大学 法学部 2類 (公法) 卒業
東京大学 大学院人文社会系研究科 文化資源学研究専攻 文化経営学専門分野 修士課程
修了 (2007)
東京大学 大学院人文社会系研究科 文化資源学研究専攻 文化経営学専門分野 博士課程
単位取得満期退学 (2014)

学位 博士 (文学) (東京大学、2017)

経歴 日本学術振興会 特別研究員 (DC2) (2009~2012 ※採用中断舎)
跡見学園女子大学兼任講師 (2014~2015)
愛知大学非常勤教員 (2015~)
東京大学文学部非常勤講師 (2017~)
静岡文化芸術大学非常勤講師 (2013~2014)
静岡文化芸術大学講師 (2014)、准教授 (2018~)

研究分野 文化政策と法・制度

研究テーマ 文化権、文化国家、自治体文化政策、その他文化政策における法・制度の問題

研究業績

- ・『文化的に生きる権利—文化政策研究からみた憲法第二十五条の可能性—』 (単著、春風社、2021)
- ・「文化国家」「文化権」 (小林真理編『文化政策の現在1 文化政策の思想』東京大学出版会、2018)
- ・「文化政策とソーシャル・インクルージョン：社会的包摂あるいは社会包摂」 (小林真理編『文化政策の現在2 拡張する文化政策』東京大学出版会、2018)
- ・「文化政策と法」 (小林真理編『文化政策の現在3 文化政策の展望』東京大学出版会、2018)

メッセージ 文化や芸術に関わる制度や仕組みについて、理念や思想といった抽象的なものから具体的な実践のあり方まで、幅広く研究対象として関心を持っています。博士論文では、人間が文化に関わることを人権として認める「文化権 (Cultural Right)」と、日本国憲法第25条「健康で文化的な最低限度の生活」の「文化」概念の関連性について、研究を進めてきました。また、その傍らで学生の頃から自治体文化政策の現場に関わる機会を得て、文化権の実現に向けた文化政策の実践のための条例や計画といった制度設計の在り方についても考察してきました。

芸術や文化に親しんできて、具体的なアーティストや作品といった“中身”に関心を持つようになる方は多いと思います。私の興味もそこから始まりました。そのうちに、芸術や文化の持つ力には、「単に私がそれを好き」というだけに留まらない可能性があると思うようになって、芸術文化“政策”に関心を持つようになったと言ってもいいかもしれません。

制度や仕組みはあくまで芸術や文化そのものに対して裏方です。裏方には裏方としての矜持や専門性があります。決して、芸術や文化に対して、はじめに制度ありき、ではありません。晴れ舞台を支える裏方として、社会における文化や芸術の可能性をひらくために必要な制度の在り方を考えたいと思っています。

親の転勤で様々な地域で暮らしましたが、静岡県との関わりは本学が初めてです。2014年に縁あって赴任した浜松の地で、文化芸術を“支える”側の立場として、多様な文化の豊かさを尊重し、社会の中で生かしていくために必要な制度や仕組みについて、考えていきたいと思っています。

デザイン学部

デザイン学科

大学院

デザイン研究科



MIYATA Keisuke

宮田 圭介

教授、デザイン学部長

所属 デザイン学部 デザイン学科（インタラクション領域）
大学院 デザイン研究科

E-mail miyata@suac.ac.jp

キーワード 情報デザイン ヒューマンインタフェース 発達障害 人間機械システム

学歴	東京大学大学院工学系研究科機械工学修士課程修了（1983）
学位	修士（工学）（東京大学、1983）
経歴	(株)小松製作所研究本部技術研究所（1983～2004） University of California, Berkeley客員研究員（1989～1991） 静岡文化芸術大学助教授（2004）、教授（2006～）
研究分野	ヒューマンインタフェース（気持ちよく使える情報機器やソフトウェアの研究）
研究テーマ	発達障害者支援の研究、操縦しやすい運転操作系の研究
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・「発達障害者向け学習教材のデザインについて」（「人間生活工学」、Vol.17、No.1、2017）・「発達障害者向け自動車運転免許取得のための支援教材の検討」（ATACカンファレンス2016京都、2016）・「学生の自尊感情向上を目的とした教材制作手法の検討」（ヒューマンインタフェース学会研究報告集、2016）・「通常学級に在籍する発達障害児向けデジタル国語教材の導入課題」（ヒューマンインタフェースシンポジウム、2014）・「発達障害児向けピクトグラムの検討（第二報）」（ヒューマンインタフェースシンポジウム、2013）・「乗用車以外の車両における運転操作系の技術動向」（アドバンティシンポジウム、2012）・「通常学級に在籍する発達障害児の読解支援デジタル絵本」（ヒューマンインタフェース学会研究報告集、2012）・「高次脳機能障害患者向けリハビリテーション教材の検討」（ヒューマンインタフェース学会研究報告集、2011）
メッセージ	<p>パソコンのホームページやスマートフォンのアプリで使いにくく感じたことはありませんか。あるいは、銀行のATMやコンビニエンスストアのマルチコピー機の操作で困ったことはありませんか。それは、インターフェイスデザインのどこかに問題があるからなのです。</p> <p>パソコンやスマートフォンなどの情報機器や、関連するソフトウェアが日常生活の道具になるにつれて、インターフェイスデザイナーという職種が生まれました。ユーザーが必要な情報を「正確に」「分かりやすく」「美しく」「扱いやすく」伝える方法を提案するデザイナーです。</p> <p>この分野は非常に歴史が浅いので、グラフィックデザインやプロダクトデザインと違い、一流と呼べるデザイナーが少ないと思います。大学でのインターフェイスデザイン授業も21世紀から増えてきたので、体系的に学んだデザイナーも多くないでしょう。（私も会社に在職中、独学で学びました。）コンピュータ技術の発展に伴って生まれた職種ですので、変化は激しいですが、若者にとって未来の明るいデザイン職です。</p> <p>そして、インターフェイスデザイナーに必要な資質は、「ある程度のデザインセンス+論理性（基礎学力）」にあると私は考えております。本学の卒業生を見た限りでは、飛びぬけた表現力がなくても、デザインが好きで勉強した学生であれば、優秀なインターフェイスデザイナーになれる可能性があります。多くの学生がこの分野にチャレンジされることを願っております。</p>



MATOBA Hiroshi

的場 ひろし

教授、デザイン研究科長、文化・芸術研究センター長
所属 デザイン学部 デザイン学科（インタラクシオン領域）
大学院 デザイン研究科

キーワード インタラクシオンデザイン ユーザインタフェース
メディアアート コンテンツ制作 情報処理

学歴	東京大学工学部計数工学科数理コース卒業（1985） 京都市立芸術大学美術研究科博士後期課程メディアアート領域修了（2012）
学位	博士（美術）（京都市立芸術大学、2012）
経歴	NEC日本電気株式会社 C&C研究所等（1985～2006） 千葉大学非常勤講師（2007、2011、2013） 静岡文化芸術大学助教授（2006）、准教授（2007）、教授（2011～）
研究分野	インタラクシオンデザイン、メディアアート
研究テーマ	様々な装置、サービス等におけるインタラクシオンデザイン メディア技術が拓く新しいアート表現
研究業績	主な作品と発表先（入選及び招待による発表） (1) メディアアート作品《Digital Fukuwarai》 ACM CHI 98 (Los Angeles 1998) , ACM SIGGRAPH 98 Art Gallery (Orlando 1998) , Ars Electronica 98 (Linz 1998) , Vidéotheque de Paris (Paris 1998) , Connected Cities (Duisburg 1999) , Millennium Dome (London 2000) , Kiev International Media Art Festival (Kiev 2001) , 日本バーチャルリアリティ学会論文誌 論文採録（単著 2000）, 国内外科学館等 (2) メディアアート作品《Micro Friendship》 Ars Electronica 99 (Linz 1999) , ACM SIGGRAPH 2000 Art Gallery (New Orleans 2000) , 日本バーチャルリアリティ学会論文誌 論文採録（単著 2001） (3) メディアアート作品《Performing Arts for the Future Mobile Generation》 ACM SIGGRAPH 2007 Art Gallery (San Diego 2007)
	特許 「画像表示装置」（2000）等, 成立した特許 国内34件（内訳：単独発明19件, 共同発明15件）, 米国7件（内訳：単独発明1件, 共同発明6件）
メッセージ	受験生へのメッセージ 「メディア造形」分野は、使う道具の多様さと同様に、成果の考え方も多様です。作品制作、学術研究、産業・社会への寄与等、活動範囲を幅広く考えることができます。豊かな発想で、「メディア造形」と積極的に関わる気持ちのある方を歓迎します。 企業等へのメッセージ ほとんどの産業は「メディア造形」と強い関わりを持っています。研究委託、製品コンセプト立案支援、新しい技術や製品の価値を訴求するための演出・コンテンツ制作等々、多様な連携形態をとることが可能です。

デザイン学科

デザインを総合的に捉える力を持ち、
様々な分野で活躍できる人材を養成。



WADA Kazumi

和田 和美

教授、デザイン学科長

所属 デザイン学部 デザイン学科（インタラクション領域）
大学院 デザイン研究科

E-mail wada@suac.ac.jp

URL <http://www.kazumiworx.com>

キーワード メディアアート ウェブデザイン グラフィックデザイン ゲーム パノラマVR映像

学歴	筑波大学芸術研究科修士課程デザイン専攻総合造形分野修了（1991）
学位	修士（デザイン学）（筑波大学、1991）
経歴	(株)電通プロックス（現：(株)電通テック）（1991～2002） 平成13年度文化庁在外芸術家研修制度にて渡独（2001～2002） フリーランスとしてドイツにて広告・Web等企画演出制作（2002～2006） 静岡文化芸術大学講師（2006）、准教授（2010）、教授（2015～）
研究分野	インタラクティブ・メディア・アート、Webデザイン、Flash
研究テーマ	映像を中心としたインタラクティブ・インターフェイス
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・DVD「kazumiworx 1991-2004」/2004 ichiigai.com（ドイツ・レーベル）・平成13年度年度文化庁在外芸術家研修報告書 題目：「映像を中心としたインタラクティブシステムのインターフェース設計及びプログラム構築の研究」・平成19年度～20年度科研費若手研究（スタートアップ） 題目：「偏光視差による異なる映像情報の閲覧を可能にするインターフェース・デバイスの開発」・平成19年度（2007）－「ネット販売の教育的可能性に関する研究」大学公式サイト及びグッズの開発・平成20年度（2008）－浜松商工会議所主催「IT経営応援隊事業」産学連携事業として中小企業HP作成支援監修・平成23年度（2011）より静岡県ウェブ広報アドバイザー・平成23年度（2011）－産学連携事業として全方位パノラマ動画インターフェイス開発・平成24年度（2012）－静岡新聞SBS主催「第13回しずおか市町対抗駅伝」公式コース案内システムに同上開発中のパノラマ動画インターフェイスが採用される など
メッセージ	地域と密着しながら、浜松の文化を世界発信していく術を共に模索していきたいと考えております。地元企業との連携がさらなる大学と地元のアピールにつながり、浜松から世界へ情報発信していくために、皆様の声をお待ちしております。



IZU Yuichi

伊豆 裕一

教授、図書館・情報センター長

所属 デザイン学部 デザイン学科 (ビジュアル・サウンド領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail y-izu@suac.ac.jp

キーワード デザイン科学 デザイン思考 デザインマネジメント
プロダクトデザイン

学歴	千葉大学 工学部 工業意匠学科卒業 (1980) 慶應義塾大学 理工学研究科 総合デザイン工学専攻修了 (2014)
学位	博士 (工学) (慶應義塾大学、2014)
経歴	株式会社東芝 デザインセンター (1980~2012) オリベッティ社 出向 (1987~1988) 東芝アメリカ家電社 駐在 (1993~1997) 慶應義塾大学 理工学部 非常勤講師 (2005~2006) 静岡文化芸術大学 デザイン学部 非常勤講師 (2008~2011) 筑波技術大学 産業技術学部 非常勤講師 (2009~2011) 筑波大学 大学院人間総合科学研究科 非常勤講師 (2009) 静岡文化芸術大学教授 (2012~)
研究分野	デザイン科学
研究テーマ	デザイン発想、表示技法
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・放射線医学研究所重粒子治療システム (2011、グッドデザイン賞金賞受賞)・『Mメソッド 多空間のデザイン思考』 (共著、近代科学社、2013)・“Structural Model of the Sketching Skills and Analysis of Designers’ Sketches” (共著、Proceedings of the IASDR 2013, PP.1733-1742, 2013)・「電気釜のデザインと広告の変遷における調理家電と食文化の関係」 (共著、『静岡文化芸術大学研究紀要』第15巻、2014)・「デッサンとスケッチの描画スキルと描画過程の関係」 (共著、デザイン学研究第64巻 第2号、2017)・「インタラクティブデザイン基礎教育としての表示技法」 (単著、『静岡文化芸術大学研究紀要』第18号、2018)・心臓マッサージ教育教材「Dock-kun」 (2019、キッズデザイン賞受賞)
メッセージ	<p>デザインにおけるスケッチ</p> <p>多くのデザイナーはデザインを創造する過程において、デザインのイメージを表現した絵であるスケッチを描きます。スケッチは新しい考えや創造性を刺激するものとして多くのデザイナーに認識され、また、新たなデザインの導出を促す効果があることなどが指摘されています。</p> <p>絵を描く行為は目的によりいくつかに分類することができます。目で見たものを表現する絵は写生やデッサンと呼ばれ、一般には、これらが正確に描けることで「絵が上手い」といわれることが多いように思われます。しかし、デザインのためのスケッチはそれとは異なるものです。なぜなら、写生やデッサンが目に見える姿や形を正確に表現するものであるとすれば、スケッチは、頭の中に創造したデザインのイメージを表現し確認するためのものであり、必ずしも上手な絵として描く必要はありません。</p> <p>近年、デザイナーがデザインに用いる手法を応用した課題解決手法として、デザイン思考という言葉が注目されています。それに合わせて、デザインの対象もプロダクトやグラフィックと言った色や形を伴うモノのデザインから、ビジネスにおける課題解決や街の活性化などを目的としたコトのデザインへと広がっています。コトのデザインとはデザインの対象とするユーザーの経験や体験をデザインすることであり、そのためにはユーザーとその周りの状況とのインタラクションを考え、スケッチとして表現していくことが必要となります。</p> <p>デザイン思考は、今後ビジネスやコミュニティーにおける課題解決の手段として一層の活用が期待されています。デザイナーを目指す皆さんとともに未来の社会を考え、スケッチブックに描いていきたいと思えます。</p>



ISOMURA Katsuro

磯村 克郎

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (建築・環境領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail k-isom@suac.ac.jp

キーワード 公共性 地方都市 インダストリアルデザイン 情報環境 領域横断

学歴	九州芸術工科大学芸術工学部工業設計学科卒業 (1982)
学位	学士 (芸術工学) (九州芸術工科大学、1982)
経歴	株式会社GKインダストリアルデザイン研究所 (1982) 株式会社GK設計 (1983) 株式会社デザイン総研広島 (1995) 九州芸術工科大学 芸術工学部 工業設計学科 非常勤講師 (1999~2001兼任) 富士通ワーク株式会社 (2001) 静岡文化芸術大学准教授 (2009)、教授 (2012~)
研究分野	パブリックデザイン、インダストリアルデザイン
研究テーマ	公共のデザイン・まちづくりとものづくりの融合・Projectability (浜松市市民活動のアクションリサーチ)
研究業績	<ul style="list-style-type: none">『街路と空きビルにおけるアクティビティの誘発-地域の大通り再生プロセスの中で』(磯村克郎、野島稔喜、芸術工学会誌No.78、2019)『街路整備の視点によるまちづくりのデザイン-地域の大通り再生プロセスの中で』(磯村克郎、野島稔喜、芸術工学会誌No.77、2018)『パブリックデザイン事典』(共著、株式会社産業調査会、1991)『静岡県文化プログラム「手の愉悦~革新する工芸展」展示デザイン(【主催】静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター【共催】静岡県文化プログラム推進委員会、2020)『令和元年度 駿河湾フェリー基本構想』(静岡県、2019)
メッセージ	<p>ものから都市へ</p> <p>デザインの実務畑から、パブリックデザイン・インダストリアルデザイン専門の大学教員として本学に着任してまる12年になりました。大学教員活動の3本の柱は、教育・研究・社会貢献ということで、毎週講義や演習を行い、デザインという実務的な面をもつ対象を研究対象としても扱い、社会的には、産学連携や自治体の地域づくり活動に携わって参りました。</p> <p>デザインは、他の学問よりも相当に実務的な営みです。また、モノからコトへと言われる昨今ですが、デザインするという行為は実に即物的な行為でもあります。そんな思いから、身に染み付いたデザインを持続させるため、Public Studio という実務活動もしています。産学連携や実務活動から生じるプロジェクトは、デザインの現実であり、現場そのものです。学生たちがこれに関わる時は、驚くようなモチベーションと成果を出してきます。そのプロセスを記録し、見直すと、新しいデザイン方法論の研究を行うことができます。</p> <p>そのようなデザインは、社会の方々と進めていくデザインでもあります。これまでの活動のなかでは、地域で高い意思や技術を持って、経済至上主義に陥らず、社会や地域を高めて行こうという様々なひとと関わることができました。デザインには、社会や地域への視点が必要である、とデザインの公共性への思いをあらたにしました。</p> <p>社会の方々と、研究者としてデザイナーとして、あるいは研究室で学生と活動してつくりあげるデザインは、オープンで生き生きとしたものです。私は、このような「生きられたデザイン」をさらに高めていきたいと考え、活動していく所存です。</p>



IWASAKI Toshiyuki

岩崎 敏之

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (建築・環境領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail t-iwasa@suac.ac.jp

URL <https://be-do-see.com/structure/>

キーワード 建築構造学 デザイン教育 木質構造 耐震診断

学歴	京都工芸繊維大学工芸学研究科修士課程建築学専攻修了 (1989)
学位	修士 (工学) (京都工芸繊維大学、1989)
経歴	学校法人富嶽学園 日本建築専門学校 専任教員 (1989~1999) 学校法人ソニー学園 湘北短期大学講師 (1999) 准教授 (2003) 教授 (2010~2016) 静岡文化芸術大学准教授 (2016)、教授 (2020~)
研究分野	建築構造学 (主として木質構造)
研究テーマ	<ul style="list-style-type: none">・デザイナーのための構造力学の教育方法について考える。・空間を「かたち」にする「しくみ」について探究する。・伝統的な建造物の耐震診断や耐震補強について考える。
研究業績	著書 <ul style="list-style-type: none">・『住まいのミカタ』 (共著、学芸出版社、2009)・『生活プロデュース入門』 (共著、青土社、2010) 論文・解説 <ul style="list-style-type: none">・「力や形の工学的原理を伝える言語についての考察」 (『芸術工学会誌』 No.76, 2018)・「概念レベルの創起を促す実践演習の方法」 (『静岡文化芸術大学研究紀要』第19巻, 2019)・「構造の工学的原理を学ぶ場の実践例に関する考察 木造耐力壁ジャパンカップの開催による学びの機会提供」 (日本デザイン学会 第66回春季研究発表大会, 2019) 社会的活動 <ul style="list-style-type: none">・日本住宅・木材技術センター 木質建材利用合理化委員会 等 委員 (1996~1999)・静岡県文化財建造物耐震診断指針策定委員会委員 (2008~2010)・古谿荘保存活用計画策定委員会委員 (2014~2016)
メッセージ	<p>日々の教育活動において建築の構造を考えることの面白さを伝えていくとともに、建築の構造について考える際の発想方法そのものが、建築に留まらず、さまざまなプロジェクトの実践に生かせるということを、身をもって示していきたいと考えています。</p> <ul style="list-style-type: none">・建築構造学の視点からデザインを考える。 <p>建築における構造学とは、さまざまな建築材料を合わせて、いかに「かたち」にするかということを考える学問であると捉えています。その全体像を示すものとして、構造デザイン概念モデル (図) を提案しています。このモデルで示す体・相・用の3層を往来することが構造デザインの思考プロセスだと考えています。このモデルを起点にして、日々あれやこれやと思い廻らせています。</p> <ul style="list-style-type: none">・伝統的な建造物の耐震診断や耐震補強について考える。 <p>伝統的な建造物は、計算モデルが先にあったわけではなく、さまざまな工夫や試行錯誤の経験の積み重ねの元、形あるものとなっています。それらを残していくために構造について探究すべきことは、単に計算モデルに置き換えて解析するという事に留まりません。その方法の模索に向き合っていきたいと思っています。</p> <ul style="list-style-type: none">・地域の課題に向き合う。 <p>浜松市は天竜材の産地です。森林資源を有効活用するためには、さまざまな課題と向き合わなければなりません。建築構造学の視点から、その問題解決に役立つ提案などができれば良いと考えています。</p>



UEDA michinori

植田 道則

教授

所属 デザイン学部デザイン学科（インタラクティブ領域）
大学院 デザイン研究科

E-mail m-ueda@suac.ac.jp

キーワード 建築・インテリア 木構造 環境計画 地域創生
デザインとエンジニアリングの融合 リノベーション

学歴	大阪大学大学院工学研究科博士前期課程建築工学専攻修了
学位	修士（工学）（大阪大学、1990）
経歴	株式会社竹中工務店設計部（1990～2021） 神戸松蔭女子学院大学 非常勤講師（2009～2020） 関西大学キャンパスデザイン委員会メンバー（2011～2014） 静岡文化芸術大学教授（2021～）
研究分野	日本固有の美意識を育んできた建築技術の未来への継承
研究テーマ	天竜材利用による在来木造促進に関する研究－職人の経験と勤の体系化－
研究業績	論文・解説 ・『文化財活用に向けての地域環境整備に関する基礎的研究』（大阪大学日本建築学会近畿支部発表、1990） ・第23回BELCA賞ロングライフ賞受賞寄稿論文（『しあわせな建築』公益社団法人ロングライフビル推進協会編、『BELCA NEWS』掲載、2014） 作品・プロジェクト ・道後温泉界隈での一連の作品と街づくりへの参画（2003～） ・神戸松蔭女子学院大学六甲キャンパス一連の改修（2007～） ・通天閣免震レトロフィット（2015）
メッセージ	『天竜材利用による在来木造促進に関する研究－職人の経験と勤の体系化－』の概要 この研究の概要は以下の三つの段階を踏まえて行うものとしている。 ① 天竜材を用いた在来木造促進に向けた基礎的研究 遠州地域における木材利用の歴史的変遷から今日に至るまでの天竜材および地域の木工事の現況について、量的調査（統計的調査）と質的調査（実地見聞ヒアリング）を行い、地域に受け継がれる木造在来工法の状況、木材利用促進に向けた法的・制度的な課題とその解決方法について考察する。 ② 天竜材を用いた在来木造促進に向けた地域計画課題の研究 上記基礎的研究を受けて、植林から製材加工に至る浜松地域の地産状況把握と防災拠点選定条件策定に向けた考察を行う。モデル地域を選定し、日常利用、災害時利用の観点から計画とシミュレーションを行う。シミュレーションから見えてきた課題についてフィードバック・考察、利用促進上の指針策定と建築計画上の課題を考察する。 ③ 天竜材を用いた在来木造促進に向けた建築計画課題の研究 天竜材の利用特性について多角的に分析する。特に経年変化や、防火性能を補完する仕様やしくみについて考察する。また、モデュロール、ディテールデザイン、施工方法等加味したモデルシステムの設計を行い、実験とシミュレーションにより、実用に向けたフィードバックと考察を行う。



OBAMA Tomoko

小浜 朋子

教授、学生部長

所属 デザイン学部 デザイン学科 (デザインフィロソフィー領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail t-obam@suac.ac.jp

キーワード ユニバーサルデザイン 生活研究 高齢者 QOL
デザインリサーチ 環境心理

学歴 奈良女子大学 家政学部 住居学科 卒業
立命館大学大学院 理工学研究科 工学博士取得

学位 博士 (工学) (立命館大学、2005)

経歴 パナソニック(株) 本社 及び デザイン部門 (1989~2014)
静岡文化芸術大学 大学院 デザイン学部 准教授 (2014)、教授 (2020~)

研究分野 生活・高齢者研究 (ユーザーエクスペリエンス・視覚情報処理・環境心理など)

研究テーマ 「見落とし」を生じる人間・生活環境要件の研究
高齢者の生活の質 (QOL) を高めるデザインの考案

研究業績

論文

- ・コロナ禍における「コミュニケーションのユニバーサルデザイン」に関する考察 ~ SUACの学生レポートの分析から~ (単著、『静岡文化芸術大学研究紀要』2021)
- ・新聞におけるユニバーサルデザインの研究 ~後期高齢者に着目して~, (単著、『静岡文化芸術大学研究紀要』2020)
- ・Categorical Effects in Printed Color for Elderly and Young People under Different Color Temperature of Lighting, (共著、TAGA 2019, 2019)
- ・The Universal Packaging Design on Foreigner Perception in the Case Study of Thai Souvenir, (共著、IAPRI 2018 2017)
- ・『SUACの研究活動15年の成果』(共著、静岡文化芸術大学 2017)

共著作品・プロジェクト

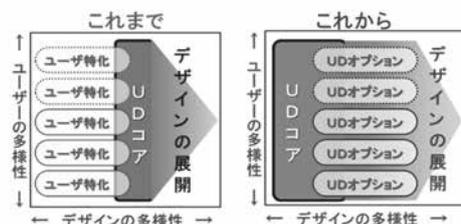
- ・高齢者新聞プロジェクト (2015~2018)
- ・携帯アプリ ハッピーイルミネーション (2009)
- ・携帯アプリ Feel*Talk (2006~2007)
- ・かんたんモード (2004)
- ・白内障疑似体験ゴーグル (1996、2000)

特許等

白内障疑似体験装置用フィルタの製作方法と白内障疑似体験装置 (特開平11-119638)

メッセージ

「年齢や性別、能力の如何にかかわらず、全ての人が利用できるようにモノや空間、サービスなどをデザインする」というUDの概念は日本に広がり始めてから20年余り、静岡県、静岡市、浜松市、本学では積極的に政策・教育・研究に取り入れてきていますが、私自身も、企業、大学に身を置きながら、商品開発、ガイドラインづくり、研究などを行ってきました。これまで蓄積したナレッジやネットワークを基にしつつ、UDの専門家だけでなくSUACの学生・教職員や地域の方々が一緒になって、今後のUDの展開を考え、実践していくというのが私のスタンスです。次世代を担う学生とともに、研究、フィールドワーク、商品提案などを通して、生活者の質を高めるために大切なものを見失わずに、これからの少子高齢化の社会の中に生きるものを残していきたいと考えています。





KAMEI Akiko

亀井 暁子

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (建築・環境領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail a-kame@suac.ac.jp

キーワード 建築設計 地域と建築 教育空間 動物介在教育と空間

学歴	京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了 (1996) 京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了 (2019)
学位	博士 (工学) (京都大学、2019)
経歴	株式会社日本設計 (1996~2002、2003~2013) パリ建築学校ラ・ヴィレット校 留学 (2002~2003) 静岡文化芸術大学講師 (2013)、准教授 (2016)、教授 (2021~)
研究分野	建築設計、教育空間、学びと空間、地域・都市デザイン、サステナブルデザイン
研究テーマ	建築とサステナブルデザイン、教育施設と地域コミュニティ、動物介在教育の空間デザイン
研究業績	論文 ・「現代の教育現場における動物飼育空間のあり方に関する研究 (その2) : 時代の変遷に即した小学校動物飼育環境についての考察」 (共著、日本建築学会環境系論文集、第85巻768号、2020) ・「防災建築街区等の共同ビルにおける利活用事例からみる空間構造について」 (共著、日本建築学会東海支部研究報告集、第58号、2020) ・「児童の関心が高まる動物との関わりに関する空間的考察」 (共著、動物介在教育・療法学雑誌、第10巻第1・2号、2019) ・「現代の教育現場における動物飼育空間のあり方に関する研究」 (共著、日本建築学会環境系論文集、第84巻第757号、2019) ・世界図にあらわれた空間構想の考察 (1996) 作品・プロジェクト ・上智福岡中学高等学校中央棟 / 設計・監理 (2012) ・北九州市立黒崎文化ホール / 設計・監理 (2012) ・長崎日本大学中学高等学校武道場 / 設計・監理 (2007) ・南山高等学校中学校女子部新校舎 / 設計・監理 (2006) ・跡見学園女子大学新学部棟 / 設計・監理 (2002) (以上日本設計所属時作品)
メッセージ	ある場所に建築を設計するということは、その場所の新たな環境を創ることであると捉えています。そしてその積み重ねが街をつくり都市景観、都市環境をつくります。そして、その場所で生活する人と環境との関係をつくり、その場所で過ごすことにより人が育まれます。私は今日まで、ある場所に実際に新たな環境を創る建築設計の実務を通して、その場所にふさわしい生活環境のあり方を模索してきました。 それは、その場所と周辺環境が持つ様々な要素と向き合い、読み解き、広域的スケールから詳細に至るまで様々なスケールを行き来しながら、その場所にふさわしいあり方を模索することの積み重ねです。それらの要素は、目に見えるものはもちろん、文化・歴史や地域コミュニティといった、物の形としては見えないものも含まれます。私が多くかかわってきた教育施設も、これらとの連続性を考慮しながら計画することで、新たな展開が生まれると考え取り組んでいます。 そして、望ましい環境の実現は、多くの専門家とのコミュニケーションとコラボレーション、そして知恵の結集によって成し遂げられるものだと考えています。検討内容に応じて体制や手法など柔軟に対応いたしますので、まずはご相談頂ければと思います。



Cosei Kawa

かわこうせい

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (ビジュアル・サウンド領域)

E-mail k-cosei@suac.ac.jp

キーワード 絵本 イラストレーション 人工知脳 AI

学歴	国際基督教大学 (ICU) 教養学部 MA (Illustration) 英国Falmouth University
学位	修士 (Illustration) (Falmouth大学、2007)
経歴	日本電信電話株式会社 国際本部 (1997) 京都造形芸術大学 専任講師 (2011)、准教授 (2014) 静岡文化芸術大学 准教授 (2016)、教授 (2020~)
研究分野	絵本イラストレーション
研究テーマ	絵本イラストレーションにおける視覚伝達
研究業績	著書 ・ 絵本『Carpe Diemそんな日もある』 ふしあな舎, 2020 ・ 絵本『3人の王子』 バベルプレス, 2018 ・ 絵本『An Unlikely Ballerina』 Kar-ben Publishing, 2018 ・ 絵本『The Dragon's Bride and Other Dragon Stories』 Harper Collins, 2017 ・ 絵本『The Tigon and the Liger』 Lantana, 2016 ・ 絵本『Feeding the Flying Fanellis』 Carolrhoda, 2015 ・ 絵本『Two Dragon Tales』 Collins Educational, 2015 ・ 絵本『Rifka Takes a Bow』 Kar-ben Publishing, 2013 ・ 絵本『How to Persuade a Grumpy Goddess』 Pearson, 2013 ・ 絵本『The Three Princes』 Collins Educational, 2011 ・ 絵本『Issun Boshi』 Hachette Children's Books, 2009 ・ 絵本『こころどろぼう』 ワニブックス, 2005
メッセージ	絵本は、ひとが人生の最初に出会う表現メディアです。たとえ読んだことは覚えていなくても、その後の人間づくりに大きな影響をあたえ、豊かな人間性と生きる力をはぐくむ心の栄養になります。思想家ポール・アザールは、「子どもたちでも読んですぐ理解できるような簡素な美を持っている本、それを読んだ子どもたちが、深い感動で身も心もうちひしがれ、一生その思い出を心にしまっておけるような本」こそが絵本だと語っています。それは子どもにも大人にも人生を自由にする翼を授けます。人類がこれまでにちかかってきた美と叡智の結晶を、最高のかたちで注ぎこむべきもの、それが絵本でしょう。「ことばと絵によって物語る生き物」ともいわれる絵本は、イラストレーション、平面構成、ストーリーテリング、グラフィックデザインなどが有機的に組み合わさった総合芸術であり、視覚伝達デザインのさまざまな要素をつつみこんでいます。ページを繰ってコミュニケーションしながら読み聞かせることで成りたつ感情の交換は、国境をまたいで世界へとひろがっています。絵本イラストレーションは、ことばを超えて世代も超えて、またたく間に伝わります。強く美しく無垢な絵本イラストレーションにふれて、自由の学問への一歩を踏みだしましょう。



KURODA Kohji

黒田 宏治

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (デザインフィロソフィー領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail kuroda@suac.ac.jp

キーワード 地域 産業 デザイン政策 マネジメント プロモーション

学歴	東京工業大学 制御工学科 卒業 (1979)
学位	学士 (工学) (東京工業大学、1979)
経歴	(株)GKインダストリアルデザイン研究所 (1979) 静岡文化芸術大学助教授 (2000)、教授 (2004～)
研究分野	社会・地域デザイン、デザイン政策・地域産業振興・まちづくり、現代デザイン史
研究テーマ	デザイン産業の歴史と展望、現代社会とデザイン (文学とデザインなど) 戦後日本のデザイン政策・プロモーション、地域産業・伝統工芸産業とデザイン 地域社会とデザインマネジメント、パートナーシップ型の地域経営のまちづくり 科研・基盤研究C「日本デザイン政策の研究アーカイブの構築」18K11961、2018-20 科研・基盤研究B「地域がつくる地域デザイン史の研究」15H02877、2015-18
研究業績	<ul style="list-style-type: none">『デザインの産業パフォーマンス』 (鹿島出版会、1996)『地域を活かす第3セクター戦略』 (共著、時事通信社、1993)『地域経営の革新と創造』 (共著、丸善、2000)『日本・地域・デザイン史 I』 (共編著、美学出版、2013)、『同II』 (同、2016)『栄久庵憲司とデザインの世界』 (編著、美学出版、2016)『地域産業デザインプロモーション現代史研究報告書』 (科研費研究報告書、2019)「地域デザイン方法論の試み—地域デザインシナリオの提案」 (『芸術工学会誌』 No.21 (日韓国際論文集)、1999)「静岡県におけるデザイン振興行政の変遷」 (『静岡文化芸術大学研究紀要』 第3巻、2002)、 「静岡県デザインセンターの活動展開」 (同第2巻、2001)「わが国の地域活性化と第3セクターの可能性」 (建国大学経済経営研究所・日本第3セクター研究会日韓共同学術セミナー論文集、2007)『地域デザインの課題と可能性』 (『芸術工学会誌』 No.68、2015)「浜松の民芸運動の現代的評価に向けて」 (『静岡文化芸術大学研究紀要』 第13巻、2012) 「同 (2)」 (同第15巻、2014)デザイン振興政策アーカイブ https://design-archives.jp など
メッセージ	創造産業とデザイン都市 私は、デザインとは問題解決の知恵であると考えています。問題を発見し、解決への手だてを講じていくプロセス。解決への方向性、即ち目標像を提示して、新たな価値の導入を図り (構想力)、そこに様々な技術や経済等のリソースを集約・仲介し (調整力)、姿形ある実体へと着地させていく (造形力)、そのような一連のプロセスが、デザインなのです。ここで、実体化に導くというのはたらしきは、なにも目に見える製品や空間だけでなく、目に見えない社会や地域の仕組みやシステムも対象です。新たな価値の実体化を進めていく、造形力だけでなく、構想力と調整力を併せ持った実践の営みであるわけです。そしてデザインの調整力、コーディネーション力ないしプロデュース力と言い換えてもよいでしょう。デザインは社会の様々な専門性や担い手をつなぐパートナーシップの要になるものとして、新たな産業展開や地域活性化のカタリスト (触媒) となる潜在力を秘めています。創造性に拠って立つこれからの日本の産業の一つの核となる営為と言えるでしょう。



SAI Kunio

佐井 国夫

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科（プロダクト領域）
大学院 デザイン研究科

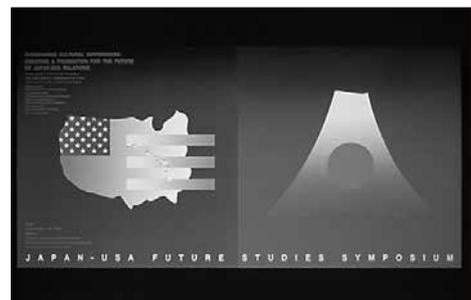
E-mail sai@suac.ac.jp

キーワード ビジュアルコミュニケーション グラフィックデザイン
パッケージデザイン VI,BIデザイン

- 学歴** 武蔵野美術大学大学院造形研究科デザイン専攻修士課程卒業（1990）
- 学位** 修士（芸術学）（武蔵野美術大学、1990）
- 経歴** 株式会社GKグラフィックス（1990）
武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科非常勤講師（1999～）
静岡文化芸術大学助教授（2000）、教授（2006～）
- 研究分野** ビジュアルデザイン諸領域
- 研究テーマ** 視覚言語としてのビジュアルコミュニケーションデザインの新たな表現形態とその展開
- 研究業績**
- ・『パッケージデザイン』（共著、文部科学省認可通信教育／武蔵野美術大学、2003）
 - ・静岡文化芸術大学VIデザイン（共同、1999）
 - ・カットメロン容器の造形開発とパッケージデザインなど（受託、2001）
 - ・日米未来学会研究シンポジウムポスターなどデザイン（1992）
 - ・フジテレビ「FIS ワールドカップスキー」独占放送マークデザイン（1992）
 - ・カルピス カフェラ モード缶コーヒーシリーズデザイン（1996） など
- メッセージ**
- 今日、私たちの社会生活の様々な領域で、グラフィックデザインによって視覚化された情報は数多く見られます。人々はその視覚的なイメージに出会い、それによって利用し、楽しんでいきます。
- グラフィックデザインは、ビジュアルコミュニケーションデザインを言い、相手に何かを「伝えたい」ということは、人間の基本的な欲求であり、社会生活を営む上で「伝達」は必要不可欠なものであります。社会から、生活から問題を発見し、それらを視覚的な伝達方法で解決することを目指したいです。これからも物づくりの楽しさを実感し、より分かりやすい、より美しい、より効果的なデザインで社会のお役に立ちたいと考えます。



カルピス カフェラ モード缶デザイン



日米未来学会研究シンポジウムデザイン



SAKO Hideki

迫 秀樹

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (デザインフィロソフィー領域)
大学院 デザイン研究科

キーワード 人間工学 生理人類学 使いやすさ 人間中心デザイン

学歴	九州芸術工科大学大学院芸術工学研究科博士後期課程単位取得満期退学 (1996)
学位	修士 (芸術工学) (九州芸術工科大学、1993)
経歴	倉敷市立短期大学助手 (1994) 静岡文化芸術大学講師 (2000)、助教授 (2005)、准教授 (2007)、教授 (2012～)
研究分野	人間工学、生理人類学
研究テーマ	人間工学的観点からのプロダクトデザイン、ユーザの個人差を取り入れたフィッティングデザインの追究
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・「人間工学的手法を用いた点眼容器の評価」 (『日本包装学会誌』 Vol.25、2016)・「電動工具に関する人間工学的研究—グリップの違いについての評価—」 (『静岡文化芸術大学研究紀要』 Vol.11、2011)・「ユニバーサルデザイン洗面台の試作および検証」 (『芸術工学会誌』 Vol.54、2010)・「座位における三次元動作分析と座圧分布における性差に関する研究」 (『静岡文化芸術大学研究紀要』 第8巻、2007)・"Prospect of Manufacturing and Design Based on Physiological Polymorphism" (J. Physiol. Anthropol., Vol.26、2007)・"The Effects of the load mass and load position on body sway in supporting a load on the back" (J. Human Ergol., Vol.33、2004) など

メッセージ

人間の本質を見据えたデザインへ

消費者へ向けて「使いやすい道具」、「良い環境」などとアピールしたい場合、何がどのように良いのかを具体的に説明しなければなりません。様々なメディアが発達してきた昨今では、ますますその説明責任が強まっているようです。私は、そのような人間と道具や環境などの関係を科学的に説明しようとする人間工学という学問分野を専門としています。例えば、持ちやすさを評価するためには筋肉の負担や動作を計測し、主観的な側面からも評価します。人間は複雑ですから、それらの評価は可能な限り多面的に行い、総合的に判断することが肝要です。

また、人間は均質ではなく多様です。年齢、性別によっても反応は異なりますし、環境や使用状況の違いによっても反応は異なります。できるだけ多くの人に向けたデザインを考える際においても、最初から集団として多くの使用者を見てしまうよりも、個々への反応から適合を見いだした方が良い場合もあります。私は、そのような考えに基づいた「フィッティングデザイン」という授業を担当しています。授業では、人間工学の測定法を活かした個々を見つめる方法論について講義・演習しつつ、具体的な製品への応用も視野に入れた課題に取り組んでいます。

これまでは、そのような観点のもと着座中の姿勢における個人差、工具の持ちやすさなどに関する研究を行ってきました。今後はそれらの研究を継続しつつ、人間の本質に基づいた新たな製品作りへの一助となるデータを提供したいと考えています。



SATO Kiyonori

佐藤 聖徳

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科（プロダクト領域）
大学院 デザイン研究科

キーワード 道具デザイン プロダクトデザイン 生活アート ウッドクラフト
造形

学歴	東京藝術大学美術学部大学院機器デザイン専攻修了（1989）
学位	修士（美術）（東京藝術大学、1989）
経歴	ソニー株式会社（1989） 東京藝術大学非常勤講師 女子美術大学非常勤講師 文化女子大学非常勤講師 東京理科大学非常勤講師 静岡文化芸術大学講師（2000）、助教授（2004）、准教授（2007）、教授（2010～）
研究分野	プロダクトデザイン、道具のデザイン、生活と芸術
研究テーマ	「くらしのデザイン」を考える時に、「芸術・アート表現」からの影響力が、いかに必要不可欠であるかを基礎研究として探ること。広い領域のデザインを考察し、それに向けて、この二つの関係性を充足するデザインを推進・制作する。
研究業績	・『くらしとデザインの本』（共著、日本デザイン機構、2009） ・「美術デザイン系大学におけるデッサン指導の発展的試み」（『静岡文化芸術大学研究紀要』第4巻、2003） ・「冬の蛸」企画および作品展示（2005） ・第38回回学教育研究会「造形デザイン教育および評価」講演（2006） ・浜名湖アートクラフトフェア展示販売（2008） など
メッセージ	人間の生活で、デザインと芸術は切り離せない重要な事柄です。身の回りのあらゆるものすべてにデザインと芸術との関係があります。しかし劇的な情報社会の中で、「人の手で造る」という本来の思いを読み取ることが大変難しい状態になっているのが現状です。日々細分化していく表現文化の中にあるところで、デザインや芸術などの表現活動とのバランスをいかに上手にとり合っていけるかが、また新しい道筋を探していくことが今後の目標となるでしょう。デザインを、単純に表面の形だけに終始するような安易な理解で終わらぬよう、しっかりと事実を見据えていかなければならないでしょう。芸術とデザインのバランスを思考し実験することが大切だと考えます。就職活動に関わる、企業や地域産業にも必要とする芸術性があります。人としての深さや発想力を、芸術・アート活動をきっかけにして伸ばすことが大変重要になります。芸術と産業のつながりを推進することが、必ず良いデザインを引き出すと確信します。これからデザインを学ぶ人たちは、人が本来持つ心地よいと感じる感覚や、芸術作品から感じる美しさを知り、デザインに存分に活かしてってください。今までに無い、創造を超えた情報社会が目の前にあると考えます。恐ろしささえ感じるこの時代ですが、わくわくするデザインをたくさん生み出してください。



Jérôme BOULBÈS

ジェローム・ブルベス

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (ビジュアル・サウンド領域)

キーワード 3DCG メディアアート 映像 アートアニメーション
ゲーム VR AR

学歴 École Nationale Supérieure des Arts Décoratifs (ENSAD) (パリ, フランス)

学位 修士 (アニメーション) (École Nationale Supérieure des Arts Décoratifs, 2014)

経歴
ゲーム会社Haiku Studio (1994~1996)
PRフィルム会社Digital studio (1997~1998)
Rubika (元SupInfoCom)大学非常勤講師 (2004)
ENSAD大学非常勤講師 (2000~2008)
映像制作会社Lardux films、監督・脚本家 (1998~2013, 2017)
フリーランス監督・3DCGデザイナー (1999~現在)
京都ヴィラ九条山アーティストレジデンス (2007)
京都精華大学非常勤講師 (2009~2020)
大阪電気通信大学非常勤講師 (2010~2014)
九州産業大学准教授 (2014~2020)
静岡文化芸術大学准教授 (2020~)

研究分野 映像表現、メディアアート

研究テーマ 3DCG、最先端テクノロジーにおける、映像メディア表現

研究業績

- ・ Ghost World Series, I / II / III / IV (3DCG実験映像、2014~) Animfest, Athens (ギリシャ)、Sapporo International Short Film Festival (日本)、Ars Electronica 2015 (オーストリア) 他
- ・ Le Pont des Broignes 「プロアニューの橋」 (短編アニメーション、2018) Chicago International Children Film Festival 2019 (アメリカ)、China International New Media Short Film Festival 2018, Shenzhen (中国)、Varsaw International Film Festival 2018 (ポーランド) 他
- ・ Le Printemps 「春」 (3DCG短編映像、2012) 飛騨国際メルヘンアニメ映像祭 (日本、2010)、Jecheon Int. Music & Film Festival (韓国)、Fantasporto, Porto (ポルトガル)、Anima Film Festival (2013, ベルギー) 他
- ・ Masques 「仮面」 (3DCG短編映像、2009) 飛騨国際メルヘンアニメ映像祭 (日本、2007)、Siggraph Asia 2009 (横浜、日本) 他
- ・ Le Puits 「井戸」 (3DCG短編アニメーション、1999) Annecy International Animation Festival (フランス)、Clermont-Ferrand International Short Film Festival (フランス)、Cannes Film Festival (フランス)、French Academy Awards ("Césars"), Imagina Computer graphics Festival (モナコ) 他

メッセージ クリエイティブな仕事というのは、考え方によって、大変刺激的です。アーティストのプロジェクトに参加したり、自身が監督したり、またフリーのデザイナーにしても、とても有意義なキャリアでしょう。

しかし、前述のような仕事の実現には、代価も存在し、不確実性、不安などの犠牲が伴います。

もちろん経済的な不安定さも含まれるのですが、何より自身の能力や才能に関する不安が襲ってくるものです。その上 現代社会では、圧倒的スピードで技術革新や変革もあります。そのような中、もの創りの核となる純粋な喜びと社会生活の複雑さの間で、自身の道をどのように描き進んでいくか? おもいは広がります。

この業界では、無限の好奇心と勉強量は必須ですが、何よりもまず、自身の進む道をおもい描き、そのために必要な物事の進め方、取り組み方を模索し、社会の動向に敏感でいながらも決して流されず、指針を持ち、自身にあった芸術デザイン方向を探っていく必要があります。

仕事に取り組む上では、失敗を素直に反省し、上手くいった事には素直に喜ぶ。このようなことは、どの業界においても忘れないはならないことのように感じています。

*企業の方達とも、3DCG (映像、ビジュアライゼーション、アニメーション、ゲーム等) の制作方法及び、最先端の方向性等について共に研究を進めていけたらと希望しています。



TAKAYAMA Yasuko

高山 靖子

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科（プロダクト領域）
大学院 デザイン研究科

キーワード デザインマネジメント グローバルデザイン教育 ローカリティ
ユニバーサルデザイン

学歴	愛知県立芸術大学美術学部デザイン科インダストリアルデザイン専攻卒業 神戸芸術工科大学大学院 博士（芸術工学）取得
学位	博士（芸術工学）（神戸芸術工科大学、2014）
経歴	株式会社東芝デザインセンター 愛知県立芸術大学非常勤講師 静岡文化芸術大学講師（2007）、准教授（2010）、教授（2015～）
研究分野	デザインマネジメント、プロダクトデザイン領域
研究テーマ	地域とデザイン、デザインマネジメント、障害者福祉事業所支援、グローバルデザイン教育
研究業績	著書 ・『DESIGN ENGLISH—クリエイターのための闘う英語—』（共著、2016、南雲堂） 論文・解説 ・“Developing an International Design Workshop Methodology – Based on a design workshop between a Japanese and a Turkish University –”（共著、2018、International Journal of Affective Engineering Vol. 17 No. 2） ・“Rasing Izmir Profile Through Design”（単著、2017、Meltem: Izmir Akdeniz Akademisi Dergisi Journal of the Izmir Mediterranean Academy） ・“Inclusive Design Management for VACs”（共著、IASDR、2015） ・“Design Management for VACs”（共著、Include Asia、2013） ・“Examining Effectiveness of Universal Design Education in Japan at Primary and Secondary School Level”（共著、IAUD 2012 優秀論文賞） ・“How can vocational aid centers (VACs) effectively function in their activities? Comparison of design management strategies among successful cases”（共著、2013、Kansei Engineering International Journal Vol.12 No.2） ・『デザインセンターの担うデザイン振興のあり方について』（単著、2011、DESIGN LINK OSAKA vol.54） デザイン開発した製品等 ・国内・欧州・アジア向けテレビ多数 ・オープンレンジ ・ドリップ式コーヒーメーカー ・TOLLBOY型スピーカー など
メッセージ	デザインの視点で発見、創造を かつてデザインは意匠と言われ、一般的には、使いやすく美しいものの形をつくる ことがデザイナーの仕事と解釈されていたこともありましたが、昨今の情報技 術の発達によって人々の生活環境は劇的に変化し、デザイナーの仕事もモノと人の直 接の関係だけではなく、モノと人、人と人、社会と人を結びつける情報や環境にまで その領域が広がっています。 様々なモノが溢れ、人との関係が複雑化した現在、人と共有できる感覚を持ち複雑 な情報を総合的に分析してマーケットを捉えるデザインの力が注目されています。そ もそもデザイナーは、日々の観察の中で捉えた点と点を結びつけて新しいものを作り 出す仕事を得意としています。私達の周りには、まだまだ組み合わせられていない点 がたくさんあり、その点が最先端技術ではなく世界唯一でなくとも、人々の心を魅了す ものになりえます。 この静岡文化芸術大学で、広く世界から情報を集めると同時に、身の周りの魅力あ る物事やそれを受け継いできた文化、背景にある産業やその技術などにも目を向け、 我々のデザインの力をもって静岡の産業を世界に発信する日を実現させましょう。



NAGASHIMA Yoichi

長嶋 洋一

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (インタラクシオン領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail nagasm@suac.ac.jp

URL <http://nagasm.org>

キーワード メディアアート 音楽情報科学 スケッチング 生体情報処理 ウェルビーイング

学歴	京都大学理学部物理学卒業 (1981) 京都市立芸術大学美術研究科後期博士課程メディアアート領域修了 (2019)
学位	博士 (美術) (京都市立芸術大学、2019)
経歴	(株)河合楽器製作所 (1981) ASL長嶋技術士事務所 所長 (1991～) 静岡文化芸術大学助教授 (2000)、教授 (2007～)
研究分野	メディア・アート、音楽情報科学
研究テーマ	メディアアートにおけるインタラクシオン／インターフェースデザイン マルチメディア心理学・マルチメディア仮想現実感／強調現実感 物理コンピューティング／スケッチング Computer Music (ライブパフォーマンス) メディアデザイン教育とデザイン支援環境
研究業績	https://researchmap.jp/nagasm/ 研究室ページは以下です。 http://nagasm.org/1106/ 個人サイトは以下です。 http://nagasm.org/ASL/ 支援した学生のインスタレーション作品、プロデュースしたイベントなどの記録です。 http://nagasm.org/1106/installation/
メッセージ	高校生／御家族の皆さんへ 21世紀の世界をリードするのは、マルチメディアを自在に駆使したデザインを、柔軟な発想と大胆な挑戦で実現していけるデザイナーです。そんな意欲のある学生であれば、びしびし鍛えてビッグにしていきますので、どうぞデザイン学科を目指して下さい。私は特に、自然界と人間とのインタラクティブ (対話／やりとり) 性を実現するデザイン領域で、学生の可能性を拓いていきたいと考えています。 また、音楽 (サウンドデザイン／コンピュータ音楽) に興味ある学生の可能性を伸ばすことにも力を入れています。 他大学学生の皆さんへ これまでに何人もの他大学卒業生が、私のところに弟子入りを希望して大学院を受験してきています。現在の環境よりスリリングな可能性を開拓したいと思ったら、よくWeb情報等を調べて、SUAC大学院において下さい。世界に通用するメディアアーティストをコンペに向けて育成する、というのが大学院での私の姿勢です。 企業の皆さんへ 技術士としての活動を基礎に、インタラクシオン／インターフェースデザイン、物理コンピューティング (スケッチング)、ネットワーク／マルチメディア活用、などの領域での共同研究・受託研究については、いつでもお受けできます。 技術士法により秘密保持は保証されていますので、まずは御相談下さい。



NAGAYAMA Hiroki

永山 広樹

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (プロダクト領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail h-naga@suac.ac.jp

キーワード プロダクトデザイン クラフトデザイン 伝統工芸 地域デザイン
サインデザイン

学歴	東北工業大学工学部工業意匠学科卒業 (1982) 武蔵野美術大学大学院造形研究科デザイン専攻基礎デザイン学コース修了 (2002)
学位	修士 (造形) (武蔵野美術大学、2002)
経歴	日産車体株式会社第1設計部造形課 (1987) 宮城県工業技術センター (1987~1997) 宮城県商工労働部地域産業振興課 (1997~1999) 宮城県産業技術総合センター副主任研究員 (1999~2000) 仙台高等専門学校情報デザイン学科兼建築デザイン学科准教授 (2000~2012) 武蔵野美術大学基礎デザイン学科非常勤講師 (2002~2006) 東北工業大学工業意匠学科非常勤講師 (2002~2008) 財団法人名取市文化振興財団理事 (2004~2006) 八戸工業大学非常勤講師 (2008) 東北工業大学ライフデザイン学部クリエイティブデザイン学科非常勤講師 (2011~2013) 静岡文化芸術大学准教授 (2012)、教授 (2016~)
研究分野	プロダクトデザイン、クラフトデザイン、地域デザイン、サインデザイン (避難誘導等)
研究テーマ	地域・企業におけるデザイン支援・開発研究 地方都市サイン計画 (緊急避難時へ向けた) 研究 伝統産業技法応用デザイン開発支援研究
研究業績	・名取市公共サインシステム 計画調査・基本計画・実施設計・設置 (名取市、2007~2011) ・トレイマン (trayman) 開発プロジェクト (明治合成株式会社、1995~2002) ・Woodment (ウッドメント) 人工埋木を使った環境エレメントの開発とデザイン・プロモーション (Design News1992) ・ゼオライト呼吸性壁面材の意匠開発 (新東北化学工業株式会社、1988~1992) ・日産プレーリーデザイン開発 (日産車体株式会社、1982~1987)
メッセージ	ヒトとモノとコトのデザイン デザインは、私たちが日常生活の中において考えたり、感じている、「こうしたい」「ああしたい」「ここが不便」「使いにくい」「よく解らない」などの不満・不足・願望の解決方法を導く行為です。その解決方法は、私たちの前にタンジブル・インタangibleな形で実に様々な有り様を示します。そして、それらは美しさ、機能性および関係性などを備えていなければ、潤いがある心豊かな生活を生み出してはくれません。 「モノ」をデザインする際には、私たちが必ずその中心にいなければなりません。私たちすべての「ヒト」が心地よく快適に、自分の思いを様々なモノとして形態と有用性を充足させることが求められます。そして、この「モノ」は単純に「使う・便利になる」ことから広がりを見せ、現在ではモノをインターフェースとして様々な関係性が急速に拡大しています。 スマートフォンやPCをデバイスとして、様々な人や地域に繋がる「コト」も関係性の一つの現れです。このコトは、瞬時に世界中から情報の受発信が可能であるという新しい展開も示しています。また、私たち本来の活動として、モノを介在しない「ヒトとヒト」とが関係する有り様を示す「コト」も依然大切なことです。 ヒトとモノとコトのデザインは、私たちが主体となり使いやすさや解りやすさなどを求めて「モノ」を整える行為。私たちが整えられたモノの活用を図ることで様々な人達とのコミュニケーションや活動が広がるなどの「コト」を発生させる行為。モノとコトを導き出す行為・活動・関係性のデザインを導くことです。 皆さんと一緒に私たちの「個々の暮らし、地域の暮らし」を整える新たな視点の模索を行い、この「ヒトとモノとコトのデザイン」を次代へ向けての創造活動実践を行います。



HADA Takashi

羽田 隆志

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (プロダクト領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail hada@suac.ac.jp

URL <http://www.plantr.com>

キーワード 乗りもの ステアリングシステム 3輪自動車 モーターサイクル 魅力

- 学歴** 千葉大学工学部工業意匠学科卒業 (1983)
- 学位** 学士 (工学) (千葉大学、1983)
- 経歴** 日産自動車 (株) (1983)
千葉大学工学部工業意匠学科 (1987)
静岡文化芸術大学講師 (2004)、助教授 (2006)、准教授 (2007)、教授 (2011~)
- 研究分野** 新しい乗りものの研究開発、魅力工学
- 研究テーマ** 高効率の自転車、新しいステアリングシステム、超小型電気自動車、魅力を創り出す手法 など
- 研究業績**
- ・走行性能を犠牲にしない折り畳み自転車 (1991)
 - ・V.S.システムを用いたオートバイフレーム (V.S.Monkey) (1997量産)
 - ・スクーター用エンジンを動力とした3輪自動車 (2000)
 - ・タイヤなど部品交換のできる子供用足漕ぎ4輪自転車 (2003量産)
 - ・ミニマムな電気自動車 (2003)
 - ・人間の力を高効率で活用する高速自転車 (2004)
 - ・パーソナルCAD「Vector Works」プラグイン「HADAツール」 (2002)
 - ・超軽量3輪電気自動車「T3」 (2006)
 - ・電気自動車ビジネスモデル提案 (2008)
 - ・超小型電気自動車用汎用プラットフォーム (2011)
 - ・ガーデンパーク用超小型電気自動車 (2012)
 - ・Bonneville Motorcycle Speed Trials (50cc過給器付クラス及び125cc過給器付クラス) 出走車両の設計 (6つのカテゴリーで世界記録を樹立) (2019)
- メッセージ** **新しい乗物をつくるために生まれてきました。**

従来のものとは系列の異なる、オリジナリティの高い乗りものの開発をライフワークとしています。特にオートバイや3輪車両では、独自の構造を採用した全く新しい乗りものを研究開発しています。乗りものとは、運動能力の延長、動く楽しさを知るための媒体です。乗りものを運転することとは、他の方法では体験することのできない喜びを得る手段です。

また魅力とは何か、そして魅力を実現する方法を研究しています。





HATTORI Moriyoshi

服部 守悦

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科（プロダクト領域）
大学院 デザイン研究科

E-mail m-hatt@suac.ac.jp

キーワード トランスポーターション コンセプト スケッチ クレイモデル
ライフスタイル

学歴	武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科卒業（1983）
学位	学士（美術）（武蔵野美術大学、1983）
経歴	スズキ株式会社（～2014） 静岡文化芸術大学准教授（2014）、教授（2017～）
研究分野	トランスポーターションデザイン
研究テーマ	次世代モビリティのデザインについて、災害時の自転車活用について
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・「ロングライフデザイン カタチからカチへ」（自動車技術会会誌、2010）・量産デザイン開発：「カプチーノ」「アルト」「エブリィ」「ハスラー」等・先行デザイン開発：東京モーターショーコンセプトカー開発等・感性工学会「スズキハスラー開発における感性デザインのマネジメント」講演（2014）・「DESIGN ENGLISH—クリエイターのための闘う英語」（共著、南雲堂、2016）・「自動車用加飾技術の最新動向」（共著、シーエムシー出版、2017）・「DESIGN TURKEY」審査員（2017）・「ヒトの感性に訴える製品開発とその評価」（共著、技術情報協会、2018）・「自動車内装・インテリア」（共著、技術情報協会、2019） など

メッセージ

私は当地で30年にわたる自動車デザインの仕事を経験した後、本学の研究者になりました。在職中は、エクステリア、インテリア、カラーと全てのデザイン分野に携わり、チーフデザイナーとして軽自動車をメインに多くの機種を開発してきました。

その過程において得た知見や、成功と失敗のリアルな体験を基に、コンセプト設定からアイデア展開、スケッチやクレイモデル製作、プレゼンテーションまでを実践的に指導したいと思います。またデザインを取り巻く各部門、企画、営業、設計、生産との関わりについても、具体的事例を示しながら解説します。

デザインは景色、環境を作るものです。美しい文房具は机の上の景色を変え、美しい家具は部屋の景色を変える。同様に美しい移動機器には街の景色を変える力があります。工業デザインである以上、感性だけではなく論理的にデザインしなければ、美しいモノ、長続きするモノは生まれません。トレンドを追うことも大切ですが、ベースに普遍性やプロポーションの良さがあってこそ、永く愛される商品となることができます。

自動運転や電気自動車といった技術革新により、車両のコンセプトやデザインはもちろん、価値観や存在意義さえ変わろうとしています。新たな時代に向け、ライフスタイルまで含めた提案を皆さんと一緒に考えて行きたいと思っています。





HANAZAWA Shintaro

花澤 信太郎

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (建築・環境領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail s-hana@suac.ac.jp

キーワード 建築デザイン 都市デザイン 空間デザイン 風景とランドスケープ

学歴	東京藝術大学美術学部建築科卒業 (1987) 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了 (2005)
学位	博士 (工学) (東京大学、2005)
経歴	SHIN建築設計事務所 (1992~2006) 畷坂アーキテツ／共同主宰 (1998~2006) 静岡文化芸術大学講師 (2006)、准教授 (2009)、教授 (2014~)
研究分野	都市の空間構成
研究テーマ	日本近世の都市空間
研究業績	<ul style="list-style-type: none">『60プロジェクトによむ日本の都市づくり』 (共著、東京、朝倉書店、2011)「東海道上における直進する街路からのランドスケープ」 (単著、日本建築学会計画系論文集、2015)「近世東海道の四大橋からの景観に関する考察」 (単著、日本建築学会学術講演梗概集、2014)“Shin, Gyo, So: The Traditional Concepts of Spatial Design in Japan” (HANAZAWA Shintaro, NISHIMURA Yukio, KITAZAWA Takeru, NAKAJIMA Naoto, Papers for the 11th IPHS Conference (CD-ROM), The International Planning History Society, 2004)
メッセージ	<p>2020年に始まった新型コロナウイルスの流行により、大学における授業も通常とは違う形での運用となりましたが、その過程でこれまでは気付かなかったいくつかの発見がありました。</p> <p>まず2020年度の前期は、遠隔で講義を行うために、作成したスライドと音声の授業ファイルをアップロードして、学生にはそのデータを視聴してもらい、いわゆるオンデマンド方式での運用を行いました。もちろん、通常の講義よりもコミュニケーションについての制約はあったのですが、こちらからのメッセージの大切な部分は受講した皆さんに伝わったのではないかと思います。また2020年度後期の建築設計演習は、基本は対面での指導をしながら、東京から非常勤講師の先生にもリアルタイムでの指導に参加してもらい、いわばハイブリッド方式での指導となりました。ここでは、浜松での対面指導はマスクを着けてアクリル板越しに、東京からのコメントはマスクなしでスクリーンに写して行ったのですが、この条件では対面での指導内容よりもむしろ画面越しのメッセージの方がよく伝わったような気がします。これら2020年度の経験からは、情報通信技術の発達によって私達のまわりに様々な可能性が生まれているという事実を実感しました。</p> <p>そして2021年度の前期の前期、この文章を書いている4月の時点では、講義は対面授業を基本として行っています。その際には、感染防止の観点から教員も受講者もマスクを着用して、教卓の前には大きなアクリル板があるのですが、この状況だとこちらの表情を相手に伝えるのが難しく、相手の表情もあまり読み取る事ができません。「目は口ほどに物を言う」という言葉がありますが、ここでは「目は常ほどに物言わず」という感じです。この事からわかるのはマスク着用が普通となる生活では、対面であってもこれまでよりも更にメッセージを伝える工夫が必要になるのではないかと思います。</p> <p>これら、日々の工夫と感染予防を大前提としながら、建築や環境という分野においては、今回の状況を念頭において、次の世代に伝えるべき空間のあり方を検討して構想する事も大事なテーマだと思います。解決への道りは簡単なものではないのかもしれませんが、けれども歴史を学び、現在の状況を把握した上で地道な工夫を重ねる事によって、未来へのヒントが見えてくる可能性があるのではないのでしょうか。</p>



HIBIYA Norihiko

日比谷 憲彦

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (ビジュアル・サウンド領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail n-hibi@suac.ac.jp

学歴	千葉大学工学部工業意匠学科卒業 (1985)
学位	学士 (工学) (千葉大学、1985)
経歴	(株) GKグラフィックス・デザイナー (1986~1993) (株) GK設計・デザイナー (1994~2004) 個人オフィス「DESIGN CRAQUE」設立 (2005~) 静岡文化芸術大学非常勤講師 (2005~2013) 女子美術大学短期大学部非常勤講師 (2011~2013) 静岡文化芸術大学准教授 (2014)、教授 (2017~)
研究分野	グラフィックデザイン、ブランディングデザイン、サインデザイン
研究テーマ	文字やシンボル、色彩などのグラフィックエレメントを平面 (印刷媒体等)・立体 (パッケージや製品本体)・空間 (インテリアや都市空間) に広く展開し、企業やブランド、施設のトータルなイメージ形成を図る手法を研究しています。
研究業績	・日本たばこ新ブランド「WITH CLASS」のデザイン開発 (1987) ・駅等交通結節点におけるユニバーサルデザイン対応の案内・誘導システム検討調査 (1999) ・多摩モノレールトータルデザイン計画 (2000) ・観光地における案内標識の現況と今後の整備の方向についての調査 (2001) ・別研究「文化芸術による地域資源発信事業の研究 その2」 (2014) ・受託研究事業「袋井市グローバルコミュニケーションデザイン制作」 (2018)
メッセージ	<p>グラフィックは平面に留まらない・・・そう実感するのは、25年余りに及ぶちょっと異色な私のキャリアが影響しています。勤務したデザイン会社では、8年間在籍したグラフィック部門で会社案内・パンフレットなどの企業の広報ツールデザインやマーケット考察を絡めたパッケージデザイン戦略の最前線を経験しました。また、その後10年間在籍した設計部門では、マークや色彩等の視覚要素を空間に展開して施設のトータルイメージを構築したり、サイングラフィックによって人の意識や行動を誘導する仕事を手掛けてきました。いわばビジュアルコミュニケーションという切り口で、平面、立体、空間に展開する対象に横断的に関わってきたと言えます。この個人的な経験知を大学という教育・研究の場で、学生の進路や地域貢献への道標として役立てたいというのが私の基本的なスタンスです。</p> <p>「地方創生」という言葉を耳にするようになって久しくなりますが、デザインという視点から地域の魅力を発信する「コト起こし」に繋げていければと考えています。具体的には地域産品や観光地のブランディングを行い、広報ツールやパッケージ等のデザインを通して、イメージの効果的なりニューアルに寄与できると考えております。</p>



FUJII Naoko

藤井 尚子

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (匠領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail n-fujii@suac.ac.jp

キーワード テキスタイルデザイン (サーフェイス、テクスチャー)
アートワーク (ロウ防染)

学歴 東京藝術大学大学院美術研究科 (芸術学専攻美術教育研究領域)

学位 博士 (美術) (東京藝術大学、2005)

経歴 多摩美術大学美術学部生産デザイン学科助手 (1995~2002)
東北芸術工科大学美術学部非常勤講師 (2001~2008)
財団法人新国立劇場バレエ研修所非常勤講師 (2004~2008)
東京造形大学造形学部非常勤講師 (2005~2008)
鎌倉女子大学短期大学部非常勤講師 (2006~2008)
東京藝術大学大学院美術研究科非常勤助手 (2007~2008)
名古屋市立大学大学院芸術工学研究科准教授 (2008~2019)
東京藝術大学美術学部非常勤講師 (2013~)
静岡文化芸術大学准教授 (2019)、教授 (2020~)

研究分野 テキスタイルデザイン領域、日常の中の染織文化、アノニマスデザイン

研究テーマ テキスタイルデザインおよびアートワークによる療養環境の向上
伝統技術のデザインイノベーション
テキスタイルをめぐるアノニマスデザインの応用

研究業績

- ・『赤の力学 -色をめぐる人間と自然と社会の構造-』 (単著、風間書房、2015)
- ・『日本・地域・デザイン史II』 (共著、美学出版、2016、「ものづくりと名古屋の伝統デザイン：人々の往来を生む『有松・鳴海絞』」、pp.120~121)
- ・「『病院のアート』をめぐる主体と意義についての予備的考察—パブリックアートの概念と『公共性』を手掛かりに—」 (『美術教育研究』No.24/2018、東京藝術大学美術教育研究会、2019、pp.1~14)
- ・「『紅 (アカ) : 二つの色名『クレナイ』と『ベニ』にみる色と人間の関わり』」 (『FFIジャーナル』Vol.209 No.04/2014、三栄源エフ・エフ・アイ株式会社、2014、pp.378~386)
- ・「着脱動作の負担軽減に資する病衣の研究—袖ぐり (アームホール) 形状と伸縮素材の相関性の実証—」 (『生活環境向上のための研究報告書』vol.14/2011、公益財団法人日比科学技術振興財団、2012、pp.121~132)

メッセージ 私たちをとりまき、相互作用を及ぼしあう事物との関わり方は、人間の生きる知恵そのものといえるでしょう。布一枚にも、こうした生きる知恵を見いだすことができます。テキスタイルデザインは、衣食住といった、ヒトの生理的欲求にもとづく根源的な知恵から、「誰でもない私」を認識・創出する手掛かりといった、人間が社会的に存立する多様で派生的な知恵まで、広く、深く関わっています。そのため、デザインだけでなく、社会学や文化人類学、今日では、バイオミメティクスを応用した材料開発など関連分野も広範に亘り、他領域との学際的なアプローチもなされています。このように、広く、深いテキスタイルの分野ではありますが、それらに共通するのは「柔軟性」です。繊維素材を材料に紡いだ [糸] を素材とし、織る・編む・組むことで [布] となるテキスタイルは、柔らかでしなやかな物性を持っています。この物性は、人の身体など複雑な形体に沿い、自在に包み込むことができます。また、畳んで丸めて小さくコンパクトになる、比較的軽量の素材のためポータビリティにも優れている、染色やプリントすることで、多様なサーフェス・テクスチャーをつくりだせる…といったフレキシビリティな特性は、人間の生きる知恵や工夫において扱いやすく、新たな挑戦に適した素材なのです。今日もなお私たちは、日々、最適解を探り、更新し、時代に見合う知恵や工夫を生み出しています。古きを学び新しきを知ることもまた、デザインへの示唆を得ることができるはず。繊維から糸をつくり、糸から布をつくり、布を染め加飾する、長い時間のなかで洗練されてきた伝統技法の合理性を学びながら、新しいテキスタイルデザインに挑戦し、一緒にテキスタイルの可能性を拓いていきましょう。



YAMAMOTO Kazuki

山本 一樹

教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (匠領域)
大学院 デザイン研究科

キーワード 金属造形 鍛金 金属彫刻 伝統工芸 現代美術

学歴 東京藝術大学大学院美術研究科 博士後期課程 満期退学 (1987)

学位 修士 (芸術学) (東京藝術大学、1984)

経歴 東京藝術大学非常勤講師 (1987~2000)
大東文化大学非常勤講師 (1990~2006)
埼玉大学非常勤講師 (2000~2006)
東京造形大学非常勤講師 (2000~2005)
静岡文化芸術大学助教授 (2005)、准教授 (2007)、教授 (2009~)

研究分野 金属造形、鍛金

研究テーマ 金属彫刻、モニュメントの制作、金属の加工法、表現技法の研究

研究業績
・富岡町庁舎 モニュメント制作 (福島県双葉郡富岡町、1992)
・大阪地下鉄梅田駅 モニュメント制作 (大阪市梅田、1993)
・横浜若葉台団地 モニュメント制作 (横浜市旭区、1995)
・鹿児島県庁 モビール作品制作 (鹿児島市鴨池、1996)
・佐伯町生涯学習センター「サエスタ」 モビール作品制作 (岡山県佐伯町、1998)
・浜松ワインセラー 扉鉄装飾・サイン制作 (浜松市天竜区、2009) など

メッセージ
心象風景をテーマに作品を制作している。
それは、子供の時に見た武蔵野の風景であったり、旅先で出会った風景であったり、高速道路を運転しているときに、ふと視界の端を通り過ぎた風景であったり・・・が、原点になっているのだと思う。
その風景が綺麗だったのか？面白かったのか？不思議だったのか？その風景の何かが自分の感性を刺激し、断片的に記憶される。
感性に触れた風景の断片がすぐに作品として出現するときもあるし、10年20年と経って、熟成されたように出現するときもある。
作品を制作するということは、蓄積された感性の断片を確認している感がある。
心象風景として広がる感性の原野を少しずつ形にしていくのが、私に課せられた作業である。
出現する心象風景の断片は、その多くは俯(ふ)瞰(かん)された風景であることが多い。
俯瞰した「感性の断片」。
俯瞰された「自分の感性」。





AMANAI Daiki

天内 大樹

准教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (デザインフィロソフィー領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail d-amanai@suac.ac.jp

URL <http://www.ne.jp/asahi/d/ama/>

キーワード 戦間期の建築運動 中心市街地のリノベーション 建築空間の認識論

学歴	東京大学大学院人文社会系研究科美学芸術学専門分野修了 (2008)
学位	博士 (文学) (東京大学、2011)
経歴	日本学術振興会特別研究員 (PD、大阪大学、2008~2011) 東京大学美学芸術学研究室教務補佐員 (2011~2012) 東京理科大学工学部第二部建築学科ポスドクトラル研究員 (2012~2014) 静岡文化芸術大学講師 (2014) 准教授 (2018~)
研究分野	美学芸術学/建築思想史: 近現代日本の建築を中心に芸術・環境要素全般について、モノの形を生み出す背景となる哲学や思考を扱います。
研究テーマ	近代日本の芸術・建築・デザイン論、素材と近代化遺産保存
研究業績	<ul style="list-style-type: none">『ディスポジション: 配置としての世界』 (共著: 柳沢田実編、現代企画室、2008)『分離派建築会』 (共著: 田路貴浩編、京都大学学術出版会、2020)『帝国日本の生活空間』 (単訳: ジョルダン・サンド著、岩波書店、2015)『言葉と建築——語彙体系としてのモダニズム』 『メディアとしてのコンクリート』 (共訳: エイドリアン・フォーティ著、鹿島出版会、2006/2016)『図鑑デザイン全史』 『図鑑1900年以後の芸術』 (共訳: 東京書籍、2017/2019) 他
メッセージ	<p>芸術と美学 通常の芸術大学や美術大学では、よくデザインとファイン・アートを分けます。クライアントに応じて造形する対象と、作家が随意に探究する造形対象という違いです。18世紀後半に始まる狭義の美学・芸術学は、典型的な近代的主体として天賦の才能をもって独立した〈作家〉が、周囲の日常的事物から切り離された〈作品〉を〈創造〉するという図式を確立して、芸術と〈作品〉に特権を与えてきました。「正統の」ファイン・アートを制作し享受する過程において、クライアントなど背景情報は夾雑物または挿話となり、背景情報を切り離せないデザイン分野は「応用芸術」にすぎないとされました。</p> <p>しかし20世紀中頃からの議論をみると、作家個々による探究に最大の敬意を払うとしても、次の問いは避けられません。芸術家は自由な個人という立場からのみ造形してきたのか。作家はアートワールド固有のゲームの規則 (西洋中心の芸術史の素養、画廊や美術館や報道や収集家と作家の関係、制度や政策など) から自由になれるのか。</p> <p>芸術と建築・デザイン 建築では19世紀中頃から、新素材・新技術の導入が盛んで、都市問題への対処や産業としての需要が差し迫ったため、絵画・彫刻と同列に位置づける従来のアプローチよりも、技師や企業や施工者の実践の方が時代を拓いてきた経緯があります。そこで建築の技術的進歩に沿って芸術諸ジャンルを再編し、社会との新たな関係を模索する新たな教育体系が提案され、一般的にも古典古代から扱う西洋建築史とは異なる科目「近代建築史」が各大学に置かれました (『デザイン史』もこれに並行します)。</p> <p>しかし建築や建築家が20世紀に芸術から逸脱した、あるいは建築をアートと重ねて論じるのは現代的ではないなどの理解は、むしろ先に述べた18世紀後半からの限られた芸術理解に基づいています。技術や素材やクライアント等々「芸術外」の動きに振り回され続けてきたのが、本来的な芸術のあり方でしょう。その意味で建築もデザインも依然として十分に芸術です。</p> <p>開拓の方向性 静岡文化芸術大学は通常の意味での芸術大学ではありませんし、デザインと文化政策という2分野は「正統の」芸術からは周縁とされがちです。私はこれを、美学、建築・デザイン、芸術活動全般を巻き込んだ新たな芸術像に通ずるフロンティアと受け止め、浜松から実践活動との呼応を通じて新たな立場を切り拓こうと思います。</p>



ARAKAWA Tomoko

荒川 朋子

准教授

所属 デザイン学部デザイン学科 (匠領域)

E-mail t-araka@suac.ac.jp

キーワード テキスタイル 織 美術教育 アート 繊維造形

学歴	東京藝術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻染織分野修了 (2000)
学位	修士 (美術) (東京藝術大学、2000)
経歴	東京藝術大学美術学部助教等 (2002 ~2011) 東京家政大学造形表現学科講師 (2011~2018) 株式会社帝国ホテルエンタープライズ営業課 (2019~2021) 静岡文化芸術大学准教授 (2021~)
研究分野	繊維造形、テキスタイルデザイン、テキスタイルアート、世界の染織文化
研究テーマ	テキスタイルと地域の繋がり 縫る、織る、縫う、絞る、染める、組む、編む
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・ FIBER FUTURES : Textile Pioneers : USA、欧州 (フランス、ポルトガル、フィンランドなど8カ国) 巡回 (2011~2016)・ 染織講座50周年記念展:東京藝術大学大学美術館陳列館/東京 (2017)・ 第11回国際絞り会議国際展「融合と進化」:多摩美術大学美術館/東京 (2018)・ 第6回テキスタイルアート・ミニチュール-百花百触:東京、韓国 (2019)・ JTC テキスタイルの未来形 in 宝塚 2021:兵庫 (2021)・ 他、国内海外で多数発表
メッセージ	<p>研究制作</p> <p>「繊維」から導き出される、造形の表現性と可能性、その広がり、奥深さに強く惹かれています。</p> <p>私は様々な繊維素材と技法を用いて、作品に合わせて織機を使い、手わざを駆使し、主にオブジェ、ジュエリー、タペストリーをつくっています。縫る、織る、縫う、絞る、染める、組む、編む、巻くなど、素材と技の大切さが基礎にあります。人類が身近なものから繊維と出会い、各々の手の中で表情が生まれ、発見を積み重ねていったであろう感動に想いを馳せ、寄り添う気持ちを大切に研究制作を続けています。</p> <p>不思議の始まりから</p> <p>布になる前の繊維は、人類にとっていつからどのように関わり合いながら育まれてきたのか。</p> <p>それを初めて視覚認識し、思考したのは幼少期。縄文式土器と弥生式土器の違いについての事柄でした。デザインの視点から縄 (繊維) を押し付けてつける縄目文様がその時代の特徴的なデザインであり、見分ける一つの判断材料になることを知った時。同時に人の営みが垣間見えた感覚が鮮烈だったこともあったのかなと思います。</p> <p>時代を重ねて現代の繊維は、人種、文化、歴史を含みつつ、また超えて、住居になり衣服になりアート、環境、演出、産業、ファッションなど多様な形で地球上に存在し、各国の地域を映す鏡のように現れては受け継がれていることは大変興奥深いと感じています。そのようにテキスタイルを探っていくと、建築、金工、木工、陶芸、絵画、デザインなど各分野との関連性や共存性へも気づかされます。様々な分野へも注意深く思考を寄せ続けています。</p> <p>また、事に始まりがあるように、物事の本質を見極めていくにはその原点を知ることが大切です。それは事物の考え方、見方、捉え方、知恵、感じ方、畏敬の念、生き方などに通じる場所があり、各々の視野も広がっていきます。テキスタイルを通してそのような事柄も一緒に感じ考察することができればと思います。</p> <p>そして、テキスタイル領域の柔軟な現象、多角的に捉えていくクリエイティビティの方向性は、イノベーションにも通じるものを感じています。伝統を理解し継承しながらも未来を切り開いていく、まだ見ぬ力に期待をしています。</p>



NAKANO Tamio

中野 民雄

准教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (建築・環境領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail t-naka@suac.ac.jp

キーワード 環境デザイン ライフスタイル スマートデザイン 地域防災 環境教育

学歴	信州大学大学院工学系研究科 博士前期課程修了 (2002) 信州大学大学院工学系研究科 博士後期課程修了 (2007)
学位	博士 (工学) (信州大学、2007)
経歴	前田建設工業株式会社 (2002~2011) (関西支店、本店設計部主任、飯田橋再開発PJ主任 他) 福井工業大学講師 (2011~2013) 静岡文化芸術大学講師 (2013)、准教授 (2016~)
研究分野	建築環境・設備、スマートデザイン、省エネルギー・省資源、BCP・LCP
研究テーマ	快適な建築環境・最適な建築設備システムの研究、スマートデザイン・スマートライフ、都市・建築の水環境と次世代エネルギーの研究、BCP・LCPの研究
研究業績	著書 ・『最高にわかりやすい建築設備』 (共著、P:66~76, 83~87執筆、エクスマレッジ、2012) 論文 ・“The technological innovation and subject of the direct water supply system raised pressure by pump of collective housing in Japan” (単著、Proceedings of CIB W062 38th International Symposium、2013) 作品 ・『飯田橋西口地区第一種市街地再開発事業』 (設備設計、2011)
メッセージ	蛇口をひねれば、いつでも綺麗な水が出る 現代の日本では当たり前な事です。しかし、世界を見渡せば約11億人が水不足の状況で生活しており、年間何百万人もの人が、水が原因で死亡しています。また、都市・産業の急速な発展の中で、水だけでなく地球全体が破壊され続けています。さらに、世界のエネルギー資源は、百年後には危機的な状況を迎えると言われていています。 地球環境・エネルギー問題を解決する為に、グローバルな視点に立ち、我々は一何をすべきか？ かなり無謀な挑戦でありますし、無理難題が山積みです。しかし、最初からできないと諦めるより、できると信じて続ける事が未来に繋がると信じています。建築・デザインの立場から、一緒に環境・エネルギー問題を解決し、地球の未来を創造していきましょう。 スマートデザインとは スマートという言葉は、おそらく誰も一度は耳にしたことがあると思います。最近では、スマートフォンやスマートシティなどに代表されるように、現代の流行語にもなりつつあります。それでは、スマートとはどういう意味なのでしょう？ 直訳すれば、「賢い」ですが、建築・デザインの分野に置き換えてわかりやすく解釈するならば、「エコロジー (環境にやさしい) とエコノミー (財布にやさしい) の両立」であると、私自身は考えています。 また、建築・デザインの世界において、建築環境・設備は長い間日陰の存在でした。皆さま周知の通り東日本大震災以降、全国的に省エネ・節電が叫ばれ、近年にわかに脚光を浴びるようになりました。しばらくの間は、社会的ニーズも手伝い先進的に取り上げられる事になると思います。 しかし、本当に今一番大切なのは、「始める」事よりも「続ける・繋げる」事、そして「本物のデザイン」を世の中に普及していくことだと考えています。例えば、体にいい物でも美味しくなければ誰も食べません。 建築・デザインの世界も同じで、いくら環境に良くてもデザインが良くない建築では誰も見向きもしません、いくら省エネになるといっても、高価な建築では誰も購入しません。 エコロジーとエコノミーを両立させ、さらに本物のデザインを融合させた「スマートデザイン」を一緒に考えて実践していきませんか。夢は見えないけどカタチは誰にでも見えます。



NIITSUMA Junko

新妻 淳子

准教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (匠領域)

E-mail j-niit@suac.ac.jp

キーワード 日本伝統建築 日本建築史 建築生産 文化財 匠

学歴	学校法人富嶽学園日本建築専門学校建築科卒業 東京大学工学部建築学科研究生
学位	博士 (工学) (東京大学、2018)
経歴	学校法人富嶽学園日本建築専門学校専任教員 (1998~2008) 特定非営利活動法人静岡県伝統建築技術協会研究員 (2011~2017) 静岡文化芸術大学講師 (2017)、准教授 (2020~)
研究分野	日本伝統建築
研究テーマ	近世・近代までの建築普請活動について 日本伝統建築の保存・修理とその技術について
研究業績	<ul style="list-style-type: none">・『焼津市花沢 伝統的建造物群保存対策調査報告書』 (共著、焼津市教育委員会、2008)・『史跡富士山「村山大日堂」保存修理工事報告書』 (共著、富士宮市教育委員会、2015)・「久能山東照宮の修営と工匠」『久能山誌』 (単著、静岡市、2016)・「駿河・遠江・伊豆の寺社造営における江戸幕府の作事とその組織」『建築の歴史・様式・社会』 (単著、中央公論美術出版、2018)・『見付のお蔵一磐田市見付地区「蔵」悉皆調査報告書一』 (共著、見付宿を考える会・磐田市教育委員会、2020)・「静岡浅間神社の江戸後期『御再建場所日記』に関する研究」 (日本建築学会大会学術講演梗概集 (北陸)、2019)・「伝統建築技術ワークショップ「和釘を打つ、和釘を使う」」 (『静岡文化芸術大学研究紀要』第21巻、2020)
メッセージ	<p>日本の伝統建築は、古代、中世、近世そして近代と日本建築の基礎を確実に継承しつつ、その時々で最高のものを目指して建築されてきました。特に近代における和風建築は、日本建築の粋を集結したものといえるでしょう。名建築と呼ばれる日本伝統建築は、優れた技術・意匠・美術・工芸等から成る総合的な芸術作品です。名建築に直に触れながら、眼を養い、感性を磨くことが、単に伝統建築を継承していくということだけではなく、日本の未来に誇れる建築や芸術を創造することに繋がるでしょう。</p> <p>どのように日本人は建築の普請活動を行ってきたのか。近世の建築普請活動に関する研究と文化財建造物の調査・保存修理に携わる中で、当時の建築普請組織や工匠の技術・技能、材料・道具、さらにそれらをつくる人たち、とてつもないものづくりの人々の繋がりが見えてきました。一方、このようなものづくりに関わる要素の一つでも欠ければ、日本の伝統建築を後世に継承していくことが危うくなるということも強く感じます。静岡県には豊かな文化と資源があります。その中の一つ、日本伝統建築を支えてきた木材は、静岡県の四大河川上流域から江戸をはじめ東西各地へ送られてきました。特に地元産出木材の地元使用について研究を進めていきます。</p> <p>日本のものづくり文化と、静岡という豊かな土地の文化に目を向け、それらを総合的に研究し、継承しながら、静岡の新しい文化・芸術の創造を目指します。</p>



NIWA Tetsuya

丹羽 哲矢

准教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (建築・環境領域)
大学院 デザイン研究科

E-mail t-niwa@suac.ac.jp

URL www.clublab.net

キーワード 設計理念 デザイン手法 設計プロセス

学歴 京都大学大学院工学研究科博士前期課程建築学専攻修了 (1996)
京都大学大学院工学研究科博士後期課程生活空間学専攻 研究指導認定 (2005)

学位 修士 (工学) (京都大学、1996)

経歴 株式会社久米設計 (1996~2008)
一級建築士事務所clublab.代表 (2008~)
静岡文化芸術大学准教授 (2021~)

研究分野 建築設計、空間デザイン、地域・都市・ランドスケープ計画

研究テーマ 建築設計における設計理念の形成と評価

研究業績 作品・プロジェクト
・コンフォートホテル伊勢 (2018)
・愛知産業大学工業高等学校伊勢山校舎(2015) 第48回中部建築賞入賞
・イーオン中部本校ビル (2014)
・清須の住宅 Wall off the Space (2015) グッドデザイン賞2016
・稲沢の住宅 Stage(s) (2012) 第45回中部建築賞入選

メッセージ

現在の研究テーマ

現在「建築設計における設計理念の形成と評価」を研究テーマとしています。これは地域への貢献施設となる建築物の計画過程において、設計理念の共有が重要と考えているからです。建築デザインという行為には、理論的かつ構築的部分と、直感的で不連続な部分という、相反する要素があります。建築という実態としてまとめ上げるためには、理論的な要素と直感的な要素を統合する設計理念を掲げ、それに基づいて空間や機能やイメージが全体を作り上げる必要があります。このような設計行為を分析し、その本質を設計手法として、再構築したいと考えています。

模型を利用した設計手法

設計行為の分析から見出している手法の一つが、設計理念を理論的かつ構築的に設定しつつ、建築の形態や特徴となる造形言語そのものは、模型を中心とした検討により生み出し、理念と形態が相互に影響しあって、案が更に深まるよう作り上げていく方法です。この手法では設計プロセスにおいて、それまでの検討とは不連続でありながら、劇的な建築的解決に出会う瞬間があります。これら建築的瞬間がいかなるプロセスの経過から生まれるかを洞察し、明らかにしようとしています。

設計業務における地域への働きかけ

設計理念の合意形成には色々な立場の人々のプロジェクトへの参加が欠かせません。さまざまな意見が多面的に出されることで設計理念が満たすべき範疇は広がりますが、一見矛盾するような与条件や設定の中から思いもかけない、よい提案が生まれることもあります。また、計画の初期段階から様々な協議を重ねることで、敷地内に留まらず、地域全体の計画に波及する内容を盛り込むことも可能です。

魅力あるデザインを具現化する人材の育成

デザインは社会的存在であるため、社会や施主(発注者)の要望を理詰めで考えて解決し説明する必要がありますが、それら要望を満たせばデザインができあがるわけではありません。それら要望を超越した魅力があって初めて「デザイン」足り得る、と設計活動に取り組んでいます。理屈で説明できない直感的で情動的な魅力を内包したモノを創造していくことを、自らの設計行為で重視しているのは、社会が成熟し、人々の思考が変化する中で、求められているデザインが本来の芸術的魅力を兼ね備えた存在に戻りつつあると実感しているからであり、このような魅力ある建築をヴィジョンとして示すことができ、多くの人々の協力を引き出せるような人材を育てていきたいと考えています。



MATSUDA Tatsu

松田 達

准教授

所属 デザイン学部 デザイン学科 (建築・環境領域)

E-mail matsuda@suac.ac.jp

キーワード コンピューテーショナルデザイン 都市計画の起源
ル・コルビュジエ ヴェルナー・ヘーゲマン 関一

学歴 東京大学工学部都市工学科都市計画コース卒業 (1997)
東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了 (1999)
東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程単位取得満期退学 (2005)
パリ第12大学大学院パリ都市計画研究所DEA課程修了 (2005)

学位 修士 (工学) (東京大学、1999)
DEA (都市計画とその領域) (パリ第12大学、2005)

経歴 隈研吾建築都市設計事務所勤務 (2001~2002)
文化庁派遣芸術家在外研修員 (2002~2004) (在フランス・パリ)
吉村靖孝建築設計事務所 勤務 (2006~2007)
松田達建築設計事務所 主宰 (2007~)
京都造形芸術大学 非常勤講師 (2008~2013)
専門学校桑沢デザイン研究所 非常勤講師 (2008~2011)
ブリティッシュ・コロンビア大学 非常勤講師 (2008~2009)
宮城大学非常勤講師 (2011~2015)
東京大学 先端科学技術研究センター 特任研究員 (2011)
東京大学 先端科学技術研究センター 助教 (2011~2015)
東京藝術大学非常勤講師 (2013~2014)
武蔵野大学 工学部建築デザイン学科 専任講師 (2015~2020)
駒澤大学 法学部政治学科 非常勤講師 (2016~)
慶應義塾大学 理工学部 非常勤講師 (2020~)
静岡文化芸術大学准教授 (2020~)

研究分野 建築設計、都市建築理論、都市計画史

研究テーマ 「都市計画」の起源とその発展、パズルの原理を応用した空間設計、街ブランディング

研究業績 ・『記号の海に浮かぶ〈しま〉—見えない都市 (磯崎新建築論集2)』 (編著、岩波書店、2013)
・『ようこそ建築学科へ！—建築的・学生生活のススメ』 (共編著、学芸出版社、2014)
・"Evolution de l'espace cour à Paris et en Europe - la cour et l'urbanisme" (Insititut d'Urbanisme de Paris, Université Paris XII, 2005)
・リスボン国際建築トリエンナーレ帰国展会場構成 (東京都新宿区、2007)
・JAISTギャラリー (石川県能美市、2012) (林野紀子と協働)

メッセージ 私の研究・実践活動の大きなテーマは、「都市と建築をつなぐ」ことです。日本では両者の専門領域が分離する傾向がありますが、人口減少社会の都市において、両者の緊密な連携は、より重要な課題となってくるためです。建築設計から都市計画史まで、幅広い領域を横断した活動を行っています。研究と実務、理論と設計、都市と建築という対立的概念を連続的に捉え、それらを相互に接続することをテーマとしているためです。これまで、金沢、東京、パリと居住してきました。2020年より浜松に来たことをきっかけに、モビリティと都市・建築との関係についても新しく研究をはじめました。自分の新しい経験を踏まえ、重層的かつ先進的な研究を進めていきたいと思っています。一方で、浜松のまちなかへの小さな空間デザイン提案による「街ブランディング」や、遠州における歴史的空間の再編といったテーマにも、学生とともに取り組んでいます。

企業の皆様方とも積極的に活動したいと思っています。これまで、例えば、東芝エレベーターさんとエレベーター技術を発展させた熱海の未来型まちづくり《フラックスタウン・熱海》(2009)や、森ビルさんとの協働によるモビリティを取り込んだ超高層都市建築《東京シームレスシティ》(2013)の提案などを行った実績があります。建築設計提案、まちづくりの案、モビリティを活用した近未来都市の提案など、多様な協働が可能です。自治体の皆様方とは、例えば、空家や空きオフィスのリノベーション等の活用、中心市街地の活性化、シャッター商店街の再興、駅前整備の方針などの提言・提案などについて、広くは公共建築の調査・提案・審査や、都市計画・まちづくりについての審議・政策助言など、様々なかたちでの地域貢献が可能です。今後、浜松・静岡・遠州地域のため、広く貢献していけましたら幸いです。



IKEDA Yasunori

池田 泰教

講師

所属 デザイン学部 デザイン学科 (ビジュアル・サウンド領域)

E-mail y-ikeda@suac.ac.jp

キーワード タイムベースメディア 映像表現 フィクション/ドキュメンタリー
デジタルアーカイブ

学歴 情報科学芸術大学院大学メディア表現研究科 (Studio2/タイムベースメディア) 修了 (2004)

学位 修士 (メディア表現) (情報科学芸術大学院大学、2004)

経歴 BLUE LICHENES (ディレクター) (2004~)
富山大学非常勤講師 (2008~2013)
名古屋造形大学非常勤講師 (2008~2018)
情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) プロジェクト研究補助員 (2017~2018)
静岡文化芸術大学講師 (2019~)

研究分野 映像表現

研究テーマ 映画・映像制作、時間記述と設計、アーカイブ手法の開発

研究業績 <映画/映像作品>
・“カラエナ” (2001) *共同監督 岩田勝己
・“Mosaic” (2002) *共同監督 斎藤正和
・“BYT#01 A QUIET DAY” (2011)
・“BYT#02 Hunging in mid-air” (2012)
・“3PORTRAITS and JUNE NIGHT” (2009-2013)
・“BYT#03 About the Things May Come to Pass” (2016)

メッセージ 私はこれまでフィクションやドキュメンタリーといった映画作品の制作と、芸術の創作過程を記録・記述するためのアーカイブ手法の開発を行ってきました。

映画作品とアーカイブ手法の研究にはそれぞれに違いもありますが、時間を伴う事象をどのような方法で記述し、思考の対象とするか、といった記述方法の側面と、作品となる時間にどのような形を持たせるかという、時間の設計に関わる関心が共通しています。

映像表現は、現実を素材にし、そこに日常とは違った意味を見出し、組み替え、再提示する時間芸術です。現実を扱い、そこに作品の力を働かせる、という自覚は重いものですが、その重さの中にあっても、遠い過去や未来へと向けられた軽やかな想像力こそが作品に新しさをもたらしてくれるものと思っています。

制作を通して私たちの視覚文化やテクノロジー史を注意深く観察し、その理解や解釈から「広がり」や「新しさ」を発見するプロセスを、皆さんと一緒に体験できたらと思っています。



3PORTRAITS and JUNE NIGHT (2013)



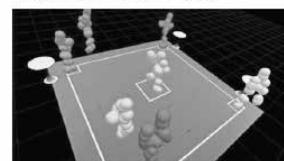
BYT#02 Hunging in mid-air (2012)



BYT#03 About the Things May Come to Pass (2016)



編集スコア (部分) TPAM2016 AAI-UK Anicoche[edit_e019]



時空間 3D スキャニングシステムによる三輪真弘《みんなが好きな給食のおまんじゅう》



ひとりの傍観者と6人の当番のために-の記録 (2017) /ArtDKT



ODA Iori

小田 伊織

講師

所属 デザイン学部 デザイン学科 (匠領域)

E-mail i-oda@suac.ac.jp

URL <http://odaiori.com>

キーワード 匠 木工 漆 クラフトデザイン 造形表現

学歴 東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻漆芸研究領域修了

学位 修士 (美術) (東京藝術大学、2012)

経歴 東京藝術大学教育研究助手 (2012~2015)
東京藝術大学非常勤講師 (2017~2019)
静岡文化芸術大学講師 (2019~)

研究分野 木工、漆

研究テーマ 木工表現技法、漆芸表現技法

研究業績

- ・ MITSUKOSHI×東京藝術大学夏の芸術祭 次代を担う若手作家作品展／日本橋三越本店本館6階美術フロア (2014、2016、2018)
- ・ あいづまちなかアート 会津・漆の芸術祭 × まちなかピナコテカ／会津若松市 (2013、2014、2017、2018)
- ・ East-West Art Award Competition 2015／La Galleria, Pall Mall, London (2015)
- ・ 東京藝大 in 銀茶会／銀座・伊東屋 G.Itoya10F HandShake Lounge(2017、2018)
- ・ Asian Lacquer Craft Exchange Program in Cambodia International lacquer Art Exhibition／Stocker Studio (Angkor Artwork), Siem Reap (2018)

メッセージ 私は木工・漆工の分野において、挽物技法を中心とした器物の制作や、指物、割り物、乾漆造形技法、そして蒔絵や螺鈿などの漆芸装飾技法を組み合わせた造形作品を制作し、研究発表を行なっています。

また、木の種類と漆についての研究や、国内外の漆の木の植栽についての調査、漆芸における素材や刃物、漆刷毛、筆、筥 (ヘラ) 等の道具についての調査研究も行なっています。

作るものを思い描き、木を選び、道具を作り、整備する。木を削り、漆を染み込ませ、下地の施し、研いで面を整え、漆を塗り重ね、装飾をする。気の遠くなるような手仕事の数々ですが、その工程の中には、デザインを考えるヒントが多く隠されています。手を動かして「つくる」ことで、素材と技術の理解をより深めることができ、それを新しいものづくりに生かすことができます。

本来、ものづくりへ創意工夫は生活の中での身近な視点から生まれてきたのではないのでしょうか。使いやすい形とはどのような形なのか？使い手に喜んでもらえるデザインとは？いつの時代も作り手は想いを込めて「つくる」ことをしてきました。誰か、自分以外の他者のことを想って装飾性や芸術性をも高めてきたのです。そして試行錯誤の積み重ねが、現代の多様なデザインや高度な工芸技術に繋がったのだと感じています。授業の中でも、ものづくりの実技体験が、次世代へ繋がるデザイン思考の入り口になれば嬉しい限りです。

日本文化の中で脈々と伝えられてきた高度な技術は実に多種多様です。そうした伝統技法を重んじながらも、伝統的な意匠のみに捉われずに現代的な視点で共に新しい表現を目指していきましょう。



海空船



樺漆塗り椀

文化・芸術研究センター

両学部を繋ぐ研究活動の推進と
地域活性化の拠点



AOKI Takeshi

青木 健

教授

所属 文化・芸術研究センター

E-mail t-aoki@suac.ac.jp

キーワード ゾロアスター教 マニ教 イスラーム 古代ペルシア シルクロード

- 学歴** 東京大学文学部イスラム学科卒業（1996）
東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了（1998）
東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了（2003）
- 学位** 博士（文学）（東京大学、2003）
- 経歴** 早稲田大学理工学部非常勤講師（2009～）
立教大学文学部非常勤講師（2010～）
専修大学文学部非常勤講師（2011～2017）
慶應義塾大学言語文化研究所兼任所員（2010～）
東京大学教養学部学術研究員（2014～2018）
静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター教授（2017～）
- 研究分野** イラン学（ゾロアスター教研究、マニ教研究、イスラーム研究）
- 研究テーマ** イラン学が関与し得る古代オリエン特研究、シルクロード研究、イスラーム研究
- 研究業績**
- ・『ゾロアスター教史ー古代アーリア・中世ペルシア・現代インドー』（単著、刀水書房、2008）
 - ・『アーリア人』（単著、講談社選書メチエ438、2009）
 - ・『マニ教』（単著、講談社選書メチエ485、2010）
 - ・『古代オリエン特の宗教』（単著、講談社現代新書2159、2012）
 - ・『ゾロアスター教ズルヴァーン主義研究ーペルシア語文献『ウラマー・イエ・イスラーム』写本の蒐集と校訂ー』（単著、刀水書房、2012）
 - ・*The Wiley Blackwell Companion to the Study of Zoroastrianism*（共著、London: Blackwell, 2015）
 - ・『ペルシア帝国』（単著、講談社現代新書2582、2020）

メッセージ

古代オリエン特期とイスラーム期との間で西アジア文明のイメージが大きく異なる原因の一つは、文明を支える文字と言語の交代に求められる。メソポタミアの楔形文字の使用期間の下限は1世紀が限界と考えられ、エジプトのヒエログリフも4世紀頃には使用が途絶えた。ここに「文明」の断絶を垣間見るとしたら、メソポタミア文明もエジプト文明もイスラーム到来の遙か以前に消滅しており、古代のアッシリア帝国とイスラーム期のアッバース朝の間には、地理上の一致以外に共通性はない。

しかし、西アジア文明の中に2つだけ例外がある。独自の言語文化を維持したまま古代オリエン特期からイスラーム期まで縦貫して存続し得た唯2つの民族が、ユダヤ人とイラン人である。このうち私の専門は、後者のイラン人の宗教思想ーゾロアスター教、マニ教、イスラームーに当たる。

イラン人の西アジアへの進出は紀元前1000年頃と遅く、古代オリエン特ではメソポタミア文明やエジプト文明の担い手に遠く及ばない新参者ではあった。しかし、こと永続性に関する限り、古参者を凌駕する新参者であった。そして、そのようなイラン人を扱うイラン学は、古代オリエン特期とイスラーム期を越境して同系統の言語を使用し続けた点で、古代オリエン特諸学の中でも両期間を架橋して西アジア文明を展望する可能性を持った学問領域である。また、西アジア文明の東端に位置しただけあって、シルクロードと密接な関係を持ち、中央アジアの文明や中国の文明まで視野に入れ得る可能性を持った学問分野である。

産学官連携のご案内

産学官連携を進めていきます

受託研究等の実績

産学官連携を進めていきます

静岡文化芸術大学は、日本で初めての「文化政策学部」とユニバーサルデザインを基調とする「デザイン学部」が連携して、文化と技術の融合した新しい地平を切り拓いていきます。企業や自治体・団体の皆様とも、本学の持つ力を活かし、積極的に連携していきたいと考えています。

1. 共同研究

共同研究は、民間企業や自治体・団体等（学外機関）と本学が共通の課題について研究を行うもので、学外機関からの研究員の受け入れが可能となります。研究に必要な経費は学外機関が負担することとなりますが、研究の内容によって本学と双方が負担する場合があります。

2. 受託研究・受託事業

○受託研究

本学における受託研究は、学外機関からの委託を受けて行う研究で、その研究成果は原則として委託者に還元されます。

○受託事業

学外機関からの委託を受けて制作、調査等の業務を行うもので、委託者に成果品等として提出・報告されます。

○経費について

受託研究・事業に伴う経費は、いずれも委託者の負担となります。学外機関からの研究員等の派遣は必要ありません。主たる経費は次のとおりです。

直接経費

当該事業遂行に直接必要となる人件費、謝金、旅費、消耗品費、設備費等の経費

間接経費

当該事業に関連し直接経費以外に必要な諸経費、技術費等の経費

3. 問い合わせ先

共同研究・受託研究（事業）を希望される場合は、事務局地域連携室へ、お気軽にご連絡ください。

地域連携室 TEL 053-457-6105（直通） E-mail chiiki@suac.ac.jp

受託研究等の実績（抜粋） ※過去3ヶ年

※職位は契約時のもの

年 度	種 別	契約先等の概要	学 部	職 位	氏 名
H30	共同研究	企業（電気機器製造関連）	デザイン学部	准教授	小浜 朋子
H30	受託事業	行政（静岡県）	デザイン学部	教授	佐井 国夫
H30	受託事業	行政（静岡県・推進協議会）	デザイン学部	教授	佐井 国夫
H30	受託事業	大学生協	デザイン学部	教授	佐井 国夫
H30	受託事業	行政（静岡県）×3件	デザイン学部	教授	寒竹 伸一
H30	受託事業	行政（吉田町）	デザイン学部	教授	寒竹 伸一
H30	受託事業	企業（食料品販売）	デザイン学部	教授	寒竹 伸一
H30～R2	受託事業	行政（袋井市）	デザイン学部	教授 准教授	寒竹 伸一 亀井 暁子
H30～R1	受託事業	行政（下田市）	デザイン学部	教授 教授	寒竹 伸一 礒村 克郎
H30	受託事業	行政（静岡県）	文化・芸術 研究センター	教授 講師	石本 東生 新妻 淳子
H30～R1	受託事業	企業（輸送用機械器具関連）	デザイン学部	教授	服部 守悦
H30	受託事業	行政（静岡県・推進協議会）	デザイン学部	教授	佐藤 聖徳
H30	受託事業	企業（菓子製造）	デザイン学部	教授	伊豆 裕一
R1	共同研究	行政（静岡県）×4件	デザイン学部	教授	寒竹 伸一
R1	受託研究	企業（ソフトウェア開発関連）	デザイン学部	准教授	かわこうせい
R1	受託事業	企業（輸送用機械器具関連）	デザイン学部	教授	谷川 憲司
R1	受託事業	行政（浜松市）	文化政策学部	准教授	船戸 修一
R1	受託事業	行政（浜松市）	文化政策学部	教授	下澤 嶽
R1	受託事業	行政（静岡県）	デザイン学部	教授	佐井 国夫
R1	受託事業	行政（静岡県）	文化政策学部 デザイン学部	教授 准教授	林 左和子 かわこうせい
R1	受託事業	行政（静岡県）	デザイン学部	教授	佐井 国夫
R1	受託事業	企業（その他製品）	デザイン学部	教授	和田 和美
R1	受託事業	行政（静岡県）	デザイン学部	教授	寒竹 伸一
R1	受託事業	団体・連合会	デザイン学部	教授	伊豆 裕一
R1	受託事業	行政（静岡県）	デザイン学部	教授 教授	寒竹 伸一 礒村 克郎
R1	受託事業	行政（静岡県）	デザイン学部	教授 教授	寒竹 伸一 礒村 克郎
R2	共同研究	行政（静岡県）×2件	デザイン学部	教授	寒竹 伸一
R2	共同研究	企業（介護関連）	デザイン学部	教授	小浜 朋子
R2	共同研究	企業（印刷関連）	デザイン学部	教授	かわこうせい

R2	受託研究	行政（静岡県）× 2 件	文化政策学部	教授	池上 重弘
R2	受託事業	企業（金融関連）	文化政策学部	講師	武田 淳
R2	受託事業	企業（菓子製造）	デザイン学部	教授	伊豆 裕一
R2	受託事業	企業（インターネット関連）	デザイン学部	教授	高山 靖子
R2	受託事業	行政（静岡県）	デザイン学部	教授	服部 守悦
R2	受託事業	団体（組合）	デザイン学部	教授	かわこうせい

索引

教員氏名索引(50音順)

キーワード索引(50音順)

教員氏名索引 (50音順)

(ア行)			(サ行)			(ハ行)		
青木 健	アオキ タケシ	106	崔 学松	サイ ガクマツ	38	羽田 隆志	ハダ タカシ	90
天内 大樹	アマナイ ダイキ	96	佐井 国夫	サイ クニオ	83	服部 守悦	ハットリ モリヨシ	91
荒川 朋子	アラカワ トモコ	97	迫 秀樹	サコ ヒデキ	84	花澤 信太郎	ハナザワ シンタロウ	92
池上 重弘	イケガミ シゲヒロ	21	佐藤 聖徳	サトウ キヨノリ	85	林 左和子	ハヤシ サワコ	49
池田 泰教	イケダ ヤスノリ	102	佐野 由紀子	サノ ユキコ	25	日比谷 憲彦	ヒビヤ ノリヒコ	93
伊豆 裕一	イズ ユウイチ	75	下澤 嶽	シモサワ タカシ	20	藤井 尚子	フジイ ナオコ	94
磯村 克郎	イソムラ カツロウ	76	鈴木 浩孝	スズキ ヒロタカ	46	藤井 康幸	フジイ ヤスユキ	50
井上 由里子	イノウエ ユリコ	64	鈴木 元子	スズキ モトコ	27	船戸 修一	フナト シュウイチ	51
林 在圭	イム ゼエギユ	22	瀬戸 知也	セト トモヤ	28			
岩崎 敏之	イワサキ トシユキ	77	曾根 秀一	ソネ ヒデカズ	54	(マ行)		
植田 道則	ウエダ ミチノリ	78	(タ行)			松田 達	マツダ タツ	101
梅田 英春	ウメダ ヒデハル	16	高木 邦子	タカギ クニコ	29	松本 茂章	マツモト シゲアキ	63
梅若 猶彦	ウメワカ ナオヒコ	57	高島 知佐子	タカシマ チサコ	66	的場 ひろし	マトバ ヒロシ	71
岡田 建志	オカダ タケシ	24	高山 靖子	タカヤマ ヤスコ	87	水谷 悟	ミズタニ サトル	34
奥中 康人	オクナカ ヤスト	56	武田 淳	タケダ ジュン	39	美濃部 京子	ミノベ キョウコ	35
小田 伊織	オダ イオリ	103	武田 好	タケダ ヨシミ	30	宮田 圭介	ミヤタ ケイスケ	70
小浜 朋子	オバマ トモコ	79	立入 正之	タチイリ マサユキ	60	森 俊太	モリ シュンタ	13
(カ行)			田中 啓	タナカ ヒラキ	47	森山 一郎	モリヤマ イチロウ	44
片桐 弥生	カタギリ ヤヨイ	58	田中 裕二	タナカ ユウジ	67	(ヤ行)		
片山 泰輔	カタヤマ タイスケ	59	谷川 真美	タニガワ マミ	61	山本 一樹	ヤマモト カズキ	95
加藤 裕治	カトウ ユウジ	17	徳増 克己	トクマス カツミ	40	兪 嶸	ユ エイ	36
上山 典子	カミヤマ ノリコ	65	(ナ行)			横田 秀樹	ヨコタ ヒデキ	37
亀井 暁子	カメイ アキコ	80	永井 敦子	ナガイ アツコ	31	横山 俊夫	ヨコヤマ トシオ	09
かわこうせい	カワ コウセイ	81	永井 聡子	ナガイ サトコ	62	四方田 雅史	ヨモダ マサフミ	52
寒竹 伸一	カンタケ シンイチ	12	長嶋 洋一	ナガシマ ヨウイチ	88	(ワ行)		
黒田 宏治	クロダ コウジ	82	中田 健太郎	ナカタ ケンタロウ	42	和田 和美	ワダ カズミ	74
小杉 大輔	コスギ ダイスケ	45	中野 民雄	ナカノ タミオ	98	(A~Z)		
小林 淑恵	コバヤシ ヨシエ	53	中村 美帆	ナカムラ ミホ	68	Edward SARICH	エドワード サリッチ	23
			永山 広樹	ナガヤマ ヒロキ	89	Jack RYAN	ジャック ライアン	26
			新妻 淳子	ニイツマ ジュンコ	99	Jérôme BOULBÈS	ジェローム ブルベス	86
			西田 かほる	ニシダ カオル	32			
			西脇 靖洋	ニシワキ ヤスヒロ	41			
			二本松 康宏	ニホンマツ ヤスヒロ	33			
			丹羽 哲矢	ニワ テツヤ	100			
			野村 卓志	ノムラ タカシ	48			

キーワード索引 (50音順)

ア行

アジア	文化政策学科 四方田雅史	52
アメリカの芸術文化政策	芸術文化学科 片山 泰輔	59
アート	デザイン学科 荒川 朋子	97
アートアニメーション	デザイン学科 ジェローム・ブルバ	86
アートワーク (ロウ防染)	デザイン学科 藤井 尚子	94
アール・ブリュット	芸術文化学科 井上由里子	64

イ行

生きがい	文化政策学科 森 俊太	13
イギリス	国際文化学科 美濃部京子	35
イスラーム	文化芸術センター 青木 健	106
イタリア語	国際文化学科 武田 好	30
異文化コミュニケーション	国際文化学科 崔 学松	38
イラストレーション	デザイン学科 かわこうせい	81
因果的認識	文化政策学科 小杉 大輔	45
インターネット	文化政策学科 野村 卓志	48
インダストリアルデザイン	デザイン学科 磯村 克郎	76
インタラクティブデザイン	デザイン学科 的場ひろし	71
インドネシア	国際文化学科 池上 重弘	21
インドネシア音楽	芸術文化学科 梅田 英春	16

ウ行

ウェブデザイン	デザイン学科 和田 和美	74
ヴェリズモ・オペラ	国際文化学科 武田 好	30
ヴェルナー・ヘーゲマン	デザイン学科 松田 達	101
ウェルビーイング	デザイン学科 長嶋 洋一	88
ウッドクラフト	デザイン学科 佐藤 聖徳	85
漆	デザイン学科 小田 伊織	103
運営	芸術文化学科 永井 聡子	62

エ行

英語教育	国際文化学科 横田 秀樹	37
英語圏文化	国際文化学科 鈴木 元子	27
映像	デザイン学科 ジェローム・ブルバ	86
映像表現	デザイン学科 池田 泰教	102
映像文化	文化政策学科 加藤 裕治	17
英米文学	国際文化学科 鈴木 元子	27
エコツーリズム	国際文化学科 武田 淳	39
絵本	デザイン学科 かわこうせい	81
演劇	芸術文化学科 永井 聡子	62
演出	芸術文化学科 永井 聡子	62

オ行

扇絵	芸術文化学科 片桐 弥生	58
織	デザイン学科 荒川 朋子	97
音楽情報科学	デザイン学科 長嶋 洋一	88

カ行

外国人	国際文化学科 池上 重弘	21
改葬儀礼	国際文化学科 池上 重弘	21
科学術語	横山 俊夫	09
格差問題	国際文化学科 齋 嶸	36
学生支援	文化政策学科 小杉 大輔	45
過疎	文化政策学科 船戸 修一	51
家族形成	文化政策学科 小林 淑恵	53
学校文化	国際文化学科 瀬戸 知也	28
ガムラン	芸術文化学科 梅田 英春	16
環境教育	デザイン学科 中野 民雄	98
環境計画	デザイン学科 植田 道則	78
環境社会学	文化政策学科 船戸 修一	51
環境心理	デザイン学科 小浜 朋子	79
環境デザイン	デザイン学科 中野 民雄	98
環境問題	国際文化学科 武田 淳	39
観客	芸術文化学科 永井 聡子	62
韓国の織物	国際文化学科 林 在圭	22
韓国の食文化	国際文化学科 林 在圭	22
韓国の生活文化	国際文化学科 林 在圭	22
官民協働政策	芸術文化学科 松本 茂章	63

キ行

企業家活動	文化政策学科 曾根 秀一	54
企業と文化	芸術文化学科 田中 裕二	67
企業の衰退と発展	文化政策学科 曾根 秀一	54
キャリア教育	国際文化学科 瀬戸 知也	28
キャリア教育	国際文化学科 高木 邦子	29
教育空間	デザイン学科 亀井 暁子	80
教育工学	文化政策学科 小杉 大輔	45
教育社会学	文化政策学科 森 俊太	13
教育問題	国際文化学科 瀬戸 知也	28
行財政改革	文化政策学科 田中 啓	47
行政評価	文化政策学科 田中 啓	47
近現代の日本音楽史	芸術文化学科 奥中 康人	56
近世	国際文化学科 西田かほる	32
金属造形	デザイン学科 山本 一樹	95

金属彫刻	デザイン学科	山本 一樹	95	高度人材	文化政策学科	小林 淑恵	53
近代日本の新聞・雑誌メディア ク行	国際文化学科	水谷 悟	34	公立文化施設	芸術文化学科	片山 泰輔	59
空間デザイン	デザイン学科	花澤信太郎	92	口承文芸	国際文化学科	美濃部京子	35
クラウドコンピューティング	文化政策学科	野村 卓志	48	小売流通	文化政策学科	森山 一郎	44
グラフィックデザイン	デザイン学科	和田 和美	74	国際協力	国際文化学科	下澤 嶽	20
グラフィックデザイン	デザイン学科	佐井 国夫	83	国際協力	国際文化学科	武田 淳	39
クラフトデザイン	デザイン学科	永山 広樹	89	古代ヘルシア	文化芸術センター	青木 健	106
クラフトデザイン	デザイン学科	小田 伊織	103	鼓笛隊とラッパ	芸術文化学科	奥中 康人	56
クレイモデル	デザイン学科	服部 守悦	91	子どもの社会化	国際文化学科	瀬戸 知也	28
グローバルデザイン教育	デザイン学科	高山 靖子	87	コンセプト	デザイン学科	服部 守悦	91
グローバル・ヒストリー	文化政策学科	四方田雅史	52	コンテンツ制作	デザイン学科	的場ひろし	71
君主論	国際文化学科	武田 好	30	コンピューターショナルデザイン	デザイン学科	松田 達	101
ケ行				サ行			
景観・まちづくり計画	デザイン学科	寒竹 伸一	12	サインデザイン	デザイン学科	永山 広樹	89
経済成長	国際文化学科	兪 嶸	36	産業	デザイン学科	黒田 宏治	82
芸術支援	芸術文化学科	田中 裕二	67	産業史	文化政策学科	四方田雅史	52
芸術支援の補助金制度	芸術文化学科	片山 泰輔	59	産業集積	文化政策学科	四方田雅史	52
芸術思想史	芸術文化学科	井上由里子	64	シ行			
芸術政策・産業	芸術文化学科	立入 正之	60	視覚情報	デザイン学科	小浜 朋子	79
芸術論	芸術文化学科	谷川 真美	61	視覚文化論	国際文化学科	中田健太郎	42
芸能者	国際文化学科	西田かほる	32	持続可能都市	文化政策学科	藤井 康幸	50
ゲーム	デザイン学科	和田 和美	74	自治体財政	文化政策学科	田中 啓	47
ゲーム	デザイン学科	ジェロム・ブルバ	86	自治体文化政策	芸術文化学科	松本 茂章	63
劇場	芸術文化学科	永井 聡子	62	児童サービス	文化政策学科	林 左和子	49
劇場計画	芸術文化学科	永井 聡子	62	老舗	文化政策学科	曾根 秀一	54
限界集落	文化政策学科	船戸 修一	51	地場産業	文化政策学科	曾根 秀一	54
言語学	国際文化学科	横田 秀樹	37	市民社会	国際文化学科	下澤 嶽	20
言語習得	国際文化学科	横田 秀樹	37	社会的認知	文化政策学科	小杉 大輔	45
源氏絵	芸術文化学科	片桐 弥生	58	社会変動	文化政策学科	森 俊太	13
現代美術	デザイン学科	山本 一樹	95	社会包摂	文化政策学科	森 俊太	13
現代美術	芸術文化学科	谷川 真美	61	社会理論	文化政策学科	森 俊太	13
建築・インテリア	デザイン学科	植田 道則	78	宗教	国際文化学科	西田かほる	32
建築空間の認識論	デザイン学科	天内 大樹	96	就業キャリア	文化政策学科	小林 淑恵	53
建築計画	デザイン学科	寒竹 伸一	12	シュルレアリスム	国際文化学科	中田健太郎	42
建築構造学	デザイン学科	岩崎 敏之	77	消費社会	文化政策学科	加藤 裕治	17
建築生産	デザイン学科	新妻 淳子	99	情報環境	デザイン学科	磯村 克郎	76
建築設計	デザイン学科	寒竹 伸一	12	情報処理	デザイン学科	的場ひろし	71
建築設計	デザイン学科	亀井 暁子	80	情報デザイン	デザイン学科	宮田 圭介	70
建築デザイン	デザイン学科	花澤信太郎	92	情報リテラシー教育	文化政策学科	野村 卓志	48
コ行				シルクロード	文化芸術センター	青木 健	106
公共性	デザイン学科	磯村 克郎	76	人工知能	デザイン学科	かわこうせい	81
				人口減少	文化政策学科	船戸 修一	51

人口減少社会	文化政策学科 藤井 康幸	50	多文化共生のプロセス	国際文化学科 崔 学松	38
神職	国際文化学科 西田かほる	32	鍛金	デザイン学科 山本 一樹	95
ス行			ダンス	芸術文化学科 永井 聡子	62
垂直的統合	文化政策学科 鈴木 浩孝	46	チ行		
垂直的分離	文化政策学科 鈴木 浩孝	46	地域	デザイン学科 黒田 宏治	82
スケッチ	デザイン学科 服部 守悦	91	地域活性化	文化政策学科 藤井 康幸	50
スケッチング	デザイン学科 長嶋 洋一	88	地域産業	文化政策学科 森山 一郎	44
ステアリングシステム	デザイン学科 羽田 隆志	90	地域創生	デザイン学科 植田 道則	78
スマートデザイン	デザイン学科 中野 民雄	98	地域デザイン	デザイン学科 永山 広樹	89
諏訪信仰	国際文化学科 二本松康宏	33	地域統合	国際文化学科 西脇 靖洋	41
セ行			地域と建築	デザイン学科 亀井 暁子	80
生活アート	デザイン学科 佐藤 聖徳	85	地域の個性	文化政策学科 藤井 康幸	50
生活研究	デザイン学科 小浜 朋子	79	地域福祉	文化政策学科 小林 淑恵	53
政策評価	文化政策学科 田中 啓	47	地域ブランド	文化政策学科 森山 一郎	44
生成文法	国際文化学科 横田 秀樹	37	地域防災	デザイン学科 中野 民雄	98
生体情報処理	デザイン学科 長嶋 洋一	88	地方青年の言論空間	国際文化学科 水谷 悟	34
制度	文化政策学科 四方田雅史	52	地方都市	デザイン学科 磯村 克郎	76
生理人類学	デザイン学科 迫 秀樹	84	中国の財政構造	国際文化学科 兪 嶸	36
西洋音楽	芸術文化学科 上山 典子	65	中国の政府間財政関係	国際文化学科 兪 嶸	36
西洋美術史	芸術文化学科 立入 正之	60	中国の地域振興	国際文化学科 兪 嶸	36
青年期の対人関係	国際文化学科 高木 邦子	29	中山間地域	文化政策学科 船戸 修一	51
関一	デザイン学科 松田 達	101	中心市街地のリノベーション	デザイン学科 天内 大樹	96
セクター協働	文化政策学科 藤井 康幸	50	ツ行		
設計プロセス	デザイン学科 丹羽 哲矢	100	使いやすさ	デザイン学科 迫 秀樹	84
設計理念	デザイン学科 丹羽 哲矢	100	テ行		
節用集	横山 俊夫	09	テキスタイル	デザイン学科 荒川 朋子	97
繊維造形	デザイン学科 荒川 朋子	97	テキスタイルデザイン (サーフェイス、テクスチャー)	デザイン学科 藤井 尚子	94
戦間期の建築運動	デザイン学科 天内 大樹	96	デザイン科学	デザイン学科 伊豆 裕一	75
ソ行			デザイン教育	デザイン学科 岩崎 敏之	77
造形	デザイン学科 佐藤 聖徳	85	デザイン思考	デザイン学科 伊豆 裕一	75
造形表現	デザイン学科 小田 伊織	103	デザイン手法	デザイン学科 丹羽 哲矢	100
相互依存関係	文化政策学科 鈴木 浩孝	46	デザイン政策	デザイン学科 黒田 宏治	82
ゾロアスター教	文化芸術センター 青木 健	106	デザインとエンジニアリングの融合	デザイン学科 植田 道則	78
ソール・ベロー	国際文化学科 鈴木 元子	27	デザインマネジメント	デザイン学科 伊豆 裕一	75
タ行			デザインマネジメント	デザイン学科 高山 靖子	87
「大正デモクラシー」	国際文化学科 水谷 悟	34	デジタルアーカイブ	デザイン学科 池田 泰教	102
耐震診断	デザイン学科 岩崎 敏之	77	電子書籍	文化政策学科 林 左和子	49
タイムベースメディア	デザイン学科 池田 泰教	102	伝承文学	国際文化学科 二本松康宏	33
鷹狩り	国際文化学科 二本松康宏	33	伝説	国際文化学科 二本松康宏	33
匠	デザイン学科 小田 伊織	103	伝統工芸	デザイン学科 永山 広樹	89
匠	デザイン学科 新妻 淳子	99	伝統工芸	デザイン学科 山本 一樹	95
多文化共生	国際文化学科 池上 重弘	21			

ト行				浜松ご当地ソング	芸術文化学科 奥中 康人	56
道具デザイン	デザイン学科	佐藤 聖徳	85	バラッド	国際文化学科 美濃部京子	35
動物介在教育と空間	デザイン学科	亀井 暁子	80	バリ芸能	芸術文化学科 梅田 英春	16
土佐派	芸術文化学科	片桐 弥生	58	ヒ行		
都市	国際文化学科	永井 敦子	31	ピアノ編曲	芸術文化学科 上山 典子	65
都市計画の起源	デザイン学科	松田 達	101	美学	芸術文化学科 谷川 真美	61
都市デザイン	デザイン学科	花澤信太郎	92	比較経済史	文化政策学科 四方田雅史	52
都市計画	デザイン学科	寒竹 伸一	12	比較美術史	芸術文化学科 立入 正之	60
図書館	文化政策学科	林 左和子	49	東アジアの社会と文化	国際文化学科 崔 学松	38
図書館史	文化政策学科	林 左和子	49	ビジュアルコミュニケーション	デザイン学科 佐井 国夫	83
トランスポートーション	デザイン学科	服部 守悦	91	美術教育	デザイン学科 荒川 朋子	97
ナ行				ヒューマンインタフェース	デザイン学科 宮田 圭介	70
ナラティブ・アプローチ	国際文化学科	瀬戸 知也	28	表現力	横山 俊夫	09
南欧諸国	国際文化学科	西脇 靖洋	41	貧困	国際文化学科 武田 淳	39
ニ行				フ行		
日仏文化交流	芸術文化学科	松本 茂章	63	ファミリービジネス	文化政策学科 曾根 秀一	54
日用百科書		横山 俊夫	09	フィクション/ドキュメンタリー	デザイン学科 池田 泰教	102
日韓村落研究	国際文化学科	林 在圭	22	風景とランドスケープ	デザイン学科 花澤信太郎	92
日韓比較文化	国際文化学科	林 在圭	22	フェアトレード	国際文化学科 下澤 嶽	20
二部料金制	文化政策学科	鈴木 浩孝	46	フェアトレード	国際文化学科 武田 淳	39
日本近現代史	国際文化学科	水谷 悟	34	舞台芸術論	芸術文化学科 永井 聡子	62
日本建築史	デザイン学科	新妻 淳子	99	舞台芸術論	芸術文化学科 井上由里子	64
日本語学	国際文化学科	佐野由紀子	25	フランス近世史	国際文化学科 永井 敦子	31
日本語教育	国際文化学科	佐野由紀子	25	フランス文学	芸術文化学科 井上由里子	64
日本伝統建築	デザイン学科	新妻 淳子	99	フランス文学	国際文化学科 中田健太郎	42
人間機械システム	デザイン学科	宮田 圭介	70	プロダクトデザイン	デザイン学科 伊豆 裕一	75
人間工学	デザイン学科	迫 秀樹	84	プロダクトデザイン	デザイン学科 佐藤 聖徳	85
人間中心デザイン	デザイン学科	迫 秀樹	84	プロダクトデザイン	デザイン学科 永山 広樹	89
ノ行				プロモーション	デザイン学科 黒田 宏治	82
ノヴァリナ	芸術文化学科	井上由里子	64	文化	国際文化学科 永井 敦子	31
農村社会学	文化政策学科	船戸 修一	51	文学享受	芸術文化学科 片桐 弥生	58
乗りもの	デザイン学科	羽田 隆志	90	文化権(文化的権利)	芸術文化学科 中村 美帆	68
ハ行				文化交渉史	横山 俊夫	09
博物館運営・経営	芸術文化学科	田中 裕二	67	文化財	デザイン学科 新妻 淳子	99
博物館学	芸術文化学科	立入 正之	60	文化財科学	芸術文化学科 立入 正之	60
博物館学	芸術文化学科	田中 裕二	67	文化施設研究	芸術文化学科 松本 茂章	63
バタック	国際文化学科	池上 重弘	21	文化資源学	芸術文化学科 中村 美帆	68
パッケージデザイン	デザイン学科	佐井 国夫	83	文化政策学	芸術文化学科 中村 美帆	68
パッケージデザイン	デザイン学科	小浜 朋子	79	文化政策と法・制度	芸術文化学科 中村 美帆	68
発達障害	デザイン学科	宮田 圭介	70	文化政策の計画と評価	芸術文化学科 片山 泰輔	59
パノラマVR映像	デザイン学科	和田 和美	74	文化とまちづくり	芸術文化学科 松本 茂章	63
浜松	国際文化学科	池上 重弘	21	文化変容	国際文化学科 岡田 建志	24

文法習得	国際文化学科 横田 秀樹	37	ヤ行		
文明	横山 俊夫	09	やまと絵	芸術文化学科 片桐 弥生	58
へ行			ユ行		
ベトナム近代思想史	国際文化学科 岡田 建志	24	有能感	国際文化学科 高木 邦子	29
ベトナム語	国際文化学科 岡田 建志	24	ユーザインタフェース	デザイン学科 的場ひろし	71
ホ行			ユダヤ系文学	国際文化学科 鈴木 元子	27
ポピュラー文化	文化政策学科 加藤 裕治	17	ユニバーサルデザイン	デザイン学科 小浜 朋子	79
ボランティア	国際文化学科 下澤 嶽	20	ユニバーサルデザイン	デザイン学科 高山 靖子	87
ポリス(治安行政)	国際文化学科 永井 敦子	31	ユニバーサルデザイン絵本	文化政策学科 林 左和子	49
ポルトガル語圏諸国	国際文化学科 西脇 靖洋	41	ラ行		
翻訳	国際文化学科 鈴木 元子	27	ライフスタイル	デザイン学科 服部 守悦	91
マ行			ライフスタイル	デザイン学科 中野 民雄	98
マキャヴェッリ	国際文化学科 武田 好	30	ランドスケープ計画	デザイン学科 寒竹 伸一	12
マーケティング戦略	文化政策学科 森山 一郎	44	リ行		
マザーグース	国際文化学科 美濃部京子	35	リスト	芸術文化学科 上山 典子	65
マニ教	文化芸術センター 青木 健	106	リノベーション	デザイン学科 植田 道則	78
マネジメント	デザイン学科 黒田 宏治	82	領域横断	デザイン学科 磯村 克郎	76
マンガ	国際文化学科 中田健太郎	42	ル行		
ミ行			ルーアン	国際文化学科 永井 敦子	31
神子	国際文化学科 西田かほる	32	ル・コルビュジェ	デザイン学科 松田 達	101
ミュージカル	芸術文化学科 永井 聡子	62	ロ行		
魅力	デザイン学科 羽田 隆志	90	ローカリティ	デザイン学科 高山 靖子	87
民主主義と大衆社会	国際文化学科 水谷 悟	34	ワ行		
民族運動	国際文化学科 岡田 建志	24	ワヤン	芸術文化学科 梅田 英春	16
民族音楽	芸術文化学科 梅田 英春	16	和洋折衷音楽	芸術文化学科 奥中 康人	56
ム行			数字		
昔話	国際文化学科 二本松康宏	33	3輪自動車	デザイン学科 羽田 隆志	90
昔話	国際文化学科 美濃部京子	35	18世紀日本社会	横山 俊夫	09
ムード歌謡	芸術文化学科 奥中 康人	56	19世紀	芸術文化学科 上山 典子	65
メ行			3DCG	デザイン学科 ジェロム・ブルバ	86
メディアアート	デザイン学科 ジェロム・ブルバ	86	A~V		
メディアアート	デザイン学科 長嶋 洋一	88	AI	デザイン学科 かわこうせい	81
メディアアート	デザイン学科 的場ひろし	71	Applied linguistics	国際文化学科 エドワード・サリッチ	23
メディアアート	デザイン学科 和田 和美	74	AR	デザイン学科 ジェロム・ブルバ	86
メディアと地域の関係	文化政策学科 加藤 裕治	17	communicative language teaching	国際文化学科 エドワード・サリッチ	23
メディアリテラシー	文化政策学科 野村 卓志	48	English Medium Instruction	国際文化学科 ジャック・ライアン	26
モ行			language testing and evaluation	国際文化学科 エドワード・サリッチ	23
木質構造	デザイン学科 岩崎 敏之	77	NGO	国際文化学科 下澤 嶽	20
モーターサイクル	デザイン学科 羽田 隆志	90	NPO	国際文化学科 下澤 嶽	20
モダニズム	芸術文化学科 谷川 真美	61	SLA	国際文化学科 ジャック・ライアン	26
木工	デザイン学科 小田 伊織	103	VI,BIデザイン	デザイン学科 佐井 国夫	83
木構造	デザイン学科 植田 道則	78	VR	デザイン学科 ジェロム・ブルバ	86

発行：公立大学法人静岡文化芸術大学

編集：企画室

〒430-8533 静岡県浜松市中区中央2-1-1

TEL 053-457-6113

FAX 053-457-6123

E-mail kikaku@suac.ac.jp

<https://www.suac.ac.jp/>



○JR浜松駅より徒歩15分

○遠鉄バス「文化芸術大学」下車

